

# 令和7年度自己点検・自己評価委員会総会

日時 令和8年4月25日（土）第1部 10:00～12:20

第2部 13:30～14:25

第3部 14:30～15:00

会場 F講義棟



あなたの学びを あなたのカタチに

九州医療科学大学

Kyushu University of Medical Science

学校法人 順正学園

建学の理念

学生一人ひとりのもつ能力を最大限に  
引き出し引き伸ばし、社会に有為な  
人材を養成する。

加野



# 令和7年度自己点検・自己評価委員会総会プログラム

日 時：令和8年4月25日（土）9：55～15：00（終了予定）

場 所：F講義棟

開催要項	9:55～10:00	令和7年度 実績評価優秀者表彰	
	10:00～10:05	理事長・総長挨拶	加計 勇樹 理事長・総長
	10:05～10:15	学長挨拶（外部評価員紹介を含む）	池ノ上 克 学長
第一部		《実施部会報告》【各5分程度】	
	10:15～10:20	基本事項検討部会	池脇 信直 部会長
	10:20～10:25	教育改革部会	三宮 基裕 部会長
	10:25～10:30	研究活動部会	池脇 信直 部会長
	10:30～10:35	学生サポート部会	横山 裕 部会長
	10:35～10:40	キャリアサポート部会	徳永 仁 部会長
	10:40～10:45	社会貢献部会	川崎 順子 部会長
	10:45～10:50	学生受入部会	渡邊 一平 部会長
	10:50～11:00	質疑応答	
		《3Pを踏まえた各学科の中期計画実施状況報告》【各5分程度】	
	11:00～11:05	スポーツ健康福祉学科	正野 知基 学科長
	11:05～11:10	臨床福祉学科	稲田 弘子 学科長
	11:10～11:15	臨床心理学科	前田 直樹 学科長
	11:15～11:20	通信教育部	川崎 順子 部長
	11:20～11:30	質疑応答	
	11:30～11:35	薬学科	木村 博昭 学科長
	11:35～11:40	動物生命薬科学科	紺野 克彦 学科長
	11:40～11:45	生命医科学科	山本 成郎 学科長
	11:45～11:50	大学院研究科総括	正野 知基 研究科長
	11:50～12:00	質疑応答	
		《令和6年度授業アンケート結果報告》	
	12:00～12:05	結果報告	三宮 基裕 教育開発副部門長
		《講評・総評》	
	12:05～12:15	外部評価員 講評	高森 賢一 延岡市教育長 森 龍彦 延岡商工会議所会頭
第一部終了	12:15～12:20	副学長 総評	池脇 信直 副学長
昼休憩	12:20～13:30		
第二部		《事務部門報告》【各5分程度】	
	13:30～13:35	大学事務局	的場 嘉男 事務局長
	13:35～13:40	庶務部 庶務課 及び 附属図書館	大石 正憲 課長
	13:40～13:45	庶務部 会計課	牧野 喜代子 参事
	13:45～13:50	教務部 教務課	齋藤 千亜里 課長
	13:50～13:55	教務部 教育イノベーション課	井上 真紀子 課長
	13:55～14:00	教務部 通信教育事務課	矢野 朋光 次長
	14:00～14:05	学生部 学生課（英語村含む）	松本 祐子 課長
	14:05～14:10	キャリアサポートセンター	猪股 健久 課長
	14:10～14:15	入試広報室	高木 真理子 参事
	14:15～14:25	事務部門 質疑応答	
第三部	事務部門SD研修会	14:30～15:00	

## \*実施部会 点検・評価項目（最重点項目に◎、重点項目に○）

①使命・目的（教育目的の設定と反映を含む）、②学生支援（学生の受入れ、各種支援、学修環境の整備、意見要望への対応を含む）、③教育課程（卒業認定、教授方法、学修成果の点検評価を含む）、④教員・職員（教学マネジメントの機能性、教員配置及びFD・SD、研究支援を含む）、⑤経営・管理と財務、⑥内部質保証、⑦地域貢献（人的、物的、知的資源等の社会への提供を含む）、⑧倫理教育（人権啓発、ハラスメント防止、情報教育等を含む）◎国際化（人材育成、国際交流推進等を含む）

令和7年度 九州医療科学大学  
自己点検・自己評価委員会総会 講評

教育面においては、各学科が積極的に国家試験対策を行っており、愛玩動物看護師国家試験合格率100%など、着実に成果が上がっていることは評価しております。また、地域連携の分野においても、高大連携校に対する探究学習への協力、地域イベントへの参画、生涯教育講座の実施など、地域に根差した大学として、地域医療人材の育成において中核的な役割を担っておられることに敬意を表します。

その一方で、自己点検報告書に記載されているとおり、宮崎県内の就職率については課題も見られる状況であると考えております。こうした課題を解決するべく、今後は大学と地域企業、そして行政がより一層連携し、インターンシップや共同事業などを通じて、学生が地域で働く魅力を実感できる機会を商工会議所を代表し増やしていきたいと実感いたしました。

これまで培ってこられた地域連携の強みを活かしつつ、研究力の向上、ブランド力の強化を図られ、地域を牽引する大学へとさらなる発展を遂げられることを期待いたします。

令和8年4月25日

外部評価員  
延岡商工会議所 会頭

森 龍 亮

---

令和7年度 九州医療科学大学  
自己点検・自己評価委員会総会 講評

各部会・各学部・学科からの自己点検・自己評価の報告はいずれも丁寧かつ具体的であり、「学生一人ひとりの能力を最大限に引き出し、社会に有為な人材を養成する」という建学の理念が、教育実践として着実に具現化されていると感じました。特に、附属図書館の市民開放や公開講座、子どもから大人までを対象とした多様な学習機会の提供など、大学が地域に開かれた存在として機能している点は高く評価できます。

また、学生が教育現場や地域活動に直接関わる実践的な学びの機会が豊富に用意されており、「学生を社会の中で育てる」という理念が一貫して貫かれている点が印象的でした。これらの取組は、学生の成長のみならず、地域への知的貢献という観点からも大きな意義を有しています。

一方で、今後は、自己点検・自己評価の結果を次の改善へとどのように結び付けていくかが重要となります。PDCAサイクルの確実な循環とともに、各部会や学科での優れた実践を全学的に共有し、大学全体の質保証につなげていく取組の一層の充実を期待します。

令和8年4月25日

外部評価員

延岡市教育委員会 教育長

高 森 賢 一

---

## 令和7年度 自己点検・自己評価委員会報告書

部会名\点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
基本事項検討部会 ※R5 より図書館部会を統合	◎	○	○	○	○	◎	○	○	○

### ○今年度の取組状況

建学の理念を基盤に、本学の第3期中期目標・中期計画(大学全体)に沿って、自己点検・自己評価に関する評価結果の確認を行った。関連する各部会と各委員会からの現状報告や内部質保証委員会からの提言も踏まえ、基本事項の検証・確認を行った。また、本年度は日本高等評価機構の認証評価を受審し、機構が定める評価基準第4期(内部質保証の重視とその実質性を問う評価)の基準に「適合」と認定された。引き続き、内部質保証体制の改善・充実が行えるよう、内部質保証委員会、自己点検・自己評価委員会ならびに中核センター会議と連携しながら、基本事項の見直しや内部質保証活動に必要な評価・検討を行う予定である。評価スコアは、定性的評価として、5.達成している、4.かなり進んでいる、3.普通、2.やや足りない、1.ほとんど進んでいない、を採用した。

#### 1. 3つのポリシーを踏まえた、人材養成に必要な使命・目的等の評価・検討

本学の第3期中期目標・中期計画を踏まえ、3つのポリシーの適正化と学科教員内での共有、学生への周知を行った。また、内部質保証委員会、自己点検・自己評価委員会ならびに中核センター会議や大学教授会とも連携しながら、建学の理念や教育目標に沿った人材養成の達成度、さらに、3つのポリシーと履修系統図との整合性、学修成果の可視化について評価・検討した。各学科の教員と学生自身が学修活動の意義や目的を十分に理解することで、学修成果が更に高まることはもちろん、人材養成に関するより質の高い自己点検・自己評価の実施に繋がるものと考えられた。

(評価スコア 4)

#### 2. 内部質保証の為に体制整備や自己点検・自己評価との更なる連動に関する評価・検討

内部質保証委員会を独立させることで、自己点検・自己評価が十分に機能しているか協議・検討し、内部質保証体制の更なる確立・推進に努めた。また、内部質保証委員会により提出された改善意見に基づき、自己点検・自己評価におけるPDCAサイクルの整備と評価を行った。その結果、日本高等評価機構が定める評価基準第4期に「適合」と認定された。今後は、各部会と各委員会の適正なマッチングを行うとともに、内部質保証の体制整備の改善について検討する予定である。

(評価スコア 4)

#### 3. 内部質保証の機能性を高める為の状況把握や状況分析等の実施に関する評価・検討

内部質保証委員会を独立させ、自己点検・自己評価委員会と連携して評価を実施する事で、適切な点検・評価(改善)の状況把握と分析が可能となった。さらに、内部質保証委員会の機能強化として、教育イノベーション委員会とIR推進委員会からの情報提供を最大限に活用することで内部質保証の強化を図った。関係部会や委員会ならびに中核センター会議などで情報を共有することで、内部質保証のさらなる機能を高めることができた。

(評価スコア 4)

#### 4. 学生生活、学修支援、学修環境改善など、学生サービス全般に関する評価・検討

学修支援体制を更に強化すべく、各委員会の見直しや再編、学修環境の整備を行った。その結果、1号棟1階の学生共用ラウンジスペースは、学生サービス全般に関する機能を実現でき

た。また、学修支援システム（学修ポートフォリオとマイステップ）の積極的活用、学生が気軽に相談できる相談窓口の体制整備など、各部署との連携を強化し、きめ細かな対応を行った。学修支援に欠かせないネットワーク（Wi-Fi）環境も整備した。令和8年度からアカデミックアドバイジング推進機構（AAP）を創設し、さらなる学修環境の改善や学生サービス向上の取り組みを実施する計画である。

（評価スコア 4）

#### 5. 図書館等の学生利用施設の有効活用に関する評価・検討

地域に開かれた大学として、本学の学生だけでなく市民にも附属図書館を開放しており、これまで同様に学生、教職員、市民にも利用しやすい開かれた図書館を目標に、利用促進に努めた。また、日曜祝日にも図書館を開放することで国家資格取得を目指す学生が学習する場所を提供できた。図書館内のグループ学習スペースである「ラーニングcommons」は、有効に活用されている。

（評価スコア 3）

#### 6. CP や DP に沿った教育課程及び教授方法の改善に関する評価・検討

全学アセスメントポリシーと全学 DP を基軸に、全学科のアセスメントポリシーを作成するとともに、DP 資質、人間力、学士力の醸成に関してアンケート調査を実施した。また、ジェネリックスキルのアセスメントテスト（GPS-Academic）は、CP や DP に沿った教育課程および教授方法の改善に大きく寄与した。さらに、学修ポートフォリオの結果をレーダーチャートで可視化し、学修行動・学生生活アンケートを伴走させることで、CP や DP に沿った教育課程および教授方法の改善を実施した。FD 研修の一環として、教員相互の授業参観制度の強化推進、授業評価のフィードバックに関する方法論の検討も行った。

（評価スコア 4）

#### 7. 大学の強みや特色を活かした教育研究活動の推進に関する評価・検討

本学の強みや特色を活かした教育研究活動の強化について、中核センター教育開発部門と研究推進部門を中心に教育研究活動を推進した。本学の数理・データサイエンス・AI教育（リテラシーレベル）プログラムを本学のブランド教科として位置付けるとともに、単位取得者には受講修了認定証を交付した。研究活動としては、学内共同研究の成果発表会、医農工連携プロジェクトへの出展、QOL研究機構公開シンポジウムの開催など、本学の強みや特色を活かした教育研究活動を推進した。

（評価スコア 4）

#### 8. 安定した財務基盤確立、経営の規律と誠実性の維持を行う為の機能に関する評価・検討

安定した財務基盤の確立の為、教学体制の組織改革、入試広報室を中心に学生募集の見直し、ブランド形成の為の施策を検討・実施した。キャンパス見学会、合格者対象見学会、出張講義、分野別ガイダンスを推進した。オープンキャンパスでは、体験型イベントを新たに導入し、各種デバイスを活用した広報活動も実施した。ブランディング推進委員会では、ブランドコア構築におけるインナーブランディングとアウターブランディングを進めている。

（評価スコア 2）

#### 9. 大学が行う地域活性化に向けた取り組みの評価・検討

地域活性化の為の拠点創生を目標として、宮崎県北部地域を中心に産官学金が連携・協力する事で、更なる地域振興や必要な人材養成に努めた。のべおか市民大学院、公開講座、発達支援システム事業促進支援業務、定住自立圏フィールド調査事業、ジョイフルキッズクラブ、

ジュニア科学スクールは、地域活性化に向けた本学独自の取り組みである。特に、本学のボランティア体制は、信頼性も高く、地域活性化に向けた取り組みとして評価できる。防災活動(DMAT実動訓練)への積極的な参加・支援など、広域搬送拠点臨時医療施設としての役割を果たしている。木城町連携推進事業、東九州メディカルバレー構想、高校生探究学修の支援は、地域の活性化に大きく寄与した。

(評価スコア 4)

#### 10. 国際化に向けた国際競争力の強化の為の評価・検討

国際競争力を意識したグローバル化の推進を基軸として、フィンドレー大学やタイの高等学校との教育交流ならびに研修団の受け入れ、医療施設の見学研修など、真のグローバル化を目指した取り組みを実施し、積極的に国際交流に努めた。令和8年度から運用開始のアカデミックアドバイザー推進機構(AAP)のラーニングサポートセンター(LSC)では英語村を中心に各種国際的なイベントを実施する予定である。

(評価スコア 4)

#### ○次年度の計画案

日本高等教育評価機構による第三者評価の結果を踏まえ、第3期中期目標・中期計画の推進に加えて、内部質保証体制の改善・充実が更にアップデートできるよう、内部質保証から内部質向上へのステップアップを目指し、課題改善に向けての評価・検討を行う。次年度以降、基本事項の検討については、各部会および各委員会からの情報を基に、内部質保証委員会、自己点検・自己評価委員会ならびに中核センター会議を拠点として、以下の項目を引き続き推進して行く。

##### 1. 3つのポリシーを踏まえた、人材養成に必要な使命・目的等の評価・検討

各部会、各委員会、内部質保証委員会、自己点検・自己評価委員会、中核センター会議ならびに大学教授会と連携しながら、建学の理念と教育目標に沿った人材養成を教職学一丸となって実施する。

##### 2. 内部質保証の為の体制整備や自己点検・自己評価との更なる連動を評価・検討・改善

内部質保証委員会の改善意見を自己点検・自己評価の実施に反映させるとともに、PDCAサイクルの整備と評価を行う。各部会と各委員会の適正なマッチングを行い、内部質保証さらには内部質向上における体制整備を行う。

##### 3. 内部質保証の機能性を高める為の組織の整備、責任体制の確立を評価・検討・改善

内質保証委員会の機能強化として、教育イノベーション委員会とIR推進委員会からの情報提供を最大限に活用する。関係部会や委員会、自己点検・自己評価委員会ならびに中核センター会議と情報を共有することで、内部質保証、さらには内部質向上の機能を高める。

##### 4. 学生生活、学修支援、学修環境改善など、学生サービス全般を評価・検討・改善

学修支援体制を更に強化すべく、各委員会の見直しや再編、学修環境の整備を行い、学生サービス全般に関する機能を強化する。また、アカデミックアドバイザー推進機構(AAP)を拠点として、さらなる学修環境の改善や学生サービス向上の取り組みを実施する。

##### 5. 図書館等の学生利用施設の有効活用を評価・検討・改善

地域に開かれた大学として本学の学生だけでなく市民に対しても附属図書館を開放し、これまで同様に学生、教職員、市民にも利用しやすい開かれた図書館を目標に、利用促進に努める。

#### **6. CP や DP に沿った教育課程及び教授方法を評価・検討・改善**

学修成果を可視化するとともに、学修行動・学生生活に基づく CP や DP に沿った教育課程および教授方法の改善を実施する。FD 研修の一環として、教員相互の授業参観制度の強化に取り組み、授業評価の方法論を再検討する。

#### **7. 大学の強みや特色を活かした教育研究活動の推進を評価・検討・改善**

本学の強みや特色を活かした教育研究活動の強化を中核センター教育開発部門と研究推進部門を中心に更なる推進を図る。コンソーシアム宮崎との連携や FSD 研修会を基盤に、教育研究活動の充実化、機能性を強化する。

#### **8. 安定した財務基盤確立、経営の規律と誠実性の維持を行う為の機能を評価・検討・改善**

本学のブランドコア構築におけるインナーブランディングとアウトブランディングを推進する。AP の見直し、SNS、CM、新聞広告を活用した各種デバイスを利用した広報活動に積極的に取り組む。

#### **9. 大学が行う地域活性化に向けた取り組みを評価・検討・改善**

地域活性化の為の拠点創生を目標として、宮崎県北部地域における産官学金の連携を基盤に、さらなる地域社会貢献と地域が求める人材養成に努める。

#### **10. 国際化に向けた国際競争力の強化を評価・検討・改善**

国際競争力を意識した本学の「魅力と強み」を活かしたグローバル化を実践するとともに、積極的に教育交流協定校との国際交流を推進する。アカデミックアドバイジング推進機構(AAP)のラーニングサポートセンター(LSC)を中心に国際的な各種イベントを実施する。

令和7年度 自己点検・自己評価委員会報告書（校了）

部会名\点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③
【教育改革部会】 (旧：教育指導部会、カリキュラム部会、大学院部会、通信教育部会)	◎	○	◎	○		○			○

以下のスコア概要【定性的評価：5.達成している、4.かなり進んでいる、3.普通、2.やや足りない、1.ほとんど進んでいない】

○今年度の取組状況（教育改革部会）

**1. ブランドビジョンの実現に向け、新設した大学共通基礎科目の検証・改善に努め、完成年次 (R7) に向けた改正の有無を含めた検討を行う。**

令和5年度より掲げる「4つのen」の実現に向け、更なる改善・検討を進める。

**【情報、AI、データサイエンス科目】**

令和6年度『数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）』に認証されている。令和7年度は受講生に対して認定証を交付し本科目受講のインセンティブを与えた。また、情報教室の縮小に伴いLL教室をアクティブ・ラーニングに特化した情報教室として改編を行い、令和8年度に向けた活用の促進に着手できた。

令和10年度以降の認証更新、さらには上位認証となる「応用基礎レベル（薬学科先行）」に向けた検証・協議に努めているところである。

（実施、点検評価等内容については別紙HP内容を参照）

**【日向国地域体験学習】**延岡市、高千穂町、五ヶ瀬町の協力のもとで、今年度は「ユネスコエコパーク延岡コース」「宮崎県北の五ヶ瀬町満喫コース」で体験学習の場を設定できた。受講修了生は21名であった。実施プログラムの企画は延岡市への依存度が高く、将来的には延岡市の補助縮小などの懸念もあるため、プログラム内容の精査が必要となっている。

**【医療・福祉連携講座】**今年度は65名が単位認定となり、学部学科の垣根を超えた学修の場の設定が出来ている。担当教員のヒアリングからも一定の効果を得ている。

**【インターンシップ】**文部科学省が掲げるインターンシップの要件に合致していない（薬・生命・心理）ため、科目名称の変更が課題である。（56名単位認定）

**【学修成果の可視化】**

新1年生に対して『GPS-Academic：ベネッセi-キャリア』を実施した。自宅受講を認めたことで前年度に比べて一部の回答で正確性が疑われたため、実施方法の検討が求められる。次年度は高学年次受験が控え、各学科に対する動機づけを行うと共に、2回目の受験に対する評価を行う計画にある。同時に同社開発のテキスト活用についても協議を行う計画である。

※取り組み計画について着手できたため、「評価スコア5」とした。

**2. 全学的方針として掲げる「国語力強化」の在り方自体を再考し、リメディアル教育として導入しているe-learningシステムの是非を含め検証を行う。**

本年度も入学生に対して4月（入学直後）・8月（前期終了後）・1月（後期終了後）の計3回全

学統一試験を実施し、1年間の国語力向上状況を確認した。第1回と第3回を比較し得点変化をみると、e-learning システムを導入した学科において得点が向上した者の比率が高かった。ただ、e-learning システムで扱う学習内容（文章作法）と統一試験（読解）が直接的に関係するものではないため、引き続き e-learning システムの有効性の検証が必要である。

※e-learning の是非および国語力強化の判断を含め課題が残るため「評価スコア2」とした。

### 3. 国家試験合格率の向上を目指す。少なくとも、全国の大学の国家試験合格率平均を下回ることがないように国家試験対策の充実に取り組む。（ストレート合格率の向上を含む）

【通学】10 資格中、全国平均で達成 8 資格、未達 2 資格。達成資格が未達を上回るものの、ステークホルダーたる受験生の関心の高い数値の一つであるため、単なる合格率のみでなく、ストレート合格率なども意識した対策強化に努める。

【通信】社会福祉士国家試験対策情報を希望する学生（既卒者を含む）に、年間を通して随時模擬試験などの最新情報を配信した。また、メディア形式による対策講座を取り入れ学生が好きな時間に対策動画を閲覧できるように利便性を図り、オンラインによる試験対策講座を年 1 回（12 月 23 名参加）開催し、合格率の向上に取り組んだ結果、合格率 75.4%（昨年度 75.9%）であった。

（数値については別紙参照）

※取り組み強化までには至っていないため「評価スコア3」とした。

### 4. 教職員の意識改革並びに課題の共有を目的に、FD・SD 活動の促進に努め、学生を中心とした（学修者本位）研修活動の充実に努める。（ワークショップやハラスメント研修などの充実）

- ・各学部での FD 開催の推進とサポート・連携体制の確立
- ・各事務部を中心とした SD 研修の開催促進と情報共有・フィードバック体制の確立

別紙のとおり、全学で全 3 回、学部でも各 1 回以上の個別開催が実現できた。また、加盟するコンソーシアム宮崎が主催する FD・SD 研修会にも参加することができた。次年度に向けては更なる促進を目指し、学部等での開催計画を後押しする。

※全学部において実施できたため「評価スコア5」とした。

### 5. 学修者本位の教育環境充実に向け、以下の強化を図る。

- ・ユニバーサルパスポートを活用した学修成果の可視化の検証、改善

GPS-Academic の受検結果を学生個人毎に記録し、学生指導及び学生自身の成長実感に繋がる仕組みを実現した。ユニバーサルパスポートで提示する情報が十分活用できていない学生もいるため、活用促進の手立ての検討が必要である。

- ・シラバス内容の充実・検証及びチェック体制の改善・強化

『学修者本位の教育』の実現を目的に、シラバスチェックの重要性を周知することはできたが、明確な改善体制の構築までには至っていない。

- ・授業アンケートを初めとした教育 IR の改善と実施体制の強化

教育（教学）IR 改善の一環として、入試情報、入学時アンケート、GPS アカデミックの結果の一部を数値化し、アドミッションポリシー（AP）の評価案を検討した。また、学修行動・学生生活行

動アンケートをこれまでの単年度結果の報告から、改善検証に資する報告書になるように前年度比較報告に変更を試みた。なお、学生からの要望に対しては可能な改善について積極的に提案し、本年度は QOL 側学生駐車場の改修整備に着手することができ、デジタルサイネージ等でのフィードバックを予定している。

なお今後については、個々の調査等の記述統計分析にとどまらず、推測統計分析による教学 IR に資するデータ分析が必要であり、取り組み方法について検討を行いたいと考えている。

#### ・『アカデミック・アドバイジング推進機構』の創設

第三者評価報告書の作成にあたり、本学の教学に係る強化ポイントが明確となった。各取り組みは一定の評価に値する『適合』評価を得たものの、ひとつひとつの取り組みが点となり、線となった連動に欠けている気付きを得たことから、『アカデミック・アドバイジング推進機構』の創設を提言し、実現した。これを単なる箱モノとせず、学生ファーストの視点に立った各種の取り組みとなるよう、その実効性を令和 8 年度以降継続する。

※新たな学生支援体制の構築にも寄与できたため「評価スコア 5」とした。

### 6. ハイブリッドコースを含めた通信教育部の改革並びに通学課程との連携強化を図る。

#### ・福岡事務所の活用と、入学生増に向けた体制強化

福岡事務所において SNS 広告などの広報業務をおこなってきたが資料請求数は減少してしまっただ。これに伴い現在次年度に向け、SNS 広告でもより認知度が高まる方法を検討中である。また、「ケア ネクスト カレッジ」との連携協定を取り交わし、編入学性の確保に向け前進となっている。

ホームページ上に教員と学生の対談動画を掲載し学習方法や本学の実習についてわかりやすく説明した。進学情報サイトへ情報を掲載し、広く募集に努め、関連校開催の進学説明会へ参加した。

#### ・教育改善、学習相談

スクーリング時の授業アンケートを実施し、集計結果を担当教員にフィードバックし、授業改善の検討資料として活用した。実習教育の充実を図るため、教員チームによりスクーリングの平準化を図る取り組みを開始した。ハイブリッドコースの学生スペースを有効活用し、学生相互の交流はもとより、学習相談等を行うことができた。

また、オープンキャンパスでのハイブリッドコース問い合わせ者が増えていること等も勘案し、通信教育部教授会での協議も行い、編入学生並びに転科生の受け入れを令和 8 年度から開始することとなり、多様な学修機会の提供を行うことが可能となっている。

※取り組みについて前進もあり「評価スコア 4」とした。

### 7. 研究者育成の大学院教育の充実を目指し、適正な入学生確保を行うことで、学部学生の意識向上と TA・SA などの活用計画を推進する。

#### ・大学院教育の充実

通信制大学院研究科が中心となり、本年 2 月に院生も対象としたプレ F D 研修会「医療薬学研究科・大倉研究科長講話」を開催し、研究マインドの醸成に努めた。

社会福祉学研究科では、学習のしおりに教育方針として明示した 3 つのポリシーを踏まえた学

修成果の可視化を図る機会として、夏・冬期スクーリング時に大学院生および研究科教員全員参加による研究テーマ・計画・中間・成果発表会を継続して実施した。また、本年度は1名が博士の学位を取得した。

保健医療学研究科では、多様な専門性を有する学生の研究指導として、新たにピアサポートとピアレビューの仕組みを構築した。また、カリキュラム（博士前期課程）分野名の改定を行った。さらに、3つのポリシーを基盤にアセスメント・ポリシーを制定し、研究科レベル、専攻レベル、科目レベルにおける学修評価システムを構築した。その結果、大学院生の研究内容の質が大きく向上した。

医療薬学研究科では、大学院生の指導体制の確認を教授会や研究進捗報告会で従前通り実施した。講義は、前年度と同様のカリキュラムで従前通り実施した。3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を図る目的で、大学院生が自らの学びをユニパ上で記録して自ら振り返って展望できる体制を維持した。また大学院生がこのような学びを自ら展開しやすいよう、大学院生のスケジュールに即した指導体制を維持した。

#### ・入学生の確保

令和8年度には15名の研究科入学生（薬2、福祉前期7・後期1、保健前期7・後期0）を迎えることが出来たため、学部学生との連携等を含め継続的に検討を進めたい。

#### ・TA・SAなどの活用計画の推進

SAは5名（動物生命；実験動物実習補助）、TAは2名（通信保健前期；授業実習補助等）の活用があったが、ピアサポート体制なども含め更なる活用推進に努めたい。

※おおむね計画が達成したため「評価スコア5」とした。

#### ○次年度の（点検）計画案（教育改革部会）

令和8年度に向けては高等教育評価機構による第三者評価の結果を踏まえ、おごることなく更なる教学マネジメントの推進に向けた点検評価・改善改革に努める。

1. 教学マネジメントの推進を掲げ取り組んだ『アカデミックアドバイジング推進機構』並びに『教学マネジメント推進委員会』での取り組み計画・取り組み状況を、以下の観点を主眼に点検評価する。

- ・ブランドビジョンの実現に向けた、本学独自の共通基礎科目の検証。
- ・全学的方針として掲げる「国語力強化」に対する全学的な評価の検証。
- ・各学科の最大のブランドとなる国家試験合格率の向上を目指し、全国大学平均を超えるための各種取り組みの検証。（ストレート合格率の向上、FD・SDの推進を含む）
- ・ハイブリッドコースの検証並びに大学院教育の充実を含め、通学制と通信制が融合した各種取り組みの計画検証（魅力の創出による学生確保）

2. 学修者本位の教育環境充実に向け、以下の強化を図る。

- ・ユニバーサルサポートを活用した学修成果の可視化の検証、改善
- ・シラバス内容の充実・検証及びチェック体制の改善・強化
- ・授業アンケートを初めとした教育IRの改善と実施体制の強化
- ・教育環境整備の推進（空き教室の活用、集約）

## 令和7年度 国家試験結果

### 社会福祉士

第38回

	新卒	既卒者	合計
出願者	25	46	71
受験者	25	46	71
合格者	18	23	41
不合格者	7	23	30
合格率(%)	72.0%	50.0%	57.7%
全国平均(%)	60.7%		
福祉大学等平均(%)	78.4%	42.2%	61.8%

### 社会福祉士(通信教育部)

	新卒	既卒者	合計
出願者	57	67	124
受験者	57	67	124
合格者	43	26	69
不合格者	14	41	55
合格率(%)	75.4%	38.8%	55.6%
全国平均(%)	60.7%		
福祉大学等平均(%)	78.4%	42.2%	61.8%

### 愛玩動物看護師

第4回

	新卒	既卒者	合計
出願者	23		23
受験者	23		23
合格者	23		23
不合格者	0	0	0
合格率(%)	100.0%		100.0%
全国平均(%)	88.0%		
大学等平均(%)	90.5%		

### 精神保健福祉士

第28回

	新卒	既卒者	合計
出願者	5	7	12
受験者	5	7	12
合格者	3	3	6
不合格者	2	4	6
合格率(%)	60.0%	42.9%	50.0%
全国平均(%)	78.2%		
福祉大学等平均(%)	85.4%	43.2%	73.7%

### 言語聴覚士

第28回

	新卒	既卒者	合計
出願者	8	6	14
受験者	8	6	14
合格者	4	0	4
不合格者	4	6	10
合格率(%)	50.0%	0.0%	28.6%
全国平均(%)	66.4%		
大学等平均(%)	85.9%	23.9%	73.3%

### 臨床工学技士

第39回

	新卒	既卒者	既卒者(別科)	合計
出願者	8	4	1	13
受験者	7	3	0	10
合格者	5	0	0	5
不合格者	2	3	0	5
合格率(%)	71.4%	0.0%	-	50.0%
全国平均(%)	-	-	-	65.7%
大学等平均(%)	-	-	-	-

### はり師

第34回

	新卒	既卒者	合計
出願者	9	6	15
受験者	9	6	15
合格者	8	2	10
不合格者	1	4	5
合格率(%)	88.9%	33.3%	66.7%
全国平均(%)	83.4%	10.4%	67.2%
大学平均(%)	77.2%	15.7%	61.8%

### きゆう師

第34回

	新卒	既卒者	合計
出願者	9	4	13
受験者	9	4	13
合格者	9	1	10
不合格者	0	3	3
合格率(%)	100.0%	25.0%	76.9%
全国平均(%)	85.9%	12.8%	70.5%
大学平均(%)	80.9%	14.6%	65.7%

### 薬剤師

第111回

	新卒	うち新卒ストレート	既卒者(6年)	既卒者(4年)	合計
出願者	56	36	73	0	129
受験者	30	28	67	0	97
合格者	30	28	20	0	50
不合格者	0	0	47	0	47
合格率(%)	100.00%	100.00%	29.85%	0.00%	51.55%
全国平均(%)	86.25%		41.33%	20.49%	68.49%
私立大学平均(%)	85.86%		41.24%	12.16%	67.43%

### 介護福祉士

第38回

	新卒	既卒者	合計
出願者	1	0	1
受験者	1	0	1
合格者	1	0	1
不合格者	0	0	0
合格率(%)	100.0%	-	100.0%
全国平均(%)			68.1%
養成施設合格率(%)	68.1%	21.1%	58.8%

### 臨床検査技師

第72回

	新卒	既卒者	合計
出願者	37	24	61
受験者	30	24	54
合格者	30	6	36
不合格者	0	18	18
合格率(%)	100.0%	25.0%	66.7%
全国平均(%)	93.3%	-	84.7%
私立大学平均(%)	-	-	-

※9月卒は新卒に含む。

令和7（2025）年度 FD研修会 実施報告書

No.	開催日時	テーマ、講師 等 内容・概要	参加者
1	令和7年8月7日開催 13：00～14：30	<p>令和7年度 全学共通開催FD/SD研修会 「GPS-Academicの受検結果と運用計画」 講師 中大路 健太 氏（株式会社ベネッセi-キャリア）</p> <p>令和6年度より導入した「GPS-Academic」の令和7年度新入生受検結果に基づき、本学の傾向と同系他大学との比較を行い、今後の教育活動の改善・改革に活用する方法を検討した。令和8年度に控える同一学生の2回目受検（R6入学生）の実施時期の検討も踏まえ、本年度の受検傾向について共通理解を図った。</p>	教員68 職員12
2	令和7年9月3日開催 10：30～15：30	<p>令和7年度 全学共通開催FD研修会（職員参加あり） 「「教養」教育の新たな展開に向けて」 一部：講師 兒玉 修 氏（九州医療科学大学 前学長） 二部：学科に分かれグループワークを実施</p> <p>ブランドビジョン「4つの～en～」を掲げ大学運営を行い4年目を迎え、本年度末には4年制学科では初の卒業生を輩出する予定である。基礎教養科目の見直しや学修成果の可視化を目的とした教学改善など、一定の成果を以て点検評価を行い切っ掛けとして、ブランドビジョン作成にも関与された兒玉前学長を講師に招き、大学の理念としての根幹となる教養教育のあり方について共通理解を図った。 第一部の講話をもとに二部では学科毎にグループワークを行い、これまでの取り組み結果を踏まえ、以下の課題を設定し取りまとめ、各グループの発表を聴取し、大学全体としての取り組みを共通した。 【課題1】 国家資格に基盤をおき専門教育を行う教育機関（大学・専門学校等）は全国各地に多くあります。 その中で、ブランドビジョンに掲げる4つの～en～を基軸として、九州医療科学大学でしかできない教育課程（教育内容）を実践している内容を示しながら、学科の強みを明確にしてください。また弱点があれば、実現可能な改善案を含め示してください。 そのうえで、本学は単科大学ではなく、総合大学です。医療・福祉の連携のなかで、また地域連携において持続可能な教育モデルの在り方をまとめてください。</p>	教員74 職員24
3	令和7年9月17日開催 13：00～14：00	<p>令和7年度 全学共通開催FD/SD研修会 「Teamsの利活用について」 講師 林 浩太郎 氏（学園本部 情報システム課員）</p> <p>本学ではオンライン授業の運用については、コロナ過においてGoogle Meetを活用し行ってきたが、学園方針にも準拠し、Microsoft Teamsに本年度より本格移行し運用変更を行っている。本システムを有効活用し、効果的な授業並びに会議運営が行われる党、関連校である吉備国際大学の運用方法を踏まえ共通理解を図った。</p>	教員66 職員25
4	令和7年11月18日開催 14：55～16：25	<p>令和7年度 薬学科主催FD研修会 「次世代医療に求められる薬剤師の職能と責務」 講師 武田 泰生 先生（日本病院薬剤師会会長）</p> <p>薬学科主催の第1回目として、宮崎県薬剤師会との共同企画により、次世代医療に求められる職能と責務について、病院薬剤師会トップの立場から実情を聞いた。 高齢化が進み、地域医療・訪問医療が求められる中、医師不足・医師の過重労働という現状を受けて、チーム医療の総合調整役を薬剤師が担っていく。そのために調剤をするだけでなく、注射薬を使える、DXに対応できる、コミュニケーション力を備える薬剤師教育が求められる。</p>	教員20 職員3

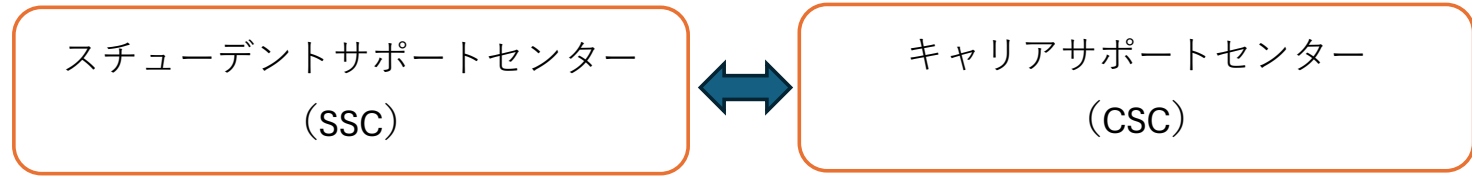
5	令和7年11月28日開催 14:55~16:25	<p>令和7年度 薬学科主催FD研修会 「教育、研究でも使えるCHATGPT/NOTEBOOKLMの応用」 講師 吉田 博文 先生 (宮崎県薬剤師会 常務理事 (FX担当))</p> <hr/> <p>宮崎県薬剤師会との企画で、薬局業務におけるAI・RPA活用の最新動向について講演が行われた。音声入力による薬歴作成の精度向上や、誤変換を補正するカスタムGPTの活用、業務自動化に向けたRPA導入の可能性が示された。また、NOTEBOOKLMを用いた授業資料作成やクイズ生成など教育分野への応用も紹介され、少子化や人手不足環境下でのDX推進の重要性が強調された。</p>	教員24 職員1
6	令和7年12月4日開催 15:00~16:20	<p>令和7年度 全学共通開催FD/SD研修会 「大学教員のための生成AI実践講座-Copilot活用の2025年最新版-」 佐賀大学主催 オンラインセミナー 講師：日本マイクロソフト株式会社 畠山大有 氏</p> <hr/> <p>本学ではMicrosoft Office365を教職員・学生共に標準利用できる仕様としており、搭載するCopilotの有効活用は喫緊の課題となる。生成AIの教職員の活用に加え、適正な利用を学生に促す体制を検討すべく、情報教育センターが主体となり、同セミナーへの参加を決定し、学内教職員の視聴を広く促し、活用事例の導入を行った。</p>	教員26 職員5
7	令和8年2月17日開催 13:00~14:20	<p>令和7年度 社会福祉学部主催FD研修会 (オンライン) 「授業における著作権~教職員が知っておくべき著作権の知識~」 講師 一般社団法人学術著作権協会 事務局長 石島 寿道 氏</p> <hr/> <p>スポーツ科学領域での大学教育歴のある実績を踏まえ、著作権法の成り立ちから現行改正にいたる最新の情報を共有いただき、授業への活用等へ判断基準を伝達頂いた。法律的な解釈について多岐にわたる内容が紹介され、コロナ過以降の公衆送信権など、本学でも取り組んで切る情報が共有されたが、日進月歩での改正状況などもあるため、都度のバージョンアップの必要性を痛感する内容であった。</p>	教員26 職員3
8	令和8年3月13日開催 13:10~14:40	<p>令和7年度 生命医科学部主催FD研修会 「病院が求めるスタッフ~教育現場では学校でどのような教育を望んでいるか?~」 講師 宮崎県立延岡病院 病理診断科 主任部長 島尾義也 氏</p> <hr/> <p>宮崎県北地域の中核医療を担う県立延岡病院での病理診断の現状を踏まえ、地域医療を下支えるする臨床検査技師をはじめとしたコ・メディカルとの連携と、その人材養成の必要性について講話がなされた。全国的に経営状況の悪化が懸念される病院運営において、地域との連携、また本学の果たすべく役割についてのアドバイスとなる、貴重な講演となった。</p>	教員16 職員6
9	令和8年3月17日開催 10:45~12:15	<p>令和7年度 臨床心理学部主催FD研修会 「医療制度の現状を踏まえたこれからの医療従事者の育成」 講師 医療法人隆徳会鶴田病院 事務部長兼診療技術統括担当 田中 洋輔 氏</p> <hr/> <p>本学の各学科で行われる人材養成の多くは、医療・福祉に係る専門職種となる。その専門職種現場で求められる人材について、理学療法士としての医療従事経験と、事務部長としての管理統括の経験から得られた知見をもとに、大学運営のあり方と教育への関わりについて参考となる講話をいただいた。</p>	教員21 職員4

- AACの3原則
- #1 学生ファーストの取り組み対応
  - #2 教職協働によるモニタリングの実践
  - #3 ブランドビジョンに基づく学びの実現

### アカデミック・アドバイジング推進機構

- ・各センターが連携した支援体制の協議検討
- ・英語村の機能を継承し、英語だけに限らない、各種講座の企画運営
- ・健康管理センターとも連携した、多様な学生の支援体制を整備

各専門部署にアカデミック支援員を配置し、各センターの連携のもと学科教員（チューター）と連携した支援体制を整備



・教務部  
教務課（実習センター含む）  
通信教育事務室  
教育イノベーション課

・学生部  
学生課  
教養教育開発の  
支援・検討

・就職部 事務室  
キャリア教育開発の支援・検討

『ラーニングサポートセンター』を含め機能的に改編し、個々の学生の希望や学修の進捗を踏まえて、主体的な学修と体系的な履修を確立させるとともに、「ディプロマ・ポリシー」に定められた学修目標の達成を念頭に、個人としての目標の設定や達成状況の確認を促し、自分の将来を見据えられるきめ細かな履修指導や学修支援、学生支援等を通じて入学時から卒業時まで継続した取組（アカデミック・アドバイジング）を行う体制を整備する。

## 令和7年度 自己点検・自己評価委員会報告書

部会名\点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
研究活動部会	○			◎	○	○	○	○	○

○今年度の取組状況（研究活動部会）

評価スコアは、定性評価として、5.達成している、4.かなり進んでいる、3.普通、2.やや足りない、1.ほとんど進んでいない、を採用した。

### 1. 学内共同研究

本年度は応募件数が11件（研究経費助成6件、地域創生事業経費助成5件）であった。本年度は費用対効果の最大化を考慮して適切な予算配分を実施した。すなわち、研究経費助成と地域創生事業経費助成の申請額上限をそれぞれ60万円と30万円に設定した。研究経費助成は、科研費審査評価に基づき審査を行い、科研費採択率の向上を支援したが、新規採択は2件であった。地域創生事業経費助成は、社会貢献度に基づき審査を行い、地域社会貢献活動を支援した。また、採択者にヒアリングを行い研究・事業推進の後押しをした。経費の使途については、昨年度と同様、事前審査が必要であると思われた。研究活動部会FDの一環として、成果発表会（ポスター発表展示）を延岡市役所とカルチャープラザのべおかで実施し、地域貢献に寄与した。

(評価スコア3)

### 2. 科研費助成事業

採択率向上として、申請公募要領の戦略的説明と申請書作成の指導を行った。また、ガールーンに「研究助成・補助金関連の情報提供のスペース」を設け、申請件数ならびに採択件数の向上を目指したが、向上には至らなかった。申請状況は、基盤(B)2件、基盤(C)18件、挑戦的研究(萌芽)2件、若手研究5件の計27件（昨年30件）で、採択率は14.8%であった（昨年16.6%）。研究推進部門のさらなるバックアップが必要である。ほとんど申請をしていない教員には実効的施策が望まれる。

(評価スコア2)

### 3. 公的研究費コンプライアンス研修および研究倫理教育研修

コンプライアンス研修と研究倫理のさらなる浸透・定着を図った。税理士法人事務所の公認会計士（中村啓利氏）によるコンプライアンス研修「①研究インテグリティの確保について、②安全保障貿易管理について、③競争的研究費の適正な執行について」を実施した（参加率100%）。また、宮崎県立看護大学の岩江荘介教授による研究倫理教育研修「生命科学・医学系倫理指針、改正のポイント、インフォームド・コンセントと倫理審査」を実施した（参加率100%）。また、研究インテグリティ確保に係る動画研修も実施した。公的研究費不正使用防止の啓発活動、公的研究費と倫理教育のコンプライアンス研修、安全保障輸出管理規程の制定と研究インテグリティの確保も並行して実施した。

(評価スコア4)

### 4. 本学査読制ジャーナル (*Journal of Health and Welfare Investigation* : JHWI)

ジャーナルの充実と質向上を図るために、詳細な査読ガイドランの策定と明確化に取り組んだが、未完成に終わった。本年度は1編の投稿があり、厳正な査読後、本学学術リポジトリで公開した。今後は本学大学院生の学位論文の投稿ジャーナルとして認定する予定である。

(評価スコア2)

## 5. 順正学園学術研究交流会

発表件数は8件（吉備国大4件・九医科大4件）であった。各教員の研究テーマと研究シーズをまとめたファイルを作成し、全教員に配信した。事前質問の効果もあり、有意義な交流会が実施できた。今後は全教員が研究成果を発表する機会を設けるとともに、学園間の共同研究、研究コミュニティ形成を推進する予定である。  
(評価スコア 4)

## 6. 医農工連携プロジェクト第3回ものづくりフェスタ・QOL研究機構講演会・公開シンポジウム

医農工連携プロジェクト第3回ものづくりフェスタに本学から薬学科と生命医科学科が知的財産である「もの」を出展した。また、QOL研究機構社会福祉学研究所主催の講演会と公開シンポジウムを開催した。  
(評価スコア 4)

## 7. 各種研究助成と補助金関連情報の提供

競争的外部資金獲得のための「情報提供プラットフォーム」をガルーンに構築した。この情報提供を契機に外部資金総額の増加が認められた。また、「キャンパス・スポットライト」をガルーンに構築し、教員の研究マインドの向上を図った。  
(評価スコア 3)

## 8. 個人研究費の研究成果報告書

本年度末を締切に全教員に報告書の提出を求めた（提出率95.5%）。報告書は、卒論指導、学科活動、学生ならびに大学院生の教育研究指導も成果に含めた。次年度は教員の研究マインドの向上を図ることを目的に、成果報告書は学内で教職員が閲覧できるプラットフォームを構築する予定である。  
(評価スコア 3)

## 9. 論文掲載料（Article Processing Charge :APC）支援事業

本年度は、2編の論文にAPC支援を行った。今後はできるだけ多くの論文に対して支援ができるよう情報提供の機会を設けることが望まれる。また、APC支援論文は本学学術リポジトリで公開予定である。  
(評価スコア 2)

## 10. ひなたイノベーションハブへの参画

宮崎大学錦本町に「ひなたイノベーションハブ」が開設され、本年度本学も参画のための契約を締結した。「ひなたイノベーションハブ」は、地域の課題抽出・解決のためのプロジェクトの立上げ、県内の大学・高専や産業支援機関と連携し、研究シーズを地域活性化に繋げることを目的としている。今後は本学も「ひなたイノベーションハブ」の参画機関として業務遂行の一翼を担う予定である。  
(評価スコア 2)

○次年度の計画案

### 1. 学内共同研究

より詳細な採択ガイドラインを設定し厳正なる審査を行う。適切な経費配分と成果発表に対する定性的・定量的な改善を進める。特に成果発表の改善点として、ターゲットが多く集まるスポットの選定、発表内容を効率よくリストアップできるキーワード・キーフレーズ、Key Performance Indicator (KPI) を設定する。研究のモチベーションを向上させるとともに、全教員が研究成果を発表する機会を設ける。成果発表は、各種デバイスを利用して学内外に発信する。デジタルサイネージ（電子看板）をフル活用した効果的な成果発表会を行う。

## 2. 科研費助成事業

申請数と採択率向上の戦略として、学会発表や論文発表のノルマ化、University Research Administrator (URA) の育成と科研費クラブの設置を積極的に進める。研究推進のための PDCA サイクルの高速回転を基盤に、科研費申請を全教員の共通目標とする。研究推進部門を中心に採択率向上のための「申請書の書き方講習会」を実施する。

## 3. 公的研究費コンプライアンス研修および研究倫理教育研修

研修内容の斜陽化ならびに形骸化を防止するため、研究費使用ハンドブックの見直し、研究倫理と研究コンプライアンスの啓発活動をより強力に推進する。また、公的研究費不正使用防止に向けた啓発活動、公的研究費と倫理教育のコンプライアンス研修、安全保障輸出管理規程の制定と研究インテグリティの確保も並行して進める。

## 4. 本学査読制ジャーナル (JHWI)

本学の査読制ジャーナルの充実と質向上を図るために、より詳細な査読ガイドラインの策定ならびに厳正なるピアレビューに取り組む。本学学術機関リポジトリの運用を推進する。また、本学大学院生の学位論文の投稿ジャーナルとして認定する。

## 5. 順正学園学術研究交流会

交流会の開催目的やコンセプトを明確化する。学園間の共同研究や研究コミュニティの形成を推進し、継続性を確保する。

## 6. ものづくり交流展・QOL研究機構講演会・公開シンポジウム

社会貢献の一環として、大学の知的財産である「もの」を積極的に出展し、本学をアピールする。QOL研究機構講演会・公開シンポジウムを積極的に開催する。ブランディング推進委員会と協働で本学オリジナルブランドを醸成する。

## 7. 各種研究助成と補助金関連情報の提供

競争的外部資金獲得の情報提供と「キャンパス・スポットライト」による教員の研究マインドやモチベーションの向上を図る。情報提供に関する本学独自のプラットフォームを整備する。

## 8. 個人研究費の成果報告書

成果報告書は学内で教職員が閲覧できるプラットフォームを構築し、学内外の共同研究や研究コミュニティの形成を推進する。また、研究環境の調査を行うとともに、共同利用研究室の設置を検討する。

## 9. オープンアクセス (OA) 事業と APC 支援

学術機関リポジトリアシスト機能を最大限利用し、OA に対応した論文の投稿と公開を積極的に推進する。APC 支援事業は、多くの論文に対して支援ができるよう見直しを行う。

## 10. ひなたイノベーションハブ

「ひなたイノベーションハブ」の参画機関として、本学の研究シーズならびに知的財産を地域の活性化に繋げる。

令和7年度 自己点検・自己評価委員会報告書

部会名\点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
【学生サポート部会】		◎							○	◎

関係委員会等：

学生支援委員会、障がい学生サポート委員会、ラーニングサポートセンター・英語村  
○今年度の取組状況 [ ] 内は第3期中期目標・中期計画該当箇所

1. 学生生活の安定のための支援（学生支援委員会関係）

① ニーズ把握のための学生との意見交換 [学生支援1) 3] (達成度：◎ 達成)

- ・ 学長と学生との意見交換会 (R7.7.10(木)) を実施し、各学部学科の代表学生16名より大学生活の様子と要望を聞き取った。多くの意見が出された中で、特にグランド南側に設置しているフィットネスルームが全面ガラス張りのため『外を通行している学生と目が合う』という意見と『室内でトレーニングをしている人から見られているようで不快』と室内・外の双方から意見が出された。このことを受けて、専門業者と協議を進めて11月末に室内のガラスにブラインドカーテンを設置して「目隠し」を施し、プライバシーの保護と快適な通路の通行を確保することができた。また、NPO法人のべおか子どもネットワーク主催で年2回 (6月、12月) 市内の公民館で開催されている『学生生活応援イベント (食材や日用品の無償提供)』を昨年に引き続いて本学の学生食堂を会場として開催した。

② 学生への経済的支援 [学生支援1) 2] (達成度：◎ 計画外の取り組みを実施)

- ・ 奨学金業務は定期的な情報提供、個別連絡等をおこない滞りなく遂行された
- ・ 今夏、鹿児島県を中心とした「令和7年8月6日からの大雨による災害」の影響により、自宅が半壊する被害を受けた学生に対して、授業料特別減免措置を適用した。

③ 学生生活の危機管理に関する事項 [学生支援1) 2]

a. 交通トラブル対策 (達成度：△ 一部改善、一部悪化)

- ・ 学生課へ届出があった事故件数は、令和7年4月から令和8年2月までの間で25件 (R6.1~R7.2は19件) であり、集計期間の多少のずれはあるが前年度から増加した。学生が第一当の事故が22件 (昨年は13件)、ケガをした学生は2人、うち1人が入院した。物損事故は23件 (昨年は13件)。

b. 犯罪、生活トラブル対策 (達成度：△ 一部改善)

- ・ 犯罪、生活トラブルに関する相談が8件 (昨年は6件) あった。(学内におけるバイクのナンバープレート盗難)
- ・ 相談に対しては個別面談を実施し、関係学部・学科、部署へ通知し早期の問題解決に努めた

c. 防災に対する意識向上 (達成度：◎ 計画外の取り組みを実施)

- ・ 全学生、教職員参加による南海トラフ大地震を想定した消防防災総合訓練及び防災講座を実施した (R7年12月)
- ・ 万が一の災害時に帰宅困難となった学生たちへ備蓄品が供給できるよう、昨年度から3か年計画 (800人分) で実施し、2年目の計画として引き続き270人分の備蓄品の整備をした。また、食事だけでなく『排泄』に対応できる状況を3か年計画で進めることとし、1年目として300人分の携帯トイレの導入を実施した。

2. 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用 (障がい学生サポート委員会関係)

① 関係各所との連携体制の構築 [学生支援1) 1] (達成度：◎ 達成)

- ・ 昨年4月から整備・施行された、本学の障がい学生支援に関する基本方針ならびに規程に基づき合理的配慮の提供に関わるフロー図の点検を行なった
- ・ 発達障害や自閉症の学生が人混みや騒音など日常と違う雰囲気が原因で感情が高ぶるなどのパニックになった際に利用してもらうカームダウンルームを1号棟学生ラウンジに設置した。

② 相談しやすい環境づくりと相談スキルの向上 [学生支援1) 1] (達成度：○ 現状維持)

- ・ 事務局職員、委員会メンバーが下記の研修会に参加し、情報収集をおこなった

令和7年度第70回日本私立大学協会学生生活指導部課長相当研修会 (R7.7.3~7.4)  
第53回九州地区学生指導研究集会 (R7.8.28~8.29)

- ・ 上記研修会での情報を事務局内で共有し、学生が相談しやすい環境づくりに努めるとともにSD研修会において他課員へフィードバックをした。

### 3. 留学生・国際交流の取り組み (ラーニングサポートセンター・英語村関係)

#### ① 留学生の支援 [グローバル化1) 1] (達成度:◎ 達成)

- ・ 2026.3.31現在、在学学生7名(韓国5・中国2)、2025年度:休学者1名、除籍者1名

#### ② 日本人学生等との交流の機会を設ける [グローバル化1) 2] (達成度:◎ 達成)

- ・ 英語村主催で下記のイベントを実施した(カッコは実施日と人数)  
Easter (4月:28名)、ゲーム大会 (5月:27名)、国際交流員出前講座 (6月:20名)、七夕 (7月:18名)、映画観賞会① (7月:3名)、夏季集中講座 (8月:3名)、Halloween (10月:34名)、Malaysia Day(11月:8名)、Christmas (12月:32名)、カフェの日 (1月:17名)、春季集中講座 (2~3月:3名)、教育後援会留学生支援経費にて日本人学生と日南市(鶴戸神宮~日南市内~サンメッセ日南)へ日帰り旅行 (10月:9名)、11月2日~11月3日 第27回九保祭の開催

#### ③ 学習支援スペースとしての英語村の利用促進 [グローバル化1) 2] (達成度:◎ 達成)

- ・ 今年度(2026年2月末日)の利用人数は、レッスン受講者485名(前年度403名、前年比120%)、自習室利用者1,475名(前年度1,452名、前年比102%)、合計1,960名(前年度1,855名、前年比106%)であり、前年度に比べて自習室利用者が大幅に増加した。10号棟(学生食堂前)の移転により、特に薬学科の学生利用が増加した。

### ○来年度の計画案

#### 1. 学生生活の安定のための支援 (学生支援委員会関係)

##### ① 交通トラブル対策

- ・ 定期的な安全運転講習の企画・実施や交通安全啓発活動をおこない、交通事故の減少を目指す
- ・ 延岡警察署との連携を継続し、事故等に対して迅速に対応する

##### ② 犯罪、生活トラブル対策

- ・ 学生生活上のトラブル事例等の情報を配信し、身のまわりの「危険なこと」への理解を高める
- ・ 犯罪、トラブルに巻き込まれないように、そのような兆候があれば速やかにユニパでの周知を行い、学生の無知・常識のなさ・情報収集力の未熟さからくるトラブル・軽犯罪の防止や啓蒙を継続する。また、発生した場合には迅速かつ適切に対応する

##### ③ 防災に対する意識向上と備蓄等の準備

- ・ 地震に対する備えとして、総合的な防災訓練を実施するとともに学生の防災意識向上のためオリエンテーションでの講習、防災マニュアルの配布など各種対策を昨年引き続き推進する
- ・ 備蓄品の整備計画の3年目となる。引き続き、災害時に帰宅困難となった学生たちへの供給を考慮して270人分の備蓄品の整備を進めるとともに、携帯トイレの整備の2か年目としてR7年度同様に300人分を整備する

##### ④ 学内生活のニーズ把握と改善

- ・ 学生の要望を聴く機会を設けてニーズを把握し、改善の可能性を検討し、実施する

#### 2. 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用 (障がい学生サポート委員会関係)

##### ① 関係各所との連携体制の構築

- ・ 医療機関、学内健康管理センターとの連携の仕組みを検討する
- ・ チューター、学科長、学部長との連携、情報共有の仕組みとして、緊急時対応の連携フローを検討する

##### ② 相談しやすい環境づくりと相談スキルの向上

- ・ 学生生活に不安を抱える学生との信頼関係づくり、相談しやすい窓口対応をしていくために、学生が相談しやすい環境を整える

- ・ 合理的配慮に関わる相談体制（関係書類、学生向けフロー、周知チラシなど）の点検と評価を実施する
  - ・ 学生支援に関わる研修会に参加し、情報収集とともに関係教職員に研修内容を周知し、学生支援の質の向上に努める
- ③ 合理的配慮の理解
- ・ 合理的配慮を必要としている学生の情報を共有するとともに、対象者の状況に応じて対面による状況確認を実施する
  - ・ R7年度に設置したカムダウンルームの利用状況ならびに評価を分析したうえで、追加設置を検討する

### 3. 留学生・国際交流の取り組み（ラーニングサポートセンター・英語村関係）

① 留学生の除籍・退学者が出ないための支援をする

- ・ 留学生であっても精神的な不安による退学者が出つつある。十分な意思疎通が難しい留学生にとっては相談できる場所も限られるため、相談できず不安を抱え込んでしまうこともある。留学生向けの相談体制を検討する

② 日本での生活に慣れてもらうための機会を設ける

- ・ 留学生と日本人と一緒に楽しめるイベントを増やしていきたい。令和7年度に企画したイベントをベースにして、イベントの活動充実を図り、学生たちの取り組みを定着させる
- ・ とくに留学1年目の学生を対象に、日常生活上の不安や疑問を聞き取り、少しでも早く日本生活に順応できるように支援していく
- ・ 部活やサークル情報を提供し、日本人学生同様、課外活動を楽しむよう促す

③ 円滑かつ安全な一時帰国を支援する

- ・ 一時帰国希望者の増加が予想される。円滑かつ安全に一時帰国できるように、関係部署と情報共有し連携していく

④ 学習支援スペースとしての英語村の利用促進

- ・ レッスン受講者向上のために、令和6年度に実施して好評だった「医療現場を想定した患者との英会話」の取り組みなどを再企画して来村者へアピールする

令和7年度 自己点検・自己評価委員会

部会名\点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③
キャリアサポート部会		◎					○		

○今年度の計画案

1. 就職希望者の就職率 100%を目指すとともに、数値目標だけでなく、個人指導重視の支援を通じて学生の発達を促し、一人ひとりが満足できる進路選択ができるよう、学生支援担当部署・会計課と連携し質の高いキャリアサポートを実施する。

2. 低学年からのキャリア意識の醸成を目的とした支援、就職活動への円滑な展開や就職試験の対応に繋がる公務員試験対策講座や各種企画を積極的に実施する。また、宮崎県や延岡市などの自治体や地元企業と連携し、公務員を含む地元への就職者を増やす。

3. 障がいのある学生のキャリア選択と開拓を実現させるために、ハローワークを中心とする障がい者就職支援団体と連携を密にする。また、障がい者雇用に特化した求人情報サイトから情報収集し、リアルタイムで対象学生に提供する。さらに、卒業時アンケートで要望の多かったパソコンスキルの向上を目的とした資格取得講座を開設することで、医療福祉業界のDX化に対応できる人材の輩出を目指す。

〈取り組み状況〉

1. 良質なキャリアサポートを提供することを目指し、単なる就職率向上にとどまらず、学生が社会人として自立できるよう情報共有や意見交換を行いながら、教職協働体制で支援した。また、学生一人ひとりが納得のいく進路選択を実現できるよう、キャリアサポートセンターと各学科に加え、地元のハローワーク、ヤング JOB サポートみやざき延岡サテライト、九州コミュニティーカレッジとも連携し、各種イベントの開催や多様な進路支援に取り組んだ。さらに、県北地域 障がい者ふれあい合同面談会にも参加し、障がい者雇用に積極的な事業所との接点を持つ機会を増やしている。他には、学納金・生活費を奨学金とアルバイト収入で賄う学生に対して、大学で学んだ知識や経験が活かせるよう就職情報の提供に力を入れた結果、専門職として勤務でき、住居についても配慮いただける条件を提示いただき、奨学金返済の目途もつけることができた。令和8年4月2日現在の就職率は92.3%である。

2. 11月に開催した「薬学科業界研究会」では、就職先に求める内容など事前に学生アンケートを実施し、参加事業所に向けてアンケート内容を含む事前の説明会を開催したことで、参加事業所・学生共に満足度の高い研究会となった。また、今年度は5年生に加え、3年生も参加させ、ネクストラップの色で学年が判別できるよう工夫を凝らした。また、昨年実施した「WorkCaféのべおか」の学生アンケートを参考に、地元の社会福祉協議会、病院、検査センターや一般企業など幅広く参加いただいたことで、参加学生からも十分満足したとの意見が得られた。さらに、12月6日(土)に、公務員試験対策講座を3部構成で実施した。午前の部は、本学卒業生で延岡市役所に勤務する職員に仕事のやりがいや受験対策などのアドバイスをいただいた。なお、今年度は延岡市役所に2名の入職が決定している。令和8年4月2日現在、公

務員合格者数 10 名、就職者における宮崎県内就職率は 32.3%である。

3. 障がいのある学生のキャリア選択と開拓を実現させるため、地元で開催された障がい者雇用に特化した就職説明会に参加し、事業所との意見交換を行った。発達障害などの特性が疑われるものの、医学的診断や療育手帳などの公的な認定には至っていない学生に対し、比較的早期からのアプローチを実施し、対象学生に合わせた、段階的な支援を実施した。また、卒業後に孤立しないよう、地域若者サポートステーション（通称：サポステ）などの相談窓口と在学期間中に繋ぐなど、支援の切れ目を生じさせない体制づくりを行った。これにより、学生が「卒業＝支援終了」とならず、困難が生じた際にも相談できる先を明確にした状態で社会へ送り出すことができた。

#### ○来年度の計画案

1. 就職希望者の就職率 100%の達成を目標としつつ、単なる数値の達成にとどまらず、個別面談を軸とした丁寧な支援を通じて学生一人ひとりの成長を促す。その上で、アカデミック・アドバイジング・推進機構としての連携を強化し、会計課とも情報共有を図りながら、満足度の高い進路決定を実現する質の高いキャリア支援を展開する。

2. 低学年次からのキャリア意識の醸成を図る支援を推進するとともに、就職活動へ円滑に移行できる体制を整備する。その一環として、公務員試験対策講座をはじめとする各種企画を積極的に実施し、就職試験への実践的な対応力を養成する。また、宮崎県や延岡市などの自治体、地元企業との連携を強化し、公務員を含む地域内就職者の増加を目指す。さらに、薬学科における 5 日間以上のインターンシップを行う体制づくりを整備する。

3. 障がいの有無や診断の有無にとらわれることなく、「困り感（学生が抱える困難）」を起点とした支援体制を構築し、関係機関との連携強化と情報提供の迅速化を通じて、一人ひとりの特性に応じた持続可能なキャリア形成を推進する。

令和7年度 自己点検・自己評価委員会報告書

部会名\点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ
社会貢献部会							◎		

○今年度の取組状況

- ・評価スコアは、定性的な評価として、5.達成している、4.かなり進んでいる、3.普通、2.やや足りない、1.ほとんど進んでいない、を採用した。

1. 社会貢献活動の推進

本学の社会貢献活動の基幹事業でもある順正ジョイフルキッズクラブ(JKC)事業、順正デリシャスフードキッズクラブ(DFK)、のべおか子どもセンター事業について、例年同様に重要な子ども支援活動として事業を実施した。また、産学官連携事業等により地域課題解決への提案を行うなど地域活性化に向けた活動を推進した。さらに、地域のクリーン活動やワークショップ、イベント、市民講座などへの参加を通して、積極的に広く社会貢献活動を推進している。

(評価スコア：3)

2. 情報公開、情報発信の充実

各学部・各学科・各部活動・ボランティア・各個人における社会貢献等の実績について、前期と後期に分けて調査を行い、集約した内容を大学ホームページ[社会貢献活動 | 九州医療科学大学:オフィシャルサイト](https://www.phoenix.ac.jp/outline/social-action) <https://www.phoenix.ac.jp/outline/social-action>にて広く公表している。

(評価スコア：3)

3. ボランティアセンター活動の推進

延岡市を中心に活動団体等からのボランティア活動要請件数は152件(昨年総数145件)で、学生の参加件数116件(昨年99件)、参加者数は399人(昨年299人)と前年に比べ活動実績が増加している。活動要請に対応できなかった件数が33件(昨年43件)であった。特に今年は、「ボランティア活動」の履修学生が昨年30名から46名に増えたことも影響して、活動参加件数約17%および参加者数約33%の増加率にて、より多くの地域貢献が実現した。

(評価スコア：4)

4. 順正ジョイフルキッズクラブ(JKC)の充実

JKCの活動は、延岡市の「ひとり親家庭等学習支援等事業」の業務委託事業(10年目)として、20回実施した。中学生の登録者数は33名(昨年32)で、延べ参加人数は360名(昨年291名)であった。運営側では、スタッフを2名体制にして充実を図るとともに、外部ボランティアとして、延岡はげまし隊や元教員、食生活改善推進員等延べ111名の協力を得ている。学内の学生ボランティアは延べ112名、教職員延べ11名であった。内外のボランティアの協力を得て年間計画に基づき学習支援を中心に、調理実習や文化・教養・スポーツ活動等を企画・実施してきた。実施状況については、JKC便りを作成し、年2回保護者や関係者に発送した。今年度の中学生・保護者へのアンケート調査結果では学習支援に90%の満足が得られている。効果として、学習意欲の高まりと交流経験による自主性や協調性の向上が挙げられる。また、不登校傾向にある生徒がJKCには毎回参加していたことから、JKCが安心できる居場所になっていると考えられる。引き続き調査結果を元に課題を明確にし、更なる充実を目指す。

(評価スコア：4)

## ○来年度の計画案

### 1. 社会貢献活動の更なる推進

各学部で推進している産学官連携による地域活性化の取組や社会貢献活動の実施状況について情報収集し、ホームページ等を活用して情報発信していく。また、大学全体で情報を共有する機会や方法を検討する。

### 2. ボランティアセンター活動の推進

地域関係団体からの派遣依頼の調整はもとより、ボランティアセンターによる本学独自の学内外のボランティア活動も推進していく。また、令和9年度に開催予定の全国障害者スポーツ大会での選手団サポーター学生ボランティア要請（70名程度×3日間）に向けた準備体制を整え、参加学生を確保していく。

### 3. 順正ジョイフルキッズクラブ（JKC）の充実

令和8年度も実施回数20回を計画する。学年に合わせたプログラムの工夫や実施体制の強化を図る。具体的には、調理実習や企画イベントの回数を増やす。また、3年生には入試対策として面接練習や小論文指導などの要望に対応できるよう大学教職員と連携して充実していく。さらに、中学生と学習支援員のサポートを密にして、円滑な事業運営を確立していく。

## 令和7年度 自己点検・自己評価委員会報告書

部会名\点検・評価項目	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
学生受入部会		◎			○				

### ○令和7年度の取組状況

入学者を増やすための取り組みとして、以下4つの項目について取り組んだ結果、志願者数は昨年比92%、入学者数は昨年比97%となった。入学定員充足率は68.3%となり、各学科ともに100%は達成できなかった。また出願状況、入学定員充足率とも学科による差が認められた。

#### 1. オープンキャンパスおよびキャンパス見学会への参加者数を増やす（目標値：前年比120%）

令和7年度のオープンキャンパスの参加者数（6・7・8月開催分）は、高校生496名（昨年434名）で前年比114%、総参加者数1094名（昨年966名）で前年比113%であった。目標値には到達しなかったが、参加者数は2022年度から毎年増加しており、令和7年度は近年では最高数となった。これらは無料送迎バスの追加等、状況に応じた内容の細かい修正や、高校側の指導によるものと推察された。なお、キャンパス見学会（9月～12月）の参加者数は、中学・高校・既卒生53名（昨年84名）で前年比63%となった。

##### 【オープンキャンパス参加者数年次推移（※高校生のみ。3月開催分は除く）】

2025年度：496名      2024年度：434人      2023年度：372人      2022年度：295人  
 2021年度：152人\*      2020年度：162人\*      2019年度：449人      2018年度：460人

（\*2021および2020年度はコロナのため2回開催）

3月開催：2025年度：62人      2024年度：56人      2023年度：73人  
 2022年度：31人      2021年度：54人

#### 1-1. 参加者数を増やすために行った方策

##### 1) 資料請求者へ定期的なメール配信

資料請求者の一部（メールアドレス、LINE等を活用している方）には定期的な配信（オープンキャンパス告知、イベント開催告知、出願開始のお知らせ等）を行った。

##### 【資料請求者数推移】

2026年度入学生対象：12,341人      目標値 12,000人（昨年比119.5%）  
 2025年度入学者対象：10,326人      目標値 9,000人（昨年比119.3%）  
 2024年度入学者対象：8,652人      2023年度入学者対象：9,065人  
 2022年度入学者対象：8,194人      2021年度入学者対象：7,899人

#### 2. ガイダンスへの参加を増やす

宮崎県、沖縄県、大分県、鹿児島県を中心にガイダンスに参加した。学科教員の参加回数は昨年度とほぼ同数であったが入試広報室等職員の参加回数は減少となった（学科教員参加約50会場、入試広報室等参加126会場（昨年140会場）。また宮崎県内での認知度を上げ、県内出身者の入学者を増やすため計画していた宮崎市内のイベントは実施できなかった。さらに沖縄県出身者の入学を増やすことを目標としていたが、入学予定者8名（昨年10名）となった。

昨年度は一部の学科教員による高校訪問を実施したが、今後も学科（コース）ごとにターゲット校を絞り、学科教員による訪問を継続したい。

### 3. 学科および他委員会等との連携強化

各学科代表教員との広報活動に関する意見交換を行い、情報共有の体制を更に強化することで各学科（コース）の魅力を知りやすく伝える広報活動を行った。また「大学名」を認知させるために、ブランディング委員会等、関連する部会（委員会）との連携を深めることを目標としていたが、会議などの実施はできなかった。ただし、必要に応じてガールーン等を活用し広報活動を実施した。

### 4. 学科ごとのターゲット対象地域の見直し、および広報

各学科の志願者出身地域（過去3年）、高校などを精査し、各学科（コース）のターゲット地域・ターゲット高校等を明確にし、1～3に示す募集強化を行っていくことについて、口頭やガールーンを通じて情報提供を行い、訪問などを実施した。

## ○令和8年度の計画案

令和7年度では出願状況、入学定員充足率とも学科による差が認められたことから、学科（コース）の特徴を踏まえた広報活動の更なる強化が必要である。そのため以下の3点を強化的に実施し、入学者数250名を目指す（昨年比120%、定員充足率83%）。

### 1. 生命医科学科新コースの訴求強化と接触機会の拡大

- 1) 生命医科学科の新コースにスポットを当てた広報を展開し、他学科への関心喚起にもつなげる。
- 2) 資料請求者に対する定期的な情報提供を実施する。
- 3) ガイダンスや説明会の機会を増やし、接触者数を拡大する。
- 4) 沖縄・鹿児島・福岡など遠方地域に対しては、ネットバナー広告を活用し認知度向上を図る。

### 2. 重点地域における募集強化（宮崎県内・沖縄県）

- 1) 宮崎県内および沖縄県（特に離島）における認知向上と志願者増加を目指す。
- 2) 宮崎県内出身者の入学者増加に向け、宮崎市市内でのイベントを実施する。
- 3) 高校訪問等を計画的に行い、継続的な関係構築を図る。
- 4) 沖縄県（特に離島）への訪問・広報活動を強化し、受験生の掘り起こしを行う。

### 3. 入試制度の見直しと最適化

- 1) 受験生の多様なニーズに対応するため、入試制度の見直しを行う。
- 2) 入試形態等の変更を検討するワーキンググループを設置する。
- 3) 志願動向やニーズを踏まえた柔軟な入試制度を設計・実施する。

九州医療科学大学 中期目標・中期計画 【第3期】

九州医療科学大学（スポーツ健康福祉学科）

<p><b>ビジョン (教育目標)</b></p>	<p>医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。</p>	
<p><b>区分</b></p>	<p><b>全学共通目標</b></p>	<p><b>スポーツ健康福祉学科</b></p>
<p><b>教育力(使命・目的等を含む)</b></p>	<p><b>1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</b></p> <p>学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。</p> <p><b>2) 学修支援体制の強化</b></p> <p>学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。</p> <p><b>3) キャリア支援並びに就職支援の強化</b></p> <p>建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。</p> <p><b>4) キャンパス環境の整備</b></p> <p>本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。</p>	<p><b>I. 3つのポリシーを明確に示し、それらを踏まえた学修成果の可視化を図り、学生が自らの学びを振り返り展望することができる体制を構築する。</b></p> <p><b>II. リメディアル教育、とくに基礎国語力の向上について、学修成果の可視化を図りながら学びに対するモチベーション維持・増進を図る。</b></p> <p><b>III. 建学の理念、学部・学科の人材養成の目的を踏まえたアドミッションポリシーを策定し、学力の3要素、意欲、資質、能力を多面的に評価する評価基準の見直しを図る。</b></p> <p><b>IV. 卒業研究をはじめとしたアクティブ・ラーニングを活用し、自ら考え実践できる人材の養成に繋がる教育手法について検討し、実践する。</b></p> <p><b>V. 3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価を行い、より質の高い学修成果が身につくように、教育の改善向上に取り組む。</b></p> <p><b>VI. 学部（学科）FDを継続して企画・実施することで、個別の課題を横断的に共有し、学部（学科）全体および各コース個々の課題解決や、教員個々および教員組織としての教育力の向上に取り組む。</b></p> <p><b>VII. 国家資格取得を目指す学生に対してロードマップを作成し、指導内容と学生の習熟度を評価し、学修成果の可視化を図りながら国家試験合格を目指す。</b></p> <p><b>I. 問題を抱えた学生を可能な限り早期に発見・対応するために、チューター・学科教員・カウンセラー・保護者・事務職員との連携を図った支援体制を強化する。</b></p> <p><b>II. 学科行事やゼミ活動等を通じ、異学年の学生や卒業生と交流の場を企画し、各学生が卒業までの過程をイメージした上で、卒業に向けたモチベーションを高く持ち学生生活に臨めるように支援体制を整える。</b></p> <p><b>III. 進級規程に定められたGPAおよび修得単位数の基準の意義を1・2年生にわかりやすく説明し、これらの基準を卒業に向けた短期目標として捉え、将来に希望を持ち学業に取り組めるように、また3・4年生については、卒業や資格取得等の具体的な目標を定めて主体的に学業に取り組むことができる支援体制を整える。</b></p> <p><b>I. 学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」をキャリアサポートセンターとの協力により構築し、キャリアサポートセンターを積極的に活用するように促す。</b></p> <p><b>II. ミスマッチを防ぐため、学生個々の具体的な進路や希望する就職先に応じた「就職支援体制」をキャリアサポートセンターとの協力により構築する。</b></p> <p><b>III. キャリアサポートセンターと協力し、公務員対策を強化する。</b></p> <p><b>IV. 教員が有する地域社会・地域資源との関係を活用して、学生の就職に活かす。また、新たな就職先の開拓にも努める。</b></p> <p><b>I. 学科の各コースの強みや特色を活かした教育・研究環境の整備に取り組む。</b></p> <p><b>II. 実習施設、演習室、図書館等の有効活用を図る。</b></p> <p><b>III. 学修環境に関して学生の意見を基に検討し、学科レベルで可能な学修環境の整備に取り組む。</b></p>

<p><b>研究力</b></p>	<p><b>1) 大学の強みや特色を活かした研究力の強化</b></p> <p>地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。</p>	<p>I. 地域における中核的な研究拠点として、学科の特色を生かした研究を推進する。</p> <p>II. 学生を巻き込んだフィールドワークを行い、研究に繋げる。</p> <p>III. 学科や学内の教員間での共同研究を促進する。</p> <p>IV. 研究機器・備品等ハード面の適切な管理およびより使いやすい環境に整備する。</p> <p>V. 学会発表や学術雑誌への論文投稿を促し、研究力のアップを図る。</p> <p>VI. 研究成果をフォーラム、シンポジウム、研修会等で地域住民に還元する。</p> <p>VII. 研究活動の助成として、科研費申請や学内の「研究経費助成」、「地域創生事業研究助成」への申請を促す。</p>
<p><b>学生支援</b></p>	<p><b>1) 学生生活の支援を中心としたサービス向上</b></p> <p>学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。</p>	<p>I. 悩み（学生生活や授業など）のある学生が、より相談しやすい体制を構築する。</p> <p>II. チューター制度を活用し、学生の単位取得状況や生活状況を把握し、学生一人ひとりの状況に応じた適切な助言、指導を行い、また必要に応じて保護者や関係者へ連絡を行う。</p> <p>III. 学科会議において学生の状況を共有し、学科全体で支援する体制を整える。</p> <p>IV. 学生同士、横の繋がりのみならず、縦の繋がりを築ける行事を開催する。</p>
<p><b>募集力(ブランド力)</b></p>	<p><b>1) ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化</b></p> <p>ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。</p>	<p>I. 戦略的な募集活動を行う。</p> <p>II. 学科の施設・設備の整備を実施する。</p> <p>III. 社会的ニーズに応じた教育力の向上を図る。</p> <p>IV. 学科の魅力・特色や大学・学科の情報発信・広報活動を積極的に行う。</p>
<p><b>グローバル化</b></p>	<p><b>1) 国際競争力を意識したグローバル化の推進</b></p> <p>国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。</p>	<p>I. 留学生の受け入れについて、事務部門と連携・協力して環境整備を図る。</p> <p>II. 海外留学・短期研修プログラムについては積極的な案内を進めて、参加学生の増加を図る。</p> <p>III. 海外での学会発表や、国際ジャーナルでの論文発表などを推奨する。</p>
<p><b>地域活性化</b></p>	<p><b>1) 地域活性化の為に拠点創生</b></p> <p>地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。</p>	<p>I. 教員とともに学生も参加し、地域の活性化や地域課題解決に向けたフィールドワークに積極的に取り組む。</p> <p>II. 大学の施設や人材等を活用して、地域（自治体、関係機関、団体等）と共同企画を検討し、学生の主体的参加を促しながら協働事業を充実していく。</p> <p>III. イベント情報を教員が把握し、より多くの学生にイベント参加を促す。</p> <p>IV. 地域のニーズに対応すべく各種審議会や委員会の委員要請に応じていき、知の拠点としての役割を果たしていく。</p> <p>V. 福祉関係機関や教育現場（小学校・中学校・高校）との連携を強化し、教員の教育力・研究力を発揮する機会を創ると同時に、地域の活性化や人材育成のために大学の知の還元を推進する。</p> <p>VI. 地域における福祉、健康やスポーツに関する課題の解決を目的とした調査研究を実施する。</p>

<p>2025年度の総評 (今年度の取組)</p> <p>【定性評価スコア】</p> <p>5. 達成している 4. かなり進んでいる 3. 普通 2. やや足りない 1. ほとんど進んでいない</p>	<p>教育力(使命・目的等を含む)</p> <p>1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</p>	<p>I. 学生便覧に明示された3つのポリシーを踏まえてのシラバス作成、授業を展開した。学生の学修目標の到達度を高めるために、また、教育課程レベル(カリキュラム)および科目レベル(授業)の適切性を担保するために、学生の学修成果と教員の教育成果に関する情報の収集・分析・評価に係る方針、及び学生による自己評価の方針をアセスメント・ポリシーに定めた。</p> <p>II. リメディアル教育、特に基礎国語力の向上についてICT教材を活用したホームワークを実施し、全学国語統一試験により確認した。今年度は平均点の伸びが認められ、全体的な学力向上が確認された。一方で得点を下げた学生もいるため、個別の課題を把握し、継続的な支援と指導の充実を図っていく必要がある。</p> <p>III. 1学科、4コース体制となるために見直したアドミッションポリシーに沿った入試を行い評価した。面接における客観的な判定基準(ループリック)表を作成し、活用した。</p> <p>IV. スポーツ健康福祉学科と臨床福祉学科との統合2年目の卒業研究発表会を、昨年に引き続き合同開催した。昨年度の発表会終了後に意見を聴取し、今年度に反映させた。両学科の学生が自由に発表を聴講できる環境整備に取り組んだ。異なる学科・コースの発表を聴講する学生もみられ、概ね会の運営は成功したと考えられる。</p> <p>V. 各教員が3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価を行い、より質の高い学修成果が身につくように、教育の改善向上に取り組んだ。旧スポーツ健康福祉学科では、社会福祉士国家試験合格者1名、教員採用試験の現役合格者1名、教員採用試験の前倒し選考(3年生受験)の合格者5名、アスレティックトレーナー学科試験合格者3名であった。学ぶ意欲、資格取得意欲の向上を目指したさらなる取り組みが必要である。</p> <p>VI. 学部(学科)FDを企画・実施し、他学部教員や事務局職員も参加した。教員個々および教員組織としての教育力の向上に取り組むための参考となるものであった。</p> <p>VII. 一年間を通して鍼灸健康コース全体で学習のフォローに当たった。国家試験対策以外にも、国家試験で出題されやすい情報を普段の講義でも取り入れながら講義を行った。模擬試験を3回(業者模試1回、教員作成模試2回)実施し、学習意識向上とマンネリ化の改善を行った。模範解答による自己採点によると、はり師、きゅう師ともに受験者10名中10名が合格ラインを超えている(合格発表は3月末)。</p> <p>社会福祉士の国家試験対策について、前期6月および後期10月に資格代表者による会議を実施し、年間の国家試験対策について検討した。旧スポーツ健康福祉学科では、社会福祉士2名受験1名合格で合格率50.0%(全国平均60.7%、福祉系大学新卒平均78.4%)であった。</p> <p style="text-align: right;">【定性評価スコア3】</p>
	<p>2) 学修支援体制の強化</p>	<p>I. 各チューター教員は、様々な学生を支援するため学生と真摯に向き合い、一人ひとりの状況に応じたきめ細やかな指導を学科チューターマニュアルに沿って行った。加えて他の学科教員やカウンセラー、事務職員などと連携して支援体制の強化を図った。各教員は、授業評価アンケート結果や学修ポートフォリオなどを活用し、学生の学びに対する悩みを把握し、授業改善などに反映させた。状況に応じて保護者と連絡をとり、問題解決の働きかけを行った。これらの状況は、月に1度行う学科会議で他の教員へ情報提供を行い、学科全体で学生の支援を行えるよう取り組んだ。</p> <p>II. 入学式直後に保護者も交えたチューター懇談会を行い、各コース毎のチューター単位で、上級生が大学生活や資格取得のための勉強について直接レクチャーを行うなど、大学生活をイメージしやすいような取り組みを行った。卒業研究発表会は全学年参加とし、1年生は基礎演習の一環、2年生はゼミ選択の参考として参加後にゼミ説明会を実施、3年生は発表会の運営を行うことで、卒業までの流れを意識させ、モチベーションの維持を図った。学科の全学生が希望参加できるイベントとして学科運動会を企画したが、残念ながら雨天中止となった。</p> <p>III. 入学前ガイダンス、入学後のオリエンテーション、1年次の基礎演習およびチューター時間、各学年での前期開始時(4月)および後期開始時(9月)のガイダンス、ゼミでの指導時、各資格にかかわる授業時において、継続して確認を繰り返し、希望する資格や卒業に向けて主体的に学業に取り組めるように支援した。</p> <p style="text-align: right;">【定性評価スコア3】</p>

<p>3) キャリア支援並びに就職支援の強化</p>	<p>I. キャリアサポートセンターを中心に、work Café 延岡や小規模就職説明会等を開催し、学生の参加を促した。キャリアサポートセンターの利用促進に取り組み、本年度の利用・面談件数(4月～1月)は、107件と昨年度(94件)と比べ増加した。</p> <p>II. キャリアサポートセンターから学生の就職活動に関する情報を聴取し、就職活動の状況把握に努めた。就職情報や就職面談会等について、ガールーンを通じて学科内教員と情報共有を行い、学生支援体制の強化を図った。3月23日時点で就職内定率は81.8% (昨年度100%) である。</p> <p>III. 今年度から公務員対策として2年生前期科目にキャリアデザイン演習Ⅴ、後期科目にキャリアデザイン演習Ⅵを開講した。将来に向けたキャリア支援として公務員を目指す学生に対して、公務員試験に向けた実践的な授業を行うための外部講師を招聘した。その他にも、キャリアサポートセンターと協力し、公務員対策講座や模試の案内を行うなど公務員対策の強化を行った。</p> <p>IV. 教員が有する地域社会・地域資源との関係を活用して、学生の就職に活かした。また、新たな就職先の開拓にも努めた。</p> <p style="text-align: right;">【定性評価スコア4】</p>
<p>4) キャンパス環境の整備</p>	<p>I. 新たに教育・研究備品として9点追加があった(救急救命コース)。また、耐用年数が過ぎ使用できなくなった備品の整理も進めた。</p> <p>II. 学科教員を対象に教育備品の使用頻度を調査したところ、昨年と同程度の使用頻度が確認された。図書館での学科関連図書として新規購入書籍82冊が新規購入された。学科学生からのリクエストは0だった。</p> <p>III. 測定評価室として3号棟1階E-101～103を整備し、大会館のアスレティックトレーナー演習室から測定機器を移設した。また、同棟2階E-201～206も生理学、生化学および免疫学などの医療科学分野の研究が可能な共同研究室として整備し、学修環境の充実に取り組んだ。</p> <p style="text-align: right;">【定性評価スコア4】</p>
<p>研究力</p>	<p>I. QOL研究機構社会福祉学研究所と連携して、地域に根差した調査研究・イベントを実施し、助成を受けた3件を報告書としてまとめ、公表した。</p> <p>II. 学生が参加した研究につながるフィールドワークでは「木城町連携事業・前期高齢者の実態調査(健康や生きがいなど)：参加学生26名×2回」「特別な支援を擁する児童・生徒への指導の実践と考察：参加学生18名」「健康寿命延伸プロジェクト(口腔器官機能と身体バランス)：参加学生4名」等が実施されており、いずれも学生とともに地域への研究成果の還元につながる活発な活動が行われた。また、学生の卒業研究として、福祉・介護の現場や学校現場における調査が行われた。</p> <p>III. 学科や学内の教員間での共同研究を促した。学内の「地域創生事業研究助成」に2件(共同研究含む)、「QOL研究機構社会福祉学研究所助成」に1件採択された。</p> <p>IV. 新たに教育・研究備品として9点を購入した。3号棟1階E-101～103を測定評価室として、同棟2階E-201～206を医療科学分野の研究が可能な共同研究室として整備した。</p> <p>V. 今年度の著作数(2)、論文数(6)、学会発表(12)、学会参加(28)、科研費応募(3)、科研費採択(1：継続を含む)、研究費助成等(1)であった。昨年度と比較すると、著作数、学会発表数、学会参加数、科研費応募数は同程度であったが、論文執筆数は減少した。また、所属教員1名が博士の学位を取得した。さらに、1名が取得に向けた研究を継続中であり、2名が学位取得を目指して進学予定である。</p> <p>VI. 「延岡市における小学生の運動能力向上を目的とした地域支援事業」「みんなが助かるインクルーシブな地域防災」「スポーツ外傷における救急対応と緊急時対応計画」「学校今昔物語とエビデンスによる子育て」「部活動の地域展開」「施設での職員によるスピーチロック防止について」「アルコール依存症のレジリエンス」など、各教員の専門分野を活かした講演、フィールドワークが数多く実施され、地域住民への研究成果の還元を行った。</p> <p>VII. 科研費応募(3)、科研費採択(1：継続を含む)、学内の地域創生事業研究助成採択(2：共同研究含む)、QOL研究機構社会福祉学研究所助成採択(1)であった。</p> <p style="text-align: right;">【定性評価スコア3】</p>

	<p><b>学生支援</b></p>	<p>I. オフィスアワーを積極的に活用するように学生に促した。オフィスアワー以外でも、何かあればチューターもしくは自分の話しやすい教員に相談が可能であることを伝えた。チューターやゼミ担当教員に加え、保健室内でカウンセラーによる学生相談が受けられることを学生に周知した。個人情報の管理に十分配慮しながら、学内のカウンセリングに関する状況をカウンセラーと関係教員とで共有し、学生指導に活かした。</p> <p>II. 学科におけるチューター制度の目的、学生支援の主な視点と役割を明文化して、生じ得る問題に対応するためのフローチャート（学科チューターマニュアル）を作成し、学科教員で共有した。これを活用し、学生の単位取得状況や生活状況を把握し、学生一人ひとりの状況に応じた適切な助言、指導を行い、また必要に応じて保護者や関係者へ連絡を行った。</p> <p>III. 月1回の学科会議において各チューターからの報告により学生の状況を共有し、学科全体での支援を行った。</p> <p>IV. 改組により学科定員が増加し、旧学科も存続した状態で2年目を迎えた。学科の全学生が希望参加できるイベントとして学科運動会を企画したが、残念ながら雨天中止となった。今後の対応について検討中である。</p> <p style="text-align: right;">【定性評価スコア3】</p>
	<p><b>募集力(ブランド力)</b></p>	<p>I. 進路ガイダンス、出張講義、教育実習での巡回訪問、高校の部活動などの現場に向かうアスレティックトレーナー実習などの機会も活用し、募集力（ブランド力）強化に努めた。強化部であるサッカー部の募集において、スポーツ系各コースで幅広く募集を行った。入学者定員確保を目指した結果、3月17日現在の入学見込み者数68名（今年度入学者数68名：充足率85%）で、今年度と同様に推移している。</p> <p>II. 本学科は、改組により順次開設された4つのコースで構成され専用の棟を有していなかったが、近接する空き教室に学科の施設・設備を設置してきた。これにより、オープンキャンパスでは高校生と保護者が各コースの施設を見学する流れがスムーズに行え、コースの魅力や特徴を学科の一体感を持って伝えることができた。スポーツ医科学分野の測定評価や研究を実施するため、空き教室となっているスペースの活用を要望し、3号棟1階E-101～103を測定評価室として、同棟2階E-201～206を医療科学分野の研究が可能な共同研究室として整備した。</p> <p>III. 資格取得率向上のために、各資格の担当者が模擬試験や個別に学生対応などの対策講座を行った。アスレティックトレーナー取得を目指す学生や教員が積極的に地域や高校に出向き、トレーナーとしてのサポートや講習会を実施した。学科の多くの教員がスポーツ関連の外部団体の委員を行うことで先進的なスポーツの関連の情報を得るとともに小中高の競技団体の指導者と交流を行った。開設2年目の救急救命コースの学生を中心に地域の消防団活動等に積極的に取り組み、社会的ニーズに応じた教育力の向上を図った。</p> <p>IV. 大学HP内の学科ブログや部活動の学生を中心としたSNSを活用しての学科情報の発信に努めた。出張講義や模擬授業を通して近隣の中学校や高校へ学科の魅力を発信した。教育実習やアスレティックトレーナー実習は、副次的効果として学科の魅力発信・学生募集に繋がっている。また、外部依頼による講演会やスポーツ活動のサポート等も、募集力（ブランド力）向上に貢献している。</p> <p style="text-align: right;">【定性評価スコア4】</p>
	<p><b>グローバル化</b></p>	<p>I. 事務部門と連携・協力して、在籍中の留学生の学修環境整備を図った。今年度の入学者はいなかったが、次年度は1名の予定である。</p> <p>II. 海外留学・短期研修プログラムの案内は十分に行っていない。</p> <p>III. 海外での学会発表、国際ジャーナルでの論文発表はなかった。</p> <p style="text-align: right;">【定性評価スコア2】</p>
	<p><b>地域活性化</b></p>	<p>I. 木城町との連携事業で地域課題の抽出と解決に向けたフィールドワークに、学生とともに継続して取り組んでいる。実施にあたって、分野を超えた教員が相互に協力し、異分野の積極的な交流を図った。</p> <p>II. のべおか子どもセンターのイベントで本学体育館やグラウンドを使用し、またボランティアとして学生も参加し、親子での体力測定およびレクリエーションスポーツの体験会を実施した。「お灸教室」のイベントを企画し、学生とともに参加した。宮崎ワールドアスリートプロジェクト「記録測定会」に学生を派遣、運営に協力した。</p> <p>III. 高校部活動の練習会や大会、延岡市の駅伝大会、地域の特別な支援を要する小中学校の児童生徒が参加する「きらきらスポーツフェスタ」等のイベントに積極的に参加・協力した。</p> <p>IV. 地域のニーズに対応すべく自治体や競技団体などの各種審議会や委員会の委員要請に応え、知の拠点としての役割を果たせるよう努めた。</p> <p>V. 延岡市内の小中学校から依頼を受け、水泳授業や遠足の補助に学生をボランティアとして派遣した。また、学外授業として本学体育館にてレクリエーション指導等を受け入れ、本学学生主体に実施した。アスレティックトレーニング部の教員と学生が高校の部活動に対するサポートを行った。高大連携を活用し、本学教員が高校部活動の外部指導者として継続的に指導を行っている。</p>

		<p>VI. 宮崎県部活動地域展開のコーディネーターとして学科教員が県内の事業への取り組みを担当した。延岡市教育委員会主催による学校インターンシップ「教育大学リーグ」に学生が参加し、県内外の学生と交流し、学生視点による教育現場の現状について報告を行った。木城町との連携事業では、前期高齢者に対するインタビュー調査を実施し、生活課題やニーズを抽出、改善案を検討し、町に対して報告会を行い、地域活性化に向けて対応策を提案した。</p> <p style="text-align: right;">【定性評価スコア5】</p>
2026年度への展望 (来年度の計画案)	教育力(使命・目的等を含む)	<p>スポーツ健康福祉学科と臨床福祉学科の統合、救急救命士養成課程の新設により、スポーツ健康福祉学科の1学科、4コース体制となり3年目、新たに見直した3ポリシーに基づき、教育力の向上に向けて設定した各目標達成に向けての取り組みを行う。</p> <p>合同卒業研究発表会について、各セッション終了後の教員からのフィードバックを設定した発表会の円滑な運営を目標に、学習効果の向上を目指す。加えて、2年後の1学科4コース体制となった新学科での発表会に向けた運営計画の策定を行う。</p> <p>国家資格および認定資格を目指す学生の増加、各資格の合格率が全国平均を上回り、より多くの合格者を出すため、3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価をアセスメント・ポリシーに沿って行い、より質の高い学修成果が身につくように、教育の改善向上に取り組む。</p>
	研究力	<p>大学の強みや特色を活かした研究力の強化という目標の中で、特に本学科では「地域」がキーワードとして挙げられる。その地域に関連した研究を学生とともに遂行し、その成果を地域へと還元することは、地元延岡市との「公私協力方式」として開学した本学の特色を発揮するものである。また、地域に根差した研究活動とその成果の地域への還元は、地域の中核的研究拠点としての存在意義を強化し、ブランド力の強化にもつながるものである。</p> <p>QOL研究機構社会福祉学研究所と連携を継続し、地域における中核的研究拠点として、学科の特色を生かした研究を推進する。</p> <p>学生を巻き込んだフィールドワークを研究に活かす活動は、学生の学習・研究意欲向上にも非常に有意義であり、積極的に取り組む。</p> <p>論文および研究発表数の増加を目指し、単独で行う研究だけではなく学科や学内、さらに学外の研究機関や研究者との共同研究を促進する。</p>
	学生支援	<p>1学科、4コースと学科の規模が拡大して3年目、学生支援の仕組み、取り組みについて、状況に合わせての再構築を進めていく。</p> <p>学生生活や授業などについて悩みのある学生が、より相談しやすい体制を構築する。その一つとしてチューター制度を効果的に活用していく。</p> <p>また、個人情報に配慮しながら学生の状況を共有し、学科全体で支援する体制を整える。</p> <p>1学科4コース体制における、同学年や異学年との繋がりを築ける行事を検討し、可能なものから開催していく。</p>
	募集力(ブランド力)	<p>入試広報課と連携し、本学科の各コースに関して高校生が進路を決める際に重要視する点についての情報を収集、分析し、受け身ではなく積極的に4コースが協力し合い戦略的な募集活動を展開し、学科定員80名の確保のため各コース20名の入学者確保を目指す。</p> <p>他大学との競争において特にスポーツ施設の充実を行わなければ、他のスポーツ系大学との競争は困難となるため、スポーツ施設・設備の整備を実施し、本学科の特色を活かした環境づくりに努める。</p> <p>教職、アスレティックトレーナーや社会福祉関連の資格を目指す学生や教員が実践的学びを行うために、学校現場や社会福祉関連施設等と連携し、教育力の向上を図り、ブランド力向上につなげる。</p> <p>部活動を学生課と協力して活性化し、各部の活動や成績の向上を目指すとともにSNS等で活動情報を広める。</p> <p>学科のHPブログやSNSを充実させ、また、その他の広報媒体も活用して、学科の取り組みや学生の学びの情報を積極的に広める。</p>
	グローバル化	<p>事務部門と連携・協力し、受け入れた留学生の学修環境整備を図る。</p> <p>海外留学・短期研修プログラムについて積極的な案内を進める。</p> <p>海外での学会発表や、国際ジャーナルでの論文発表などを推奨する。</p>
	地域活性化	<p>地域の活性化や地域における福祉や教育、健康、スポーツ、医療に関する課題解決に向けたフィールドワークに、教員が学生とともに積極的に取り組む。その際、分野を超えた教員間の相互協力を重視し、異分野の積極的な交流を促す。</p> <p>地域のイベント情報を教員が把握して積極的に協力し、より多くの学生にイベント参加を促す。加えて、大学の施設や人材等を活用し、地域と連携した福祉や教育、健康、スポーツ、医療に関するイベントを企画し、実施する。</p> <p>各種審議会や委員会からの委員要請や受託業務に積極的に応じ、さらに、自身の活動や成果を積極的に情報発信し、地域住民や関係者との連携を強化するなど、教員が自身のフィールドを広げるように努める。</p>

九州医療科学大学 中期目標・中期計画 【第3期】

九州医療科学大学（臨床福祉学科）

ビジョン (教育目標)	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	学科別計画・対策
<b>教育力(使命・目的等を含む)</b>	<b>1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</b>  学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	①福祉現場のニーズに対応できる専門知識や技術、実践力を備えた福祉・教育人材を育成するというディプロマ・ポリシーに基づく単位認定を行うための基準を策定し、学科での周知活用を目指す。  ・福祉人材育成に求められる評価ポイントを整理し、学科内で共有し各教員が単位認定の在り方を検討する  ②社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の資格取得を目指す学生に対してロードマップを作成し、指導内容と学生の習熟度を評価しながら国家試験合格を目指す。  ③3つのポリシーを踏まえた学習成果の点検や評価を定期的に学科内で行い、より質の高い教育の提供を目指す。  ・学科内で学内教育および実習教育等の学外教育において注意や教育上の配慮を要する学生の情報を共有し、学生教育の質の向上を目指す。  ④大学および学部FDに積極的に参加し、教員の教育力向上を目指す。  ⑤座学講義におけるアクティブラーニングの導入を推奨する。また、アクティブラーニング実施科目の実施状況を学科内で共有し、効果的な教授法について検討する。
	<b>2) 学修支援体制の強化</b>  学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	①ディプロマ・ポリシーに基づいた卒業研究の評価基準を策定し、卒業研究指導のあり方を学科で共有したうえで指導を実践し、学生が自ら学ぶ力を十分に引き出すことのできる卒業研究発表会の実現を目指す。  ②1年次からの卒業研究教育法を確立し、4年間を通じた卒業研究指導を目指す。  ③教員による講義参観や複数担当教員科目を通じて、教員相互で教授法について定期的な意見交換を実施し、また、授業アンケートの結果を踏まえ、各講義の教授法改善の良循環を目指す。  ④国語力増進プログラムを構築し、文章力・読解力の基礎ならびに論理的思考を身につけさせ、専門書の内容理解やレポート報告書の作成、卒業論文の執筆技術につなげる。  ⑤統計や社会調査等のデータの取り扱いに際し必要となる数学的知識や操作スキルを習得させ、エビデンスに基づいた論理的思考教育を目指す。
	<b>3) キャリア支援並びに就職支援の強化</b>  建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	就職率100%を目指す ①「基礎演習」（1年次必修）の中で、キャリア教育を取り入れ、就職についての動機付けを行う。  ②学科会議等を利用して、個々の学生のニーズを教員間で共有し、学科全体としてのサポート体制を整える。  ③ミスマッチを防ぐために、インターンシップや就職ガイダンス等への参加を促進して、学生の自己覚知を促す。  ④キャリアサポートセンターを積極的に活用するように指導する。特に就職面接対策講座等の受講を促す。  ⑤キャリアサポートセンターとの連携を密にはかる。特に就職面談会等の情報を教員も把握して、参加促進をはかる。  ⑥教員が有する地域社会・地域資源との関係を活用して、学生の就職に活かす。また、新たな就職先の開拓にもつとめる。
	<b>4) キャンパス環境の整備</b>  本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	①学修環境に関して学生の意見を基に、学修環境について検討し安全で快適なキャンパス生活実現に向けた環境整備に取り組む。 ・演習室、図書館、英語村等の有効活用を図る。

<p><b>研究力</b></p>	<p><b>1) 大学の強みや特色を活かした研究力の強化</b></p> <p>地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。</p>	<p>①地域における中核的な研究拠点として学科の特色を生かした研究を推進する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域のネットワークや資源を活用し、地域に密着したテーマに基づいた研究を推奨する。</li> <li>・学生を巻き込んだフィールドワークを行い、研究に繋げる。</li> <li>・学科教員間での共同研究を勧める。</li> <li>・研究成果をフォーラム、シンポジウム、研修会等で地域住民に広く還元する。</li> <li>・学会発表や学術雑誌への論文投稿を促し、研究力のアップを図る。</li> </ul> <p>②研究活動の助成として、科研費申請や学内の「研究経費助成」、「地域創生事業研究助成」への申請を促す。</p>
<p><b>学生支援</b></p>	<p><b>1) 学生生活の支援を中心としたサービス向上</b></p> <p>学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。</p>	<p>①学生の健康相談や経済的支援（奨学金等利用を含む）に関して担当部署、保護者等との連携を図る。</p> <p>②学内のバリアフリーに関する課題を検討し学内の利便性を図り、学生のサービスへとつなげる。</p>
<p><b>募集力(ブランド力)</b></p>	<p><b>1) ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化</b></p> <p>ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。</p>	<p>①学科の魅力発信</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校（特に出身校や福祉科高校など）と連携を図り、学科の魅力を伝える。</li> <li>・学科ブログを更新し、近況をアップする。</li> <li>・保護者通信で在学生の様子や学科の取り組みを紹介する。</li> </ul> <p>②オープンキャンパスのあり方を検討し、分かりやすい学科案内方法を検討する。</p> <p>③高校のガイダンス（出張講義）や大学見学会、体験型模擬授業、こども体験学習等を積極的に受け入れ、福祉の職業理解につなげる。</p> <p>④学生が地域（学外）に出る機会（ジョイフルキッズクラブ、ボランティア活動、授業活動等）を通して、地域との交流を図る。</p> <p>⑤公開講座やセミナー、科目履修証明プログラム等を通して、教員一人ひとりの研究内容や講義内容を地域住民へ情報発信をする。</p>
<p><b>グローバル化</b></p>	<p><b>1) 国際競争力を意識したグローバル化の推進</b></p> <p>国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。</p>	<p>①海外での学会発表や、国際ジャーナルでの論文発表などを推奨する。</p> <p>②留学生の受け入れを積極的に行い、事務部門と連携・協力して、受け入れに伴う環境整備を図る。</p>
<p><b>地域活性化</b></p>	<p><b>1) 地域活性化の為に拠点創生</b></p> <p>地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。</p>	<p>①教員をはじめ学生参加により、地域の活性化や地域課題解決に向けたフィールドワークを積極的に取り組む。</p> <p>②大学と地域（自治体、関係機関、団体等）と共同企画を検討し、学生の主体的参加を促しながら協働事業を充実していく。</p> <p>③地域のニーズに対応すべく各種審議会や委員会の委員要請に応じていき、知の拠点としての役割を果たしていく。</p> <p>④福祉関係機関や教育現場（中学・高校）との連携を強化し、教員の研究力を発揮する機会を創ると同時に、人材育成・地域の活性化に還元していく。</p>

<p>2025年度の総評 【定性評価スコア】 5. 達成している 4. かなり進んでいる 3. 普通 2. やや足りない 1. ほとんど進んでいない</p>	<p>教育力(使命・目的等を含む) 【定性評価スコア3】</p>	<p>1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化【定性評価スコア3】 ①福祉現場のニーズに対応できる専門知識や技術、実践力を備えた福祉・教育人材を育成するというディプロマ・ポリシーについて、学科会議にて専門職を目指す学生の受講態度や講義方法および、専門知識や技術、実践力の醸成について意見交換を行ったが、単位認定基準の検討および共有化には至らなかった。 ②社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の国家試験対策について、前期6月および後期10月に資格代表者による会議を実施し、年間の国家試験対策について検討した。国家試験の結果は、社会福祉士が臨床福祉学科73.7%合格(全国合格率60.7% 新卒福祉系大学合格率78.4%)、精神保健福祉士が60%合格(全国合格率78.2% 新卒福祉系大学合格率85.4%)、介護福祉士が100%合格(全国合格率70.1%)であった。社会福祉士80%以上合格、精神保健福祉士100%合格の目標達成には至らなかった。転科生1名、編入学生1名が社会福祉士国家試験に合格した。 ③3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検や評価について、毎月開催される臨床福祉学科会議で学生生活および出席状況、学修状況において課題を抱える学生について、情報収集し、情報共有を行った。さらに、課題のある学生には指導を行うことに加え、保護者への情報提供を行い学科全体で対策した。退学した学生は2名であった。進級等ができなかった学生に関しては、本人・保護者や関係部署(通信教育学部や教務課)と連携し、適切に対応した。 ④本学および学部FDに公務で出席できなかった教員以外、全学科教員が参加し、教育力の向上に努めた。 ⑤学科教員が実施しているアクティブラーニングの事例を画面にまとめ、学科教員で共有した。</p> <p>2) 学修支援体制の強化【定性評価スコア3】 ①ディプロマ・ポリシーに基づいた卒業研究の評価基準を策定し、卒業研究評価の統一化・平準化を図った。学科全体での卒業研究発表会を開催し、聴講者として1～3年生も参加させ、低学年に対する卒業研究への意欲の醸成を図った。 ②3年次と4年次にフィールドワーク演習Ⅰ・Ⅱの科目を設定し、同演習のなかで調査法、調査結果の読みとり、プレゼンテーション演習を実施することで、卒業研究の補助演習として位置づけた。 ③複数担当教員科目のなかで、相互に担当する授業を聴講し、授業改善につながる意見交換をおこなった。そのほかの授業では積極的な授業参観を実施することができず、教授法改善の良循環には至らなかった。 ④卒業研究のルーブリック評価表を作成し、評価項目に分析・考察・まとめを含めることで、統一的な、文章力・読解力・論理的思考の評価を可能にした。卒業研究要旨集を学科統一で作成し、指導教員以外の執筆状況確認が可能となるようにした。 ⑤フィールドワーク演習Ⅰ・Ⅱの科目において、量的調査法と調査結果の分析方法を教授し、統計や社会調査等のデータの取り扱いの指導をおこなった。</p> <p>3) キャリア支援並びに就職支援の強化【定性評価スコア4】 ①基礎演習のチューター時間や専門ゼミの時にキャリアサポートセンターの職員から、センターの役割や目的について説明を受けた。 ②キャリアサポートセンターから学生の就職活動の状況把握や就職面談会等について、ガルーンを通じて学科内教員と情報共有を行った。就職内定率は70.8%(3月11日時点昨年度100%)であった。 ③キャリアサポートセンターを中心に、work Café 延岡や小規模就職説明会等を開催し、学生の参加を促した。本年度の利用・面談件数(4月～2月)は、111件と昨年度(94件)と比べ増加した。 ④⑤公務員希望の学生には、キャリアサポートセンターやエクステンションセンターと協力し、各地域の公務員試験の傾向などの確認や勉強会や有料模試の案内を行った。その結果、市役所に合格者があった。 ⑥教員が有する地域社会・地域資源との関係を活用して、学生の就職に活かした。また、新たな就職先の開拓にも努めた。</p> <p>4) キャンパス環境の整備【定性評価スコア3】 基礎演習の授業で、演習室、図書館、英語村等のキャンパス環境を学生に周知した。講義等において図書館等を活用した学習機会を増やした。国家試験対策や自主学習などに有効活用できるよう、演習室を整備した。</p>
<p>研究力 【定性評価スコア3】</p>		<p>①県内自治体との連携事業の一環で、学生を主体としてフィールドワーク、聞き取り調査を実施した。調査結果を当該自治体の住民に報告して共有した。 地域のネットワークを活かした研究については一部実施している教員もいるが、積極的に実施できてはいない。学生間での共同研究や他大学研究者との共同研究は一部の教員が実施している。全体で学会発表数は2、学会参加10名、学術雑誌への掲載は5(査読付き4、招待1)、報告書2であった。博士論文完成1名。 ②助成を受けた研究については、報告会、報告書の作成を実施した。科研費の継続が3であった。「研究経費助成」、「地域創生事業研究助成」への申請は一部見られたものの、積極的には実施できていない。</p>
<p>学生支援 【定性評価スコア3】</p>		<p>①オフィスパワーやチューター時間、ゼミ時間を活用し学生の生活状況や学業等について個別面談等を実施した。学生の個人情報を守秘できる範囲で学科教員や場合によっては学部長、教務課、学生課と情報共有している。進級が難しい学生、欠席の多い学生に対しては学生、保護者に早期に対応している。卒業生24名のうち編入生・転学科生の計6名が卒業した。2025年度の状況についての状況は、教育力1)③に記載している。 ②バリエーションに関する課題は、学生より意見はなかったが、教員から積極的なはたらきかけはしていない。</p>

<p>2025年度の総評【定性評価スコア】</p> <p>5. 達成している</p> <p>4. かなり進んでいる</p> <p>3. 普通</p> <p>2. やや足りない</p>	<p>募集力(ブランド力) 【定性評価スコア4】</p>	<p>ソーシャルワークコースとして、取り組んだ内容を記載する。</p> <p>①学科の魅力発信 「宮崎県高校生介護技術コンテスト」(福祉科高校)の審査委員、普通科高校の進路ガイダンスや模擬授業などを通して中・高校へ福祉の魅力を伝え、学科ブログの更新については、学科統合後、福祉に関する内容を更新できていない。年2回の社会福祉学部保護者通信を発行した。</p> <p>②オープンキャンパスのあり方の検討 コースごとに体験や相談のブースを設けた。4コースの協力で案内がスムーズにできている。来場者は例年並みであった。</p> <p>③高校のガイダンスや大学見学会、体験型模擬授業等を積極的に受け入れ、福祉の職業理解につなげた。 高校の進路ガイダンス(出張講義・福祉の仕事)1件、中学・高校生の大学訪問(模擬授業)5件、受け入れを行った。</p> <p>④学生が地域に出る機会を通して、地域との交流を図る。 ジョイフルキッズクラブ、ボランティア活動、日向国地域体験学習、木城町連携事業、防災フェスタ、防災ボランティアセンター設置運営訓練、専門職との事例検討会など、実習以外でも授業やボランティアで、地域の方々と交流を継続した。</p> <p>⑤公開講座やセミナー、講演会など教員一人ひとりの研究内容や講義内容を地域住民へ積極的に情報発信した。科目履修証明プログラムの参加者はいなかった。</p>
	<p>グローバル化 【定性評価スコア0】</p>	<p>グローバル化 ①海外での学会発表や、国際ジャーナルでの論文発表などの情報交換はできていない。 ②臨床福祉学科での留学生の受け入れがないので取り組んでいない。</p>
	<p>地域活性化 【定性評価スコア4】</p>	<p>① 学生参加による、地域の活性化や地域課題解決に向けたフィールドワークの取り組み</p> <p>1) 木城町との連携事業の実施(10年目) ソーシャルワーク演習(2年生対象21名)、教員7名により木城町でのフィールドワークを実施した(7月と12月)。 特徴1) 木城町前期高齢者20名に対するインタビュー調査を実施し、生活課題やニーズを抽出、改善案を検討し、木城町に対して報告会を行い、地域活性化に向けて対応策を提案した。 特徴2) 健康づくりをテーマに学生が企画運営して、ストレッチ教室並びに子どもから高齢者までの参加を得て、ミニ運動会を開催した。地域づくり・参加支援事業の一環とした世代間交流の機会を設定した。</p> <p>2) 災害ボランティアセンター設置運営訓練の実施と災害時避難経路フィールドワークの実施 ソーシャルワーク演習Ⅳ(3年生30名)が、アパートなどの居住地から近隣避難所への避難経路を昼夜2回歩くことにより、危険個所の確認とリスク回避策を考察し、防災意識を高めた。</p> <p>3) 2月1日(日)延岡市防災フェスタへの4名の学生参加により学生のフィールドワーク実施状況の展示を行い、普及啓発活動にかかわった</p> <p>4) 宮崎県障がい者相談支援事業連絡協議会との共同事例検討会の実施 (精神保健福祉援助演習Ⅰ・時事福祉学Ⅱ 11月7日(金)3~4限目) 内容:現場で活躍されている相談支援専門員の方々(40名)から実際の事例を提示していただき、支援の現状と課題を学ぶとともに、求められる対策について学生(31名)と相談支援専門員がともに検討した。</p> <p>②木城町連携事業の一つとして、前期高齢者の生活実態把握のアンケート調査を実施し、その結果を報告書にまとめた。 研究チーム教員により調査表を作成し、木城町前期高齢者対象724名への郵送調査(令和7年7月22日~8月31日)を実施し、232名の回答を得ている。</p> <p>③県、市町村、各種団体からの要請に応え、8割の教員が各種審議会や委員会委員など26の組織委員において役割を果たしている。</p> <p>④県内外の福祉・医療関係機関団体から研修講師の派遣依頼が21件あり、教員の専門性を発揮する機会を得て地域の活性化に役割を果たしている。一部の教員に限られている点が課題である。教育現場への出張講義には、高校4回対応し、福祉への関心を寄せる人材育成への機会とした。</p>

2026年度への展望	教育力(使命・目的等を含む)	<p><b>1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</b>  ①福祉現場のニーズに対応できる専門知識や技術、実践力を備えた福祉・教育人材を育成するというディプロマ・ポリシーに基づく単位認定基準を6月までに作成するとともに、その単位認定基準を用いて学生が自身の学習状況を振り返り、単位認定に向けて強化すべき課題を把握できるよう支援する。  ②前年度の結果を評価検証し、社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験受験対策の充実を図る。前期は受験に対する基本的姿勢の修得を基盤としつつ、前期および後期にかけて受験生の習熟度を受験生自身が把握できるよう数値化する。前期および後期に各1回、国家試験対策状況を共有するための代表者会議を開催するとともに、毎月、学生の習熟度をガールーン上で全教員に配信し、学生指導及び支援に役立てる。社会福祉士80%以上、精神保健福祉士・介護福祉士100%の合格を目標とする。  ③3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検や評価を毎月開催される臨床福祉学科会議で行う。視点として、学生が抱える生活および学修状況における課題に加え、積極性や行動力、社会貢献など他学生の模範となるような学生についても共有し、学生の力を引き出すための指導方法を検討する。学生自身の学修成果について学修ポートフォリオを活用し学生の認識を促すとともに、今後の展望につなげる。  ④大学および学部FDに全学科教員が参加し、教育力の向上を目指す。  ⑤学科教員が実施しているアクティブラーニングの事例を学科会議で共有し、各講義での教育方法の工夫を実施する。アクティブラーニングを通しての学修成果を学生が可視化できるよう、評価基準を定め活用する。</p> <p><b>2) 学修支援体制の強化</b> ①  学科共通の卒業研究の評価基準を活用して、各教員の指導力の統一化・平準化を図る。また、低学年（後継のスポーツ健康福祉学科ソーシャルワークコース）も聴講する卒業研究発表会を実施し、大学での学修意欲の向上に努める。  ②卒業研究の達成度を可視化するために、指導外教員による卒業研究発表評価の導入を検討し実施する。  ③教員による講義参観を促し、各講義の教授法改善の良循環を目指す。  ④卒業研究のルーブリック評価項目に、文章力・読解力を測る項目設定を検討し、実装する。</p> <p><b>3) キャリア支援並びに就職支援の強化</b>  キャリアサポートセンター職員と情報共有し、就職率100%となるよう学生指導を行う。また、「マイステップ私の活動記録」を活用し、就職への動機づけを行う。</p> <p><b>4) キャンパス環境の整備</b>  ・学生が自由に学習図書を使用できるような場を設けていく。  講義と連動した図書館等利用の機会を増やすとともに、学生の意見を取り入れながら、学生が自主的に学習できるスペースの活用を進める。これまで整備してきた教育環境の充実を図っていく。</p> <p><b>研究力</b>  ①地域のネットワークや資源を活用し、宮崎県、近隣地域が抱える問題、テーマに基づいた研究を推奨する。研究活動は学科教員に限定せず、他大学の研究者、学生と積極的に研究会等で学術交流を図る。また、研究成果は学会発表や学術雑誌へ積極的に論文投稿、他にも地域住民に公開してフォーラム、シンポジウム、研修会等を、小規模なものから実施する。本学会を会場として積極的に活用して地域住民に、より身近に感じられるような大学を目指す。  ②研究助成を活用した研究に関しては、学会発表、学術論文投稿による公表を行う。また、教員同士の共同研究のみならず、情報交換のための研究会や、書籍の共同執筆なども積極的に行う。</p> <p><b>学生支援</b>  ①研究助成を活用し、セミナー時間、ゼミ時間を活用し学生の状況を把握し、必要時は学科教員、学科長・学部長、担当部署と連携し早期対応をする。1～3年生はスポーツ健康福祉学科と連携していく。また、対応困難な学生については「アカデミックアドバイザー推進機構」を活用する。</p> <p><b>募集力(ブランド力)</b>  ①②③④⑤スポーツ健康福祉学科教員の一員として継続して積極的に取り組んでいく。  保護者通信を学科ブログに変更するため、ソーシャルワークコースのブランド力をブログを通じて伝えていく。</p> <p><b>グローバル化</b>  ①海外での学会発表や、国際ジャーナルでの論文発表するための情報収集・共有をする。  ②他コースの教員と連携し、留学生の受け入れ環境整備を積極的に取り組む。</p> <p><b>地域活性化</b>  ①②③④ 継続していく。また、新規での要請も積極的に取り組む。</p>
------------	----------------	--

九州医療科学大学 中期目標・中期計画 【第3期】

九州医療科学（臨床心理学科）

<p><b>ビジョン (教育目標)</b></p>	<p>医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。</p>	
<p><b>区分</b></p>	<p><b>全学共通目標</b></p>	<p><b>学科別計画・対策</b></p>
<p><b>教育力(使命・目的等を含む)</b></p>	<p><b>1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</b></p> <p>学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。</p> <p><b>2) 学修支援体制の強化</b></p> <p>学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。</p>	<p>1 臨床心理学科における3つのポリシーを明確に示し、ステークホルダーへの理解を深めることで、教育目標の実現を図る。</p> <p>2 臨床心理学科が掲げる3つのポリシー（DP・CP・AP）について、学生などのステークホルダーが、ホームページ・ガイダンス・オリエンテーション等の様々な方法をスムーズに活用できるように促す。また、学生自らの学びを省察できる体制を構築する。その方法として以下の取り組みを重点課題とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学修支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）の積極的な活用を促す。</li> <li>基礎教養教育における学部横断型カリキュラムの全学協働による展開と受講を促進させる。</li> <li>国語力等の向上にのための課題実施及び、elearningを積極的に活用する。</li> <li>初年次教育につながる入学前教育の実施する</li> </ul> <p>3 学生自らが考える力を向上させる。その対策として以下のような取り組みを進めていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>卒業研究指導のあり方を検討し、学生が自ら学ぶ力を十分に引き出すことのできる卒業研究を目指す。</li> <li>できる限り多くの科目において、学科教育力を向上させるアクティブラーニングの導入を目指す。</li> <li>コース会議等で卒業研究の取り組み状況を確認し合い、全員の卒業論文の完成を目指す。</li> </ul> <p>4 基礎国語力増進させる。対策として以下のような取り組みを進めていく。</p> <p>5 学修成果の点検・評価においては、臨床心理学科の3つのポリシーを踏まえて、PDCAサイクルを円滑に確立し、より質の高い学修成果が身につくように、教育の改善・向上に取り組んでいく。</p> <p>1 大学院進学希望者への効果的な対策を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>高校英語の再学習の機会を設け、英語力の向上を図る。</li> <li>英語村を積極的に活用し、インプットだけではなくアウトプットの学習にも力を入れる。</li> </ul> <p>2 国家試験合格率アップへ向けた対策を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>国家試験対策部会で効果的な対策方法を検討・実施し、コース会議等でその効果を検証する。</li> <li>1年次から資格関連科目の授業において、必要に応じて資格取得の意義・意識づけを行う。</li> <li>資格希望者のうち、成績不振者に対して個別指導による国家試験対策を行う。</li> <li>コース会議等で各学生の成績を共有し、教員間で個別の対策を検討する。</li> </ul> <p>3 学科教員の教育力のアップを図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>授業改善に向けたFDへの積極的な参加を促す</li> <li>学修成果可視化に向けた教員相互による授業改善の仕組みを検討する。</li> </ul> <p>4 教育施設のレベルアップを図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>社会生活コミュニケーション室、家庭生活コミュニケーション室等を設備し、学内の実習・演習等で積極的に活用する。</li> <li>学生の学習場所として演習室を積極的に開放し、国家試験対策や単位認定試験対策等の学習の利用を促す。</li> <li>学生の学習場所で学生が使用できる学習資料や学習ツールを充実させる。</li> </ul>

<p><b>教育力(使命・目的等を含む)</b></p>	<p><b>3) キャリア支援並びに就職支援の強化</b></p> <p>建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。</p>	<p>1 学生の希望する就職先への就職率をアップさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>履歴書作成や模擬面接等を通じて、全ての学生が希望する就職先へ就職できるよう、キャリアサポートセンターと連携を取りながら、きめ細かい指導を行う。</li> <li>「即戦力の九州医療科学大生」「印象の良い九州医療科学大生」を求人側施設にアピールできるよう、学生に臨床教育を行う。</li> <li>低学年からインターシップへの積極的な参加を促し、キャリアイメージを早期に形成できるように支援を行う。</li> </ul> <p>2 キャリア支援の一環として、行われる公務員試験対策講座への積極的な参加を学生に促す。</p> <p>3 学生に各種就活イベント等への参加を促進する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>キャリアサポートと連携し、学科に必要なガイダンスを通年で実施する。</li> <li>対面での就職活動を意識したイベントへの参加を促す。</li> </ul>
	<p><b>4) キャンパス環境の整備</b></p> <p>本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。</p>	<p>教育施設のレベルアップを図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>社会生活コミュニケーション室、家庭生活コミュニケーション室等を設備し、学内の実習・演習等で積極的に活用する。</li> <li>学生の学習場所として演習室を積極的に開放し、国家試験対策や単位認定試験対策等の学習の利用を促す。</li> <li>学生の学習場所で学生が使用できる学習資料や学習ツールを充実させる。</li> </ul>
<p><b>研究力</b></p>	<p><b>1) 大学の強みや特色を活かした研究力の強化</b></p> <p>地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。</p>	<p>1 学科教員の研究力アップを図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学科教員間で研究力アップの仕組みを検討する。</li> <li>研究力アップの仕組みを充実させ、研修等を周知する。</li> <li>学会への参加等、研究活動に必要な機会を保障する。</li> <li>学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に推進する。</li> </ul> <p>2 研究施設のレベルアップ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>必要な研究施設・設備の調査を行う。</li> <li>研究施設充実のための資金調達の検討を行う。</li> <li>必要な研究施設整備を行う。</li> </ul> <p>3 外部資金の獲得を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>外部資金獲得に関する研修会等の参加を促す。</li> <li>研修等で得た知識を活かして、資金獲得の具体的な対策を立てる。</li> <li>科研費や外部資金への積極的な申請を促す。</li> </ul>
<p><b>学生支援</b></p>	<p><b>1) 学生生活の支援を中心としたサービス向上</b></p> <p>学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。</p>	<p>1 学生生活を積極的にサポートする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>定期的なチューター面談を実施し、学生の情報をコース会議等で報告し、教員間で共有する。</li> <li>学生の学力の把握を常時行い、必要に応じてチューターからの指導を実施する。</li> <li>学生の適性やモチベーションに応じた指導を行う。</li> <li>学生の意見を教育内容や方法に反映させ満足度の向上を図る。</li> </ul> <p>2 退学者を防止する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>連続欠席者に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行う。</li> <li>学生が抱える問題を早期に発見し、健康管理センターと連携して適切に対応する。</li> <li>教員はオフィスアワーだけでなく、相談やコミュニケーションがとりやすい環境を作る。</li> <li>チューターも含めた複数の教員で学生に寄り添い、不安や困りごとに対応する。</li> <li>転学科してきた学生に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行う。</li> <li>転学科してきた学生について、教員間で情報を共有し、早期対応を行う体制をとる。</li> </ul>

<p>学生支援</p>		<p>3 社会人としてのマナーを身につけさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>各チューターやゼミ担当教員が、マナーについて学生の心構えについて確認し、大学生の生活の様々な場面で、社会が求めるマナーが身につくように必要な指導を実施する。</li> <li>教員から学生に対して積極的な挨拶を行い、普段から学生にどの程度のマナーが身についているかを教員間で確認する。</li> <li>学内実習を通して、社会人として現場に必要な基本的態度、他人との関わり方について具体的な指導を行う。</li> </ul>
<p>募集力(ブランド力)</p>	<p>1) <b>ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化</b></p> <p>ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。</p>	<p>1 学科入学定員確保のための対策。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教員が学生ファーストの立場で教育を行い、在学生から家族や先輩、学校関係者に本学科の肯定的な評価が伝わるよう日々努力する。</li> <li>入試広報、教員との連携を進めて広報活動を活発にする。高校訪問、出前講義等を活用し、本学科に興味関心を向けてもらえるよう働きかけ、一般入試における入学希望者の増加に繋げる。</li> <li>本学科の教育理念、方針、コース内容などについてわかりやすく説明できるチラシ等の作成を行う。</li> <li>入学者に対する入学動機、傾向を調査し、結果を広報活動に活かす。</li> <li>入試広報室と定期的に情報交換会を行い、奉公活動のあり方を協議する。</li> <li>高校訪問、出張講義等を積極的に行い、本学科をアピールする。</li> </ul> <p>2 学科の魅力を発信する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>中高生の学科見学、高校からの模擬講義、出張講義等に積極的に対応する。</li> <li>社会で活躍している卒業生の情報を収集し、オープンキャンパス等で紹介する。</li> <li>国家資格取得状況についてチラシ、ホームページ等を活用して発信する。</li> <li>保護者通信等で在学生の様子や学科の取り組みを紹介する。</li> </ul>
<p>グローバル化</p>	<p>1) <b>国際競争力を意識したグローバル化の推進</b></p> <p>国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。</p>	<p>1 学内の国際化推進に努める事で、グローバル化を推進する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学科の学生に対して、ラーニングサポートセンター(英語村)の積極的な利用を促す。</li> <li>学科教員に対して。海外の研究者との共同研究や、海外での学会発表、国際ジャーナルでの論文発表など、海外を意識した研究活動を促す。</li> </ul>
<p>地域活性化</p>	<p>1) <b>地域活性化の為の拠点創生</b></p> <p>地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。</p>	<p>1 学科教員の地域連携力を向上させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教員と自治体・関係機関・団体・学校との連携活動状況(連携協働事業、教員の専門知識・技術、研究成果の提供状況)を把握し、状況を教員間で共有するとともに、その成果を検証・分析し、連携の強化を図る。</li> <li>教員に期待される地域のニーズ・期待度を把握する(自治体・関係機関等)</li> <li>連携推進に係る検討チームを設置し、地域要請に応えられるよう相談窓口を検討する。</li> <li>学会等、関連団体の役員として、地域・社会貢献を行う。</li> </ul>

<p>2025年度の総評 (今年度の取組)</p>	<p>教育力(使命・目的等を含む)</p>	<p>1 基礎国語力の向上  <ul style="list-style-type: none"> <li>入学前教育で国語力向上の課題を継続し、基礎国語力の増進を図った。</li> <li>e-learningを見直し、学科独自の国語力対策を進めた結果、学生が意欲的に取り組んだ。</li> <li>多くの学生が卒業研究に主体的・積極的に取り組んだ。</li> <li>学科の科目でアクティブラーニングに取り組んだ。</li> </ul> </p> <p>2 学修支援体制の強化  <ul style="list-style-type: none"> <li>学科全体として、学習支援体制の強化を行うことはできなかったが、各教員が個別の対応を積極的に行なった。</li> </ul> </p> <p>3 国家試験、大学院試験、就職率の強化  <ul style="list-style-type: none"> <li>言語聴覚士国家試験合格率は50%であった。</li> <li>公認心理師指定大学院志望者の進学率は80%であった。</li> </ul> <p>(達成度:3)</p> </p>
	<p>研究力</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学会への参加等、研究活動に必要な研修の機会を保障した。</li> <li>各教員学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に行なった(学会発表9件、査読付き論文2件(国際誌1件))</li> </ul> <p>(達成度:4)</p>
	<p>学生支援</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>連続欠席者に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行った。</li> <li>学生が抱える問題を早期に発見し、健康管理センターと連携して適切な対応を行った。</li> <li>本年度の退学者は1名であった。</li> </ul> <p>(達成度:4)</p>
	<p>募集力(ブランド力)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>入試広報、教員との連携を進めて広報活動を活発に行なった。</li> <li>土日見学会、オープンキャンパス、高校訪問、出前講座等を活用し、本学科に興味関心を向けてもらえるよう積極的に働きかけた。</li> <li>本学科の教育理念、方針、コース内容などについてわかりやすく説明できるチラシ等の作成を行った。</li> <li>入試広報室と定期的な情報交換会を行い、広報活動のあり方を協議した。</li> <li>高校訪問、出張講義等を積極的に行い、本学科を知らない学校関係者、生徒、保護者に本学科の特色をアピールした。</li> <li>令和8年度の本学科の入学予定者のうち2人の社会人が公認心理師資格取得のため2年次へ編入学した。</li> </ul> <p>(達成度:4)</p>
	<p>グローバル化</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学科の学生は、ラーニングサポートセンター(英語村)を積極的に利用した。</li> <li>国際誌への掲載論文が1本あった。引き続きインパクトファクターの高い国際ジャーナルでの論文掲載を目指して、学科教員の積極的な研究活動を促していく。</li> </ul> <p>(達成度:4)</p>
	<p>地域活性化</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>昨年度と同様に、教員と自治体・関係機関・団体・学校との連携活動状況(連携協働事業、教員の専門知識・技術、研究成果の提供状況)を把握し、状況を教員間で共有するとともに、その成果を検証・分析し、連携の強化を図った。</li> <li>学科教員が学会等、関連団体の役員として、地域・社会貢献を行った。</li> </ul> <p>(達成度:4)</p>

2026年度への展望 (来年度の計画案)	教育力(使命・目的等を含む)	<p>1 基礎国語力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学前教育で国語力向上の課題を継続し、基礎国語力の増進を引き続き図っていく。</li> <li>・基礎演習の中で、学科独自の国語力向上の取り組みを行う。</li> <li>・学生が自ら学ぶ力を十分に引き出すことのできる卒業研究を目指す。</li> <li>・できる限り多くの科目において、学科教育力を向上させるアクティブラーニングの導入を目指す。</li> <li>・学生全員の卒業論文の完成を目指す。</li> </ul> <p>2 学修支援体制の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学科教員の教育力のアップを図る。</li> <li>・授業改善に向けたFD等への積極的な参加を促す</li> <li>・教員相互による授業見学等を行い、授業改善の内容等を検討する。</li> </ul> <p>3 国家試験、大学院試験、就職率の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・言語聴覚士国家試験合格率100%を目指す。</li> <li>・公認心理師指定大学院志望者の進学率100%を目指す。</li> <li>・就職希望者の就職率100%を目指す。</li> </ul>
	研究力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学会への参加等、研究活動に必要な研修の機会を保障する。</li> <li>・学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に推進する。</li> <li>・積極的に外部資金を獲得できるようさまざまな働きかけを行う。</li> </ul>
	学生支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・連続欠席者に対して、チューターや授業担当者を中心に早期対応を行う。</li> <li>・学生が抱える問題を早期に発見し、健康管理センターと連携して適切な対応を行う。</li> <li>・学生がいつでも教員等に相談できるような支援体制の構築を検討する。</li> <li>・心理的な問題を抱えて登校が困難が学生に対して、本学の通信教育等への転科を提案する。</li> <li>・心理的な問題を抱える学生に対して様々な配慮を行う。</li> <li>・本学科の退学者0人を目指す。</li> </ul>
	募集力(ブランド力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員自身が学生ファーストの立場で教育を行い、在学生から家族や後輩、学校関係者に本学科の肯定的な評価が伝わるよう日々努力する。</li> <li>・入試広報、教員との連携を進めて広報活動を活発に行う。</li> <li>・土日見学会、オープンキャンパス、高校訪問、出前講座等を活用し、本学科に興味関心を向けてもらえるよう積極的に働きかける</li> <li>・本学科の教育理念、方針、コース内容などについてわかりやすく説明できるチラシ等の作成を行う。</li> <li>・入試広報室と定期的な情報交換会を行い、広報活動のあり方を協議する。</li> <li>・高校訪問、出張講義等を積極的に行い、本学科を知らない学校関係者、生徒、保護者に本学科の特色をアピールする。</li> <li>・公認心理師取得を考えている社会人も視野に入れた広報活動を行う。</li> </ul>
	グローバル化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学内の国際化推進に努めグローバル化を推進する。</li> <li>・学科の学生に対して、ラーニングサポートセンター（英語村）の積極的な利用を促す。</li> <li>・学科教員に対して、海外の研究者との共同研究や、海外での学会発表、インパクトファクターの高い国際ジャーナルでの論文発表など、海外を意識した研究活動を促す。</li> </ul>
	地域活性化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員と自治体・関係機関・団体・学校との連携活動状況（連携協働事業、教員の専門知識・技術、研究成果の提供状況）を把握し、状況を教員間で共有するとともに、その成果を検証・分析し、連携の強化を図る。</li> <li>・教員に期待される地域のニーズ・期待度を把握する（自治体・関係機関等）</li> <li>・連携推進に係る検討チームを設置し、地域要請に応えられるよう相談窓口を検討する。</li> <li>・学会等、関連団体の役員として、地域・社会貢献を行う。</li> </ul>

九州医療科学大学 中期目標・中期計画 【第3期】

九州医療科学大学 通信教育部（臨床福祉学科）

<p><b>ビジョン (教育目標)</b></p>	<p>医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。</p>	
<p><b>区分</b></p>	<p><b>全学共通目標</b></p>	<p><b>学科別計画・対策</b></p>
<p><b>教育力(使命・目的等を含む)</b></p>	<p><b>1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</b>  学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。</p> <p><b>2) 学修支援体制の強化</b>  学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。</p> <p><b>3) キャリア支援並びに就職支援の強化</b>  建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。</p> <p><b>4) キャンパス環境の整備</b>  本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。</p>	<p>・3つのカリキュラムポリシーを明確に示すとともに、通信教育部の特徴について、学生などステークホルダーに対し、多様な情報媒体（雑誌、ホームページやガイダンス等）を活用し周知する。 ・学修者が目標とする資格取得や学習方法を支援するため、カリキュラムツリー（履修系統図）や履修モデルを提示する。 ・定期的な授業アンケートを実施し、学修成果の点検や評価を行い、教育内容・方法及び学習指導等の改善に取り組み、より質の高い教育の提供を目指す。 ・オンラインによるスクーリングの効果的な教授法について検討する。</p> <p>・通信教育部の学習支援体制の改善点を明確にし、環境を整備していく。 ・特に、ハイブリッドコースの学生が、学内で相互交流したり、添削課題等に取り組むことができる場所・空間を確保する。 ・学生によっては通信環境が不安定な場合もあるため、学内において、スクーリングや単位認定試験の際に活用できるパソコン室を設置し、運用する。（LL教室等学内優先で使用されており、随時使用できない状況にあるため） ・オンラインによる学生相談会を実施し、得られた情報を適切に分析・検討していく。 ・学生の学修進捗状況を確認し、継続的な学修環境へのサポートを通して、退学防止に努める。</p> <p>・キャリアサポートセンターと連携し、通信教育部からの就職希望者に対しても就活情報の提供を行う。また、必要に応じてオンラインでの面接指導や履歴書添削など、個別的就職支援も行う。 ・学生からの要望があれば、求人受付ナビの閲覧が出来るように設定し、本学に届いている全国からの求人情報をオンラインで確認出来るよう設定する。</p> <p>・ハイブリッドコースの学生が、学内で相互交流したり、添削課題等に取り組むことができる場所・空間を確保する。（再掲） ・学生によっては通信環境が不安定な場合もあるため、学内において、スクーリングや単位認定試験の際に活用できるパソコン室を設置し、運用する。（LL教室等学内優先で使用されており、随時使用できない状況にあるため）（再掲） ・通信事務課に隣接して学生の相談スペースを確保し、通信生が来学した際に、気軽に相談できる環境を整備する。</p>
<p><b>研究力</b></p>	<p><b>1) 大学の強みや特色を活かした研究力の強化</b>  地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。</p>	<p>・基礎となる学部において研究活動を推進する為、通信教育部独自では目標や計画は策定しない。</p>
<p><b>学生支援</b></p>	<p><b>1) 学生生活の支援を中心としたサービス向上</b>  学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。</p>	<p>・通信制への入学動機等から、心身に関することや経済的な背景を把握し、支援の必要性を通信事務課と教員で情報共有し、支援体制を構築していく。 ・経済的支援（奨学金等利用を含む）に関して担当部署、保護者等との連携を図る。 ・学修の進捗状況を把握し、必要に応じて個別に相談対応していく。 ・学生の問い合わせに対して、メール・電話等を活用して迅速に対応できるようにサービス向上に努める。</p>
<p><b>募集力(ブランド力)</b></p>	<p><b>1) ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化</b>  ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。</p>	<p>・通信教育部の特色（福祉と心理が学べる）や学習方法の選択性（ハイブリッドコース設定のメリット）等についてわかりやすいパンフレットや広報媒体等を作成し、募集広報戦略を検討する体制を作っていく。 ・通信教育部独自の募集方法として、教育提携校や提携施設を増やすとともに、募集を全国圏域に拡大していく。 ・社会人及び通信制や定時制をもつ高等学校に通信教育の周知を図る。新たにハイブリッドコースの魅力も取り入れながら広報活動を行う。 ・インターネットを利用した募集強化の充実を図る。</p>
<p><b>グローバル化</b></p>	<p><b>1) 国際競争力を意識したグローバル化の推進</b>  国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。</p>	<p>・大学全体でのグローバル化の推進には協力するが、学部の特長から通信教育部独自では目標や計画は策定しない。</p>

地域活性化	<p>1) 地域活性化の為に拠点創生</p> <p>地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福祉人材の充足と質の向上に資するため、福祉施設等や関係機関・団体との提携により、実践現場職員のスキルアップに寄与できるよう知の拠点としての役割を果たしていく。</li> <li>(現状：ある福祉職場では高校卒業の職員が入職と同時に通信教育部に入学させて資格取得と大学卒業を目指す環境を整備している。学費も職場が出資)</li> </ul>
2025年度の総評 (今年度の取組)	<p><b>教育力(使命・目的等を含む)</b></p> <p><b>研究力</b></p> <p><b>学生支援</b></p> <p><b>募集力(ブランド力)</b></p> <p><b>グローバル化</b></p> <p><b>地域活性化</b></p>	<p>定性的な評価として、5. 達成している、4. かなり進んでいる、3. 普通、2. やや足りない、1. ほとんど進んでいない、を採用した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームページ上に教員と学生の対談動画を掲載し学習方法や本学の実習についてわかりやすく説明した。</li> <li>・進学情報サイトへ情報を掲載し、広く募集に努め、関連校開催の進学説明会へ参加した。</li> <li>・スクーリング時の授業アンケートを実施し、集計結果を担当教員にフィードバックし、授業改善の検討資料として活用した。</li> <li>・実習教育の充実を図るため、教員チームによりスクーリングの平準化を図る取り組みを開始した。</li> <li>・社会福祉士国家試験対策情報を希望する学生（既卒者を含む）に、年間を通して随時模擬試験などの最新情報を配信した。また、メディア形式による対策講座を取り入れ学生が好きな時間に対策動画を閲覧できるように利便性を図り、オンラインによる試験対策講座を年1回（12月23名参加）開催し、合格率の向上に取り組んだ結果、合格率75.4%（昨年度75.9%）であった。</li> <li>【評価スコア4】</li> </ul> <p>通信教育部独自では目標や計画は設定していない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・直接の来学、電話、オンラインそれぞれに対応し在学生の学習相談、入学希望者の入学相談をおこなった。</li> <li>・スクーリング等連絡事項を郵送からメール配信に移行し、迅速な対応を可能とする体制を確立してきた。</li> <li>・科目単位認定試験を完全オンライン化した。</li> <li>・ハイブリッドコース学生用の大学における演習室を確保し活用を開始した。</li> <li>・ハイブリッドコース学生に対して、年4回定期的な個別面談を行い、状況を把握しながら対応してきた。</li> <li>・事務室のスクーリング用PCを入替え、PCトラブルでスクーリングが滞らないように努めた。</li> <li>・ホームページアクセス数13,287あり、チャットボットを10月より開始して6か月で386件の利用実績を得た。随時、問い合わせへの解答更新を行い、学生の利便性を高めた。</li> <li>【評価スコア4】</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通信教育協会主催の入学説明会（大阪・福岡）会場へ2回参加し募集に努めた。東京・名古屋会場には資料提供を行った。</li> <li>・オンラインによる在学生の学習相談、入学希望者の入学相談をおこなった。</li> <li>実績として、大学案内パンフレット請求数は1,422件あった。</li> <li>・通信教育部独自に新たな教育提携校としてネクスト ケア カレッジと協議し、提携することとなった。</li> <li>・デジタル広告を導入し、リターゲティング広告を実施した。</li> <li>【評価スコア4】</li> </ul> <p>通信教育部独自の目標や計画は策定していない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・福祉施設・専門職能団体への広報活動により、実践現場職員のスキルアップに寄与する環境を推奨した。（提携団体への入学金・免除制度の周知を図った年2回）</li> <li>【評価スコア3】</li> </ul>
2026年度への展望 (来年度の計画案)	<p><b>教育力(使命・目的等を含む)</b></p> <p><b>研究力</b></p> <p><b>学生支援</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・通信教育部の特色を生かした教育内容の充実を図る。</li> <li>・オンラインによるスクーリングの教授方法を教員間で共有し、対応可能な教員数を増やしていく。</li> <li>・ハイブリッドコースのメリットを明確にし、学びの多様性を実現できる教育方法を検討していく。</li> <li>・スクーリング時に学生アンケート調査を行い、教育内容の改善に役立てる。</li> <li>・社会福祉士国家試験の最新情報の発信充実と年2回実施の試験対策講座への参加を働きかけ、合格率向上を目指す。</li> </ul> <p>通信教育部独自の目標や計画は策定していない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・通信教育部に関連する問い合わせには継続して丁寧な対応を行うとともに、通信生との連絡手段としてメールを活用していく。</li> <li>・提出書類関係について、可能な限りデータの送受信で確認できるシステムを活用し、学生の利便性と省力化を図る。</li> <li>・学内において、スクーリングや単位認定試験の際に活用できるパソコン室を設置し、運用する。</li> <li>・ハイブリッドコースの学生が、学内で相互交流したり、添削課題等に取り組むことができる学習スペースを利用しやすい環境に充実する。</li> <li>・通信生が来学した際に、気軽に相談できる学生相談スペースの環境を整備する。</li> <li>・添削課題のオンライン化を実施し、利便性を図る。</li> <li>・ハイブリッドコースは3年目で実習実施年でもあるため、定期的な個別面談を行いながら支援していく。</li> </ul>

2026年度への展望 (来年度の計画案)	募集力(ブランド力)	<ul style="list-style-type: none"> <li>提携校の開拓を行い、入学者を拡大していく。</li> <li>通信教育部の特色（福祉と心理が学べる）や学びの多様性を実現できるハイブリッドコースのメリットを明確にして、通信制高校などに積極的にアピールしていく。</li> <li>進学情報サイトに社会福祉、心理、大学院と3分野に参画し広く募集を行う。</li> <li>提携団体（宮崎県社会福祉法人経営者協議会・宮崎県介護支援専門員協会・宮崎県介護福祉士会）への定期的（年2回以上）な広報活動を推進する。</li> <li>新たな提携団体を検討していく。</li> <li>デジタル広告の幅を広げて認知拡大、出願率アップにつなげていく。</li> <li>通信教育協会、関連校主催の進学説明会へ積極的に参加していく。</li> </ul>
	グローバル化	通信教育部独自の目標や計画は策定していない。
	地域活性化	<ul style="list-style-type: none"> <li>提携している教育機関、福祉関係機関の人材確保に資するニーズを把握するため意見交換会等の場に参画し、知の拠点として通信制大学が果たす役割を明確にしていく。</li> <li>提携団体の職員に対する通信制大学のスキルアップカリキュラム（科目等履修制度等）の活用を促し、地域に貢献していく。</li> </ul>

九州医療科学大学 中期目標・中期計画 【第3期】

九州医療科学大学（薬学科）

<p><b>ビジョン (教育目標)</b></p>	<p>医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。</p>	
<p><b>区分</b></p>	<p><b>全学共通目標</b></p>	<p><b>学科別計画・対策</b></p>
<p><b>教育力(使命・目的等を含む)</b></p>	<p>1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</p> <p>学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。 (学修成果基盤型教育の徹底)</p>	<p>1 全教員で薬学科のブランドビジョンを策定した上で、3つのポリシーの改訂を行い、教員・学生・学外への周知を行う。カリキュラム委員会が中心となり、ブランドビジョンを達成するためのカリキュラム編成を行う。</p> <p>2 学修者本位の教育課程編成の理念のもと、薬学科の3つのポリシー(DP・CP・AP)を明確に定め、学生などのステークホルダーに対し、ホームページ・ガイダンス・オリエンテーション等様々な方法を活用し周知する。また、学生自らの学びを省察できる体制を構築する。その方法として以下の取り組みを重点課題とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学修支援システム(UNIVERSAL PASSPORT)の積極的な活用(特に学修ポートフォリオ、マイステップの機能)</li> <li>・基礎教養教育における学部横断型カリキュラムの全学協働による展開と受講促進</li> <li>・初年次教育につながる入学前教育の実施</li> </ul> <p>3 薬学科のポリシーに基づく入学者選抜を実施するために以下の取り組みを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アドミッションポリシーに沿った、入試科目の設定</li> <li>・高等学校の教育課程に応じた出題範囲の設定と見直し</li> <li>・学力の3要素、意欲、資質、能力を多面的に評価する評価基準の見直し</li> <li>・入学者の追跡調査</li> <li>・上記4つの実施とその結果の分析、それを踏まえたアドミッションポリシーの策定</li> </ul> <p>4 薬学科のブランドビジョンをを明確に示し、土台となる横断的な基礎教養教育を実践することで、医療・福祉などのコ・メディカル専門人材を育成する。その一例として、アクティブ・ラーニングを推奨し、自ら自分自身の学修における問題を提議し、解決策を考え、それを実践できる人材の養成に繋がる教育手法を共有する。</p> <p>5 学修成果の点検・評価においては、学修成果基盤型教育における評価基準を事前に設定した上で3つのポリシーを踏まえて、内部質保証を重視した点検・評価を行うことで、PDCAサイクルを円滑に確立し、より質の高い学修成果が身につくように、卒業生や地域社会関係者及び地域医療関係者による効果的な第三者評価の実施など、教育の改善向上に取り組む。</p> <p>6 大学全体のFD活動はもとより、薬学科のFDの実践を推奨し、個別の課題を横断的に共有することで、全体の課題解決に取り組む。また、教育実践の点検評価として、授業アンケートの実施方法並びに内容を検証することで、教育内容・方法及び学習指導等の改善に取り組む。</p> <p>7 中核センター教育開発部門が中心となり、教授方法改善に繋がるFD活動を毎年実施し、学部学科の垣根を超えた教員間のグループワークを行うなど、教育方法の改善に取り組む。</p> <p>8 本学は医療・福祉を中心とした専門職人材養成を目指す学部学科により構成されている。その土台となる学部横断的な基礎教養教育の充実並びに開発に努め、地域社会に貢献できる人材養成を実践できるカリキュラムを構築する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カリキュラムツリー(履修系統図)及び履修モデルの活用、精査</li> <li>・シラバスの検証とチェック体制の強化</li> </ul>

<p><b>教育力(使命・目的等を含む)</b></p> <p><b>2) 学修支援体制の強化</b></p> <p>学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。</p>	<p>1 中核センター教育開発部門を中心に、教職協働によるエンロールメントマネジメントに関する方針・計画・実施体制を適切に整備し、運営する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 全学的なチューター制度を土台に、学修支援システム(ユニバ)の積極活用により、学生 個々の支援体制を強化する。</li> <li>• 退学防止の観点から、授業の連続欠席者情報を教職員が共有し、早期から学生の対応に取り組む。</li> <li>• 在学中のあらゆる活動を可能な限り可視化(ユニバ、マイステップの積極活用)し、学生のキャリア開発を継続的に支援する。</li> </ul> <p>2 教職協働により在籍学生数に応じた教室の割り当ておよび管理を行う。教室設備の経年劣化に伴う改修等も見据え、将来計画を踏まえた実現可能かつ実効性のある学修環境を提供する。</p> <p>3 リメディアルを含めて、学生アンケートの実施と回答率向上に努め、得られた情報を適切に分析・検討し課題の明確化を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 授業アンケートの回答促進を行う。</li> <li>• 授業アンケートを含めその内容精査に努め、効果的に学生の意見を反映できる体制確保に取り組む。</li> </ul> <p>4 単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等は学生便覧やオリエンテーションにおいて周知徹底を図り、厳正に適用することで進級・卒業率の向上に取り組む。卒業研究はルーブリックを用いて公正な評価を行う。</p> <p>5 自ら考え行動できる専門職人材を養成する為に、学部学科を横断した教養科目の開発に取り組む、専門的な知識と技術の実践に必要な、思考力・判断力・コミュニケーション能力、及び国語力等の基礎学力向上に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• すららの利用促進を含め、基礎学力向上に向けた取り組み強化について全学的に検証する。</li> <li>• 学部横断科目の履修者を増やす。</li> </ul>
<p><b>3) キャリア支援並びに就職支援の強化</b></p> <p>建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援体制」を構築する。</p>	<p>1 教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備を進める。地元企業と連携し、学生のキャリア支援の取り組みとしてオープンカンパニーやインターンシップを含む企業との接点を積極的に提供する。また、外部機関と連携し学生のキャリア支援を強化する。</p> <p>2 就職支援サイトと連携することで就職支援の強化に努める。ミスマッチを防ぐことを最大の目的とし、本学独自の就職ガイダンスを実施する。また、各地で開催される就職説明会等の情報を収集し、職種にあった情報をリアルタイムで提供する。</p> <p>3 キャリア支援の一環として、公務員試験対策講座の強化を進める。参加学生の要望や各自治体の採用試験に合わせ、現場の専門職も参加した、より有意義な講座とする。</p> <p>4 学生に各種就活イベント等への参加を促進する。各学科のキャリアサポート委員と連携し、学科が求めるガイダンスを通年で実施する(就職面談会〔5年生対象〕など)。また、対面での就職活動を意識したイベントも新たに計画する。</p>
<p><b>4) キャンパス環境の整備</b></p> <p>本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。</p>	<p>1 校地、校舎等の学修環境の整備と適切な運営・管理を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 施設設備の優先順位や必要性を明確化した上で、中長期的視点に立った修繕計画の立案や既存施設の老朽化対策を検討することで、学修環境の整備や管理を行う。</li> </ul> <p>2 実習施設、図書館等の有効活用を検討し、学生のニーズに対応する教育研究環境を整える。</p> <p>3 学修環境に関するアンケート調査や学生との意見交換の結果を分析・検討し、安全で快適なキャンパス生活実現に向けた環境整備に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 建物の利用状況や用途、設備の整備状況等を把握し施設の有効活用を図る。</li> </ul>

<p><b>研究力</b></p>	<p><b>1) 大学の強みや特色を活かした研究力の強化</b></p> <p>地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 外部研究費の獲得や国際学術誌への論文投稿などを促進する研究支援体制を構築することで研究環境の整備に努め、実施される研究活動についても研究倫理や安全面での管理を行い、適切な研究体制の運営を行う。</li> <li>2 研究活動を適正に行う為に、関係諸規程の見直しや制定を行い周知する。併せて関係委員会などにおいて厳正な研究内容の審査を実施し適正な運用を行う。</li> <li>3 海外の研究者との共同研究や、海外での学会発表、国際ジャーナルでの論文発表など、海外を意識した研究活動を推奨し、研究のグローバル化を推進する。</li> <li>4 研究活動の点検・評価においては、内部質保証を重視した点検・評価を行うことで、PDCAサイクルを確立し、より質の高い研究活動が実施できるよう、適切な研究体制を構築する。</li> <li>5 論文発表、学会発表等の研究成果を可視化・公表することで、地域における研究のノード機関としての役割を構築する。</li> <li>6 学科内の高額共通機器等について、計画的な導入・更新を図る体制を見直す。</li> <li>7 学科内の共通機器等の管理者を明確にし、不具合時の対応だけでなく研究成果を上げる効果的な使用法等についての情報を共有する。</li> </ol>
<p><b>学生支援</b></p>	<p><b>1) 学生生活の支援を中心としたサービス向上</b></p> <p>学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望を把握し、分析・検討することで学生サービス向上に活用する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・健康管理センターを中心とした教職協働による支援体制の強化</li> <li>・学生の健康管理に関して外部機関と連携</li> <li>・課外活動支援の充実</li> </ul> </li> <li>2 各機関および諸団体から提供される奨学金情報は、遺漏のないように対象となる学生に確実に案内をすることで、学生の経済的負担を軽減することに繋げる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・家計急変等の情報を教職員間で共有することで、学生支援体制を構築</li> </ul> </li> <li>3 バリアフリーをはじめとする施設・設備の利便性向上を図る事で、学生サービス向上に繋げる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケート調査及び学生との意見交換を実施。</li> </ul> </li> </ol>
<p><b>募集力(ブランド力)</b></p>	<p><b>1) ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化</b></p> <p>ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 アドミッション・ポリシーに沿った入学者受入れの実施と検証を行う。(再掲)</li> <li>2 入学定員に沿った適切な学生受入れ数の維持に取り組む。</li> <li>3 入試・入学後のデータを分析し、高校との連携強化に取り組む。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・入試データおよび入学後の学生の伸長状況などのデータを分析し、関連部署と連携し、高校への情報発信を実施</li> </ul> </li> <li>4 学生を活用した大学の魅力を発信する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・部活動の活性化、学友会組織の強化、在学生に対するイベントの企画・告知・実施</li> <li>・オープンキャンパスにおける学生ボランティア、「在学生と語るう」の実施</li> </ul> </li> <li>5 効果的な学生募集の実施に向けて、卒業生の大学に対する満足度を向上させ、同窓生(会)との組織的な連携に取り組む。</li> <li>6 地域の学びの拠点として、施設の開放や受け入れなど以下の内容を積極的におこなうとともに広く活動を周知する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・地元学生・生徒のための体験行事、課外学習の受け入れ</li> <li>・施設の貸し出し、本学を会場とした公開講座の実施やセミナーなどのイベントを開催</li> </ul> </li> <li>7 教員一人ひとりの研究内容、成果についての情報発信を行う。また、高校生の課題研究に積極的にかかわり、高校との連携強化に取り組む。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・県北サイエンスフォーラム</li> <li>・県内高校の課題研究サポート</li> </ul> </li> </ol>

募集力(ブランド力)		<p>8 SNS・ウェブサイトを活用した、本学の魅力(学科の特色)や大学・学科の情報発信を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・薬学科の活動やイベント、薬用植物園の開花状況などを定期的に発信</li> <li>・学生スタッフを配置し、学生目線の情報発信による募集広報戦略を展開</li> </ul>
グローバル化	<p>1) 国際競争力を意識したグローバル化の推進</p> <p>国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。</p>	<p>1 学内の国際化推進に努める事で、グローバル化を推進する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生の受け入れ増加、受け入れに伴う環境整備の推進、ラーニングサポートセンター(英語村)の充実など</li> </ul> <p>2 薬学科教員が、定期的に米国提携校のフィンドレー大学への短期研修プログラムに参加し、フィンドレー大学からの薬学生の受け入れも定期的に行い、両校の交流を推進する。薬学科学生の海外留学・短期研修プログラムについては、実施可能かどうかを積極的に検討する。また、学生の英語力向上を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ラーニングサポートセンター(英語村)において、留学を希望する学生の語学力の向上のためのネイティブ講師によるレッスンを充実</li> <li>・留学を目的とした英語力の向上を目指すだけでなく、国際交流のためのイベントなどを充実</li> </ul>
地域活性化	<p>1) 地域活性化の為に拠点創生</p> <p>地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。</p>	<p>1 知の拠点として、産官学の地域連携も含めた地域振興及び人材育成に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自治体、関係機関、団体、学校等との連携を推進</li> <li>・県内の大学間連携・高大連携を推進</li> </ul>
2025年度の総評(今年度の取組)	<p>教育力(使命・目的等を含む) (教務委員会, カリキュラム委員会, アセスメント委員会)</p>	<p>1 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生自らが学びの省察を行えるよう、今年度もDP1~5の達成度(各科目の学生個人の評点に基づくスコア)の目標値を活用して学生ごとに現状でのDP1~5の達成度を評価して指導した。(達成率70%)</li> <li>・思考力、判断力、表現力、学びに向かう力、人間性などのレベル評価を目的として全学的に導入されたGPS-Academicを今年度も1年次の学生に対して実施した。個々の学生にはその結果をフィードバックし、より良いレベルを目指すよう指導した。(達成率70%)</li> <li>・各科目で実施しているSGD(Small Group Discussion)、ALなど到達目標の領域(技能・態度)とレベルに対応した学習成果の測定方法やその基準と評価方法(点数化)をシラバスに明記し、広く学生に周知し、ルーブリックを用いた評価を学科教員で実施した。(達成率70%)</li> <li>・総合選抜【特待生選考】について、薬学科で定めるアドミッションポリシーと合致するよう、小論文と数学の問題を含んだ総合科目という形で医療人としての資質を評価することとし、今年度より運用を開始した。(達成率70%)</li> <li>・自己点検報告書を用いた教員による担当科目の授業の自己点検体制を整備し、今年度より運用を開始した。(達成率70%)</li> </ul> <p>2 学修支援体制の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・より手厚い学修支援体制とすべく、助教を含めた専任教員の増員/学科専任の専門職員の配置/老朽化が進んだ一部の共通研究機器の更新について、学科長より大学に引き続き要望していくこととした。(達成率10%)</li> <li>・教育内容・方法及び学習指導等の改善に資するべく、学科独自のFDを年度内に2回実施した。(達成率100%)</li> </ul>
2025年度の総評(今年度の取組)	<p>教育力(使命・目的等を含む) (教務委員会, カリキュラム委員会, アセスメント委員会)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宮崎大学医学部附属病院薬剤部で行われる医学部学生クリニックへの本学薬学科学生の参加について、実施時期が8~9月となるため、I~II期で実務実習を終えることとなる5年生数名程度が参加できる体制を整備し、今年度より運用を開始した。(達成率70%)</li> <li>・入学前教育の改善について、指定校推薦などの入学予定者の入学前学習のフォローを開始した。リメディアルではプレイメントテスト、4年次の模擬試験については現状維持とした。6年生については、卒業試験の改善などに努め、薬剤師国家試験合格率の維持を目指した。(達成率70%)</li> </ul>

<p><b>研究力 (研究促進委員会)</b></p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 外部研究費の獲得について、薬学科では基本的に全ての教員に対して任期内での科研費の申請を奨励している。2026年2月に科研費採択の発表があり、2026年度の薬学科教員29人のうち、少なくとも11名が科研費を持っていることになり、約38%に達する。まだ、伸びしろがあるので、さらに獲得できるよう学科全体で努力する。学内の競争的研究助成にも積極的に応募してもらい、薬学科でかなり多くいただいている。学術誌への論文投稿については、数報アクセプトがあるが、引き続き増加させる手段を構築する必要がある。(達成率80%)</li> <li>2 全学の研究関連の講習会への参加を義務化している。(達成率90%)</li> <li>3 国際共同研究はなかなか進んでいないが、生薬の渥美准教授がアジア内での国際共同研究を推進している。また、木村教授が和歌山県立医科大学と共同で科研の国際共同研究加速基金を取得しており、国際研究を進めている。(達成率70%)</li> <li>4 薬学科研究活動の点検については、どの部署が点検するのかが定まっていない。どこがアセスメントするか決める必要がある。(達成率10%)</li> <li>5 薬理学講座の論文などを大学HPでアナウンスしてもらったり、学会発表及び、がっかいでの受賞者を大学HPや薬学科SNSに掲載した。(達成率70%)</li> <li>6 高額研究機器は、購入できていないが、研究施設の整備に努めている。(達成率60%)</li> <li>7 共通機器に関しては、研究環境整備委員会で適切に管理している。(達成率90%)</li> </ol>
<p><b>学生支援 (学生・安全委員会, ハラスメント委員会)</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生生活に関わる設備・環境に関しアンケート調査を実施した。前年度と同様、駐車場整備、構内の夜間外灯、講義室の空調について改善要望が多く挙がった。安全管理の面で速やかな対応が必要と考える事項もある一方、設備上、改善が困難なものもある。調査は計画通り実施したが、問題・要望の改善に至っていない点が多くある(達成率50%)。</li> <li>・学生の健康状況に関する情報は健康管理センターより提供された情報を基に取り纏め、学科教員間で情報共有を図った。学生の状況をより早く教員に周知することにより、学生生活や授業対応の面で指導に活かされている(達成率100%)。</li> <li>・奨学金に関する情報は学生課からUNIPAメールを介して発出され、奨学金を希望する学生は情報を取得しやすい環境にある。奨学金について学生が教員に問い合わせをした際には、教員は学生課を紹介するなど連携が確立されている。しかし、個々の学生にとって必要不可欠な情報(UNIPAメール)が見逃されることなく取得されているかは不明である(達成率90%)。</li> <li>・学生の意見を把握する機会として、学長との意見交換会(7月10日実施、3名参加)、延岡市議会議員との意見交換会(11月10日実施、3名参加)に薬学科学生が参加した。意見交換実施の点では達成率は100%である。</li> <li>・学生生活における学生からの相談事案に関しては薬学科ハラスメント委員間で情報を共有し対応した。また、学生課および健康管理センターと協働して学生相談に応じ、問題解決に向けて学生支援を強化した。相談事案をかかえた学生が気軽に相談しやすい体制をさらに整備する必要がある(達成率70%)。</li> </ul>
<p><b>学生支援 (学生・安全委員会, ハラスメント委員会)</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・就職活動について 教育課程内外を通じて、学生の社会的・職業的自立を支援する体制の強化を図った。これまで実施してきた「workcaféのべおか」、就活メイク講座、面接対策講座、公務員試験対策講座に加え、今年度は薬学科生を対象としたマナー講座も実施した。また、地元内外の企業との連携によるオープンキャンパニーの提供や、マイナビ・リクナビなどの外部機関と協力したキャリア支援を行った。さらに、県外企業枠と県内企業枠の2日間に分けて業界研究会を開催し、従来の5年生に加えて3年生の参加も促した結果、好評を得ることができた。加えて、今年度は低学年を対象とした5日間以上のインターンシップのコーディネートにも取り組み、実際に1年生1名が春休み期間中にインターンシップを体験することができた。これらの取り組みにより、学生の職業選択の幅を広げるとともに、就職活動の質の向上につなげることができた。(達成率70%)</li> </ul>
<p><b>募集力(ブランド力) (広報委員会, 入試委員会)</b></p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 実施できておらず、達成状況は0%であるが、これに関しては毎年検証するものではないとし、複数年の結果を評価する。</li> <li>2, 3 入学者維持のためには、入学者数増加が必須で、そのために下記のオープンキャンパス、高校への出張ガイダンス、出張講義、特に今年度も鹿児島の高校21校に学科長が訪問し、大学名と学費の変更や大学の魅力について説明した。新コアカリでの入試別入学後のデータは、1年生において収集中である。したがって、達成状況は、60%とする。</li> <li>4 オープンキャンパス(OC)における学生ボランティアにより、来場者から好評を得ている。一方、部活動や学友会組織、在学生向けイベント等に関しては、十分な取り組みが行えていない状況である。総じて、達成状況は60%とする。</li> <li>5 薬学科が主体となって行う5年生対象業界研究会を開催するにあたり、初めて業界研究会に関する学生アンケートを事前に行った。その結果を踏まえて参加する事業所に対しても業界研究会のコンセプト、学生アンケートの結果や個人情報の取り扱いなどに関して説明を行った。その結果、学生、事業所ともに業界研究会は有益であったとの意見を得ることができた。総じて、達成状況は70%とする。</li> </ol>

2025年度の総評 (今年度の取組)	<b>募集力(ブランド力)</b> <b>(広報委員会, 入試委員会)</b>	<p>6 地元学生(小中高生)を対象とした、多くの体験行事や課外学習、進路ガイダンス等を行っており、参加学生や保護者から好評を得ている。お仕事体験では、薬剤師の仕事を経験してもらい、アウトオブキッザニアinのべおかでは、科学捜査研究所の研究者としての体験を行ってもらい、良い評価を得た。各中学校から依頼があった際には全例対応している。総じて、達成状況は80%とする。</p> <p>7 今年度も県北サイエンスフォーラムを実施した。参加者が少ないため、何かしらの改善が必要である。また、県内高校の課題研究への取り組みは継続している。現時点での達成状況は60%とする。</p> <p>8 SNSでは、インスタグラム(ID:kums_pharm)を活用しており、投稿件数は、増加している。また、フォロワー数は849名(2025年度末時点)と多くはないが着実に増加し、投稿へのリアクション数も増えてきている。ウェブサイトがリニューアルされ、それに伴い薬学科のコンテンツも充実している。総じて、達成状況は70%とする。</p>
	<b>グローバル化</b> <b>(国際交流委員会)</b>	<p>6 地元学生(小中高生)を対象とした、多くの体験行事や課外学習、進路ガイダンス等を行っており、参加学生や保護者から好評を得ている。お仕事体験では、薬剤師の仕事を経験してもらい、アウトオブキッザニアinのべおかでは、科学捜査研究所の研究者としての体験を行ってもらい、良い評価を得た。各中学校から依頼があった際には全例対応している。総じて、達成状況は80%とする。</p> <p>7 今年度も県北サイエンスフォーラムを実施した。学外参加者がいなかったため、周知を強化する。県内高校の課題研究への取り組みを継続して行っている。現時点での達成状況は55%とする。</p> <p>8 SNSでは、インスタグラム(ID:kums_pharm)を活用し、2026年3月時点でフォロワー数は850名を超え、投稿へのリアクション数は増えてきている。ウェブサイトの活用に関しては、現在、大学のウェブサイトのリニューアルが計画されており、それに伴い薬学科のコンテンツを充実させる予定であるが、今年度の更新は軽微なものに留まっている。総じて、達成状況は55%とする。</p>
	<b>地域活性化</b> <b>(地域連携委員会)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校との教育連携の推進 高校の探究学習への協力として、都城西高校の探究活動「ヒーローアイズ」開発プロジェクトに対して教員が研究指導等の支援を行った。本活動では高校生が地域資源を活用した商品開発に取り組み、優良賞を受賞するなど一定の成果を挙げた。また、本学科教員2名が探究活動の評議員および審査員として参画し、地域高校の探究教育支援に貢献した。(達成率100%)</li> <li>・地域医療を担う薬剤師の生涯学習支援 宮崎県薬剤師会との連携により卒後教育講座を実施し、延べ170名の薬剤師が参加した。本講座では本学教員が講師として登壇し、地域医療や薬学研究に関する知見を共有することで、地域薬剤師の継続教育および大学との連携強化に寄与した。(達成率100%)</li> <li>・地域の薬剤師確保対策に向けた連携活動 宮崎県薬剤師会、宮崎県病院薬剤師会、宮崎県庁と連携して設立した「宮崎県薬剤師確保対策協議会」において、地域における薬剤師不足の解消に向けた検討を継続した。学生の地域就職促進に向けた奨学金制度や地域医療体験の充実などについて関係機関と協議を進めた。一方でインターシップ参加については個別に学生が参加するにとどまり、システムづくりは現状継続中である。(達成率70%)</li> <li>・地域資源を活用した教育研究活動の推進 延岡市との薬用作物産地化事業に関しては、薬用植物の栽培および地域資源活用に関する教育研究活動を継続し、地域農業および地域産業に貢献した。また、2025年度から福岡県との薬用植物の産地化に関する連携も開始した。これらの活動を通じて、地域資源を活用した教育研究の基盤形成を進めた。(達成率80%)</li> </ul>
2026年度への展望 (来年度の計画案)	<b>教育力(使命・目的等を含む)</b>	<p>1 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的な目標を明確にしなが薬学科のDP1~5を達成していくため、学修成果(教育目標/アウトカム)としての①~⑩の目標とDPとの対応、新旧の両カリキュラム・ツリーにおけるアウトカムの対応については、引き続き、適時見直ししていく。またAPに対応した医療人としての資質を評価できる入試形態についても、引き続き、適時見直ししていく。</li> <li>・学生自らが学びの省察を行えるよう、引き続き、DP1~5の達成度(各科目の学生個人の評点に基づくスコア)の目標値を活用して学生ごとにDP1~5の達成度を評価して指導していく。</li> <li>・思考力、判断力、表現力、学びに向かう力、人間性などのレベル評価を目的として、引き続き、全学的に導入されたGPS-Academicを1年次の学生に対して実施し、個々の学生にその結果をフィードバックして指導していく。</li> <li>・各科目で実施しているSGD(Small Group Discussion)、ALなど到達目標の領域(技能・態度)とレベルに対応した学習成果の測定方法やその基準と評価方法(点数化)をシラバスに明記し、広く学生に周知し、ルーブリックを用いた評価を学科教員で引き続き実施していく。</li> </ul> <p>2 学修支援体制の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・より手厚い学修支援体制とすべく、助教を含めた専任教員の増員/学科専任の専門職員の配置/老朽化が進んだ一部の共通研究機器の更新について、引き続き、学科長より大学に要望していく。</li> <li>・教育内容・方法及び学習指導等の改善に資するべく、引き続き、学科独自のPDを年度内に複数回実施する。</li> <li>・宮崎大学医学部附属病院薬剤部で行われる医学部学生クリクラへの本学薬学科学生の参加について、引き続き実施していく。</li> </ul>

研究力	<p>薬学科における科研費の採択状況は、決して悪い状況ではないが、論文数を増やすことによって、まだまだ伸びしろがあるため、採択者数をさらに増やせるように努力する。特に若手教員に民間助成金への応募を促す。国際共同研究についても積極的な活動を促す。県北サイエンスフォーラムとリトリートについて、開催時期など工夫して、発信力を増強する。高額機器については、学科費との兼ね合いを考慮して、必要なものを購入していく。共通機器の管理については、現在も研究環境整備委員会によって適切に管理されているため、引き続き継続していく。</p>
学生支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生生活に関わる設備・環境に関するアンケート調査を引き続き実施し、意見や要望を吸い上げる。より多くの意見・要望が把握できるよう調査時期を考慮して実施する。</li> <li>・ 学生の健康状況に関しては、今後も健康管理センターより当該センター利用状況等を提供してもらい、注視すべき学生の情報を学科教員に周知し情報共有を図るとともに、学生指導に役立たせる。</li> <li>・ 合理的配慮の提供として学内に設置されたクールダウン、カームダウンスペースの学生への周知を学生課と協力して行い、必要に応じて学科、チューター教員、学生課、健康管理センター等と連携して当該学生の対応を行う。</li> <li>・ 学生からの相談事案に関しては、今後も薬学科ハラスメント委員間で情報を共有し、学生課および健康管理センターと協働して学生相談に応じる。また、薬学科ハラスメント・メールを活用して、学生が気軽に相談しやすい体制を整備する。</li> <li>・ 来年度は、これまで実施してきたキャリア支援事業を継続するとともに、低学年から段階的にキャリア形成を支援する体制のさらなる充実を図る。具体的には、低学年を対象としたインターンシップの機会拡充を図り、宮崎県病院薬剤師会、宮崎県薬剤師会や延岡市西臼杵郡薬剤師会の協力のもと、より多くの学生がインターンシップに参加できるようコーディネートを行う。これら取り組みにより、学生の職業観の形成を支援するとともに、将来の進路選択に資するキャリア支援体制の一層の充実を目指す。</li> </ul>
募集力(ブランド力)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 アセスメント委員会において検証方法を立案し、遂行する。</li> <li>2 2月の前期一般入試と共通テストでの合格者の歩留まり数を増加させるよう説明会の方法を工夫する。</li> <li>3 リメディアル委員会での解析を検証する。</li> <li>4 引き続き、学生ボランティアの積極的な参加を促し、学生ボランティア、来場者共に満足を得られるオープンキャンパスを目指す。十分な取り組みが行えていない部活動、学友会組織、在学生向けイベントに関し、まずは、どのような対応が必要とされているのか、有効であるのかを学生・教員間で議論する場を設ける。</li> <li>5 2026年度は学生アンケートをさらに充実させ、業界研究会のテーマを多様化する。事業所との連携強化により、学生に最新の業界情報を提供し、5年生のみならず3年生も対象に実施する予定である。また、参加後のフォローアップを行い、学生の満足度を向上させ、キャリア形成に役立つよう取り組む。</li> <li>6 引き続き、依頼があった際には可能な限り対応を行う。対応教員の負担軽減のため、ガイダンス資料ファイルの共有化を更に推進し、内容の質の向上にも努める。</li> <li>7 県北サイエンスフォーラムの認知度アップのため、各種薬剤師団体や地域企業等への広報を行う。今後、高校の課題研究への対応増加が予想されるため、研究能力に優れた教員へ予め参加協力を依頼する。</li> <li>8 本学科へ興味をもってもらう機会を増やすべく、SNS活用のさらなる拡充を行う。各教員の行っている講義・実習・研究等の情報を積極的に公開するための仕組みづくり(当番制等)を行う。また、学術的でない気軽な内容でも投稿可能であることを教員・学生に周知し、投稿数を増やす。大学ウェブサイトのリニューアルに合わせて新規コンテンツを作成し、既存サイトから質・量ともに拡充する。</li> </ol>
グローバル化	<ol style="list-style-type: none"> <li>1, 2 留学生は入試広報と協力して積極的に受け入れる。できれば、韓国からの留学生をさらに増やせるよう広報活動を工夫する。フィンドリー大学との交流で、5月に薬学部生と教員を引き受ける。また、フィンドリー大学への学生派遣を目指した英語教育を充実させると同時にフィンドリー大学への学生派遣を早期に開始する。</li> </ol>
地域活性化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高校との教育連携の拡充 高校探究学習への協力および出前講義については、地域高校との連携体制を維持し、依頼があった場合には積極的に対応する体制を継続する。また、高校教員との情報共有を進めることで、探究活動や教育連携の機会の拡充を図る。</li> <li>・ 地域薬剤師の継続教育支援の強化 宮崎県薬剤師会および薬剤師研修センターと連携し、薬剤師の生涯学習支援を継続する。特に薬用植物園を活用した研修等を実施し、漢方・生薬分野を含む地域薬剤師の専門性向上に貢献する。</li> <li>・ 地域薬剤師確保対策の具体化 宮崎県薬剤師確保対策協議会の活動を継続し、県内医療機関および行政と連携しながら奨学金制度やインターンシップによる地域医療体験等の施策の具体化を検討する。特にインターンシップにおいては低学年時の希望者が行えるシステムを構築する。これにより、学生の地域医療への理解を深めるとともに、県内就職率向上に資する取組を推進する。</li> <li>・ 地域資源を活用した教育研究の発展 延岡市や福岡県との薬用作物事業など地域資源を活用した教育研究活動を継続し、地域農業や地域産品との連携を深化させる。これにより、地域活性化に資する教育研究モデルの確立を目指す。</li> </ul>

九州医療科学大学 中期目標・中期計画 【第3期】

九州医療科学大学（動物生命薬科学科）

<p><b>ビジョン (教育目標)</b></p>	<p>医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。</p>	
<p><b>区分</b></p>	<p><b>全学共通目標</b></p>	<p><b>学科別計画・対策</b></p>
<p><b>教育力(使命・目的等を含む)</b></p>	<p><b>1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</b></p> <p>学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。</p> <p><b>2) 学修支援体制の強化</b></p> <p>学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。</p> <p><b>3) キャリア支援並びに就職支援の強化</b></p> <p>建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。</p> <p><b>4) キャンパス環境の整備</b></p> <p>本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。</p>	<p><b>1</b> 3つのポリシーの明確化による教育目標の明確化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>前後期毎のオリエンテーションにて、学科独自に作成した学修マニュアルを用いて、3つのポリシーを明確に示す。</li> <li>学修支援システム(ユニバ)の積極的な活用。</li> </ul> <p><b>2</b> 基礎学力を向上させ資格試験の合格率を向上させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>愛玩動物看護師、実験動物技術者の受験資格に必要な科目、成績などを学修マニュアルに明記、各資格試験受験担当者からの受験指導を実施する。(学芸員資格は必要な科目修得で取得できる)</li> <li>生物学について、入学前教育(課題学習:問題集)を実施する。</li> <li>リメディアル教育を生物I、化学I、数学Iで実施する。</li> <li>学部横断的な基礎教育科目の履修を学生に推奨する。</li> </ul> <p><b>3</b> 学生の学修目的の把握・明確化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1年次にインターンシップ(動物病院、宮崎大学附属牧場等)</li> </ul> <p><b>4</b> 教育において注意や配慮を要する学生情報の共有化を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学科会議等で情報の共有化、分析、支援対策・体制、進捗方法等を確認することで教育の質の向上に努める。</li> </ul> <p><b>5</b> 大学及び学部FDに積極的に参加、教員の資質向上に努める。</p> <p><b>1</b> チューター制度・学修支援システム(ユニバ)の積極的活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教員間で学生情報の共有化を随時、あるいは定期的(学科会議)に図り、円滑な学生対応により、退学者等を予防する。</li> <li>必要に応じて、健康管理センター並びに学生課等と連携を図り、円滑な学生 対応を実施する。</li> </ul> <p><b>2</b> 基礎学力の確認・向上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>入学直後に、「生物学」の試験を全員に実施、基礎学力を確認すると共に、成績は教員が共有、学生の教育指導に活用する。</li> <li>1年次においては、「すらら」を利用することで基礎国語力の向上に取りくむ。</li> </ul> <p><b>3</b> 卒業研究のレベルアップ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>3年次から卒業研究の教員(チューターを兼ねる)を固定し、2年間の継続した教育研究指導を実施する。</li> </ul> <p><b>4</b> 学科独自の学修マニュアル・飼育マニュアルの作成により、学習効果の向上を図る。また、学科独自の学科基準業を定め、愛玩動物看護師、実験動物技術員などの職域にふさわしい業の知識を修得する。</p> <p><b>1</b> 就職率100%を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1年次において、①キャリア教育(必修)で専任教員並びに外部講師のキャリア並びに②動物病院、宮崎大学農学部附属牧場、リバーパル五ヶ瀬川におけるインターンシップ(選択科目:必修扱い)を通して、将来、愛玩動物看護師やその他の職域に必要な知識・技術を知ること、学生個々の就職先における学びの必要性について早期に動機づけを行う。</li> <li>動物病院・企業—教員間のネットワークを活用、キャリアサポート委員並びにキャリアサポートセンターと情報共有し、学生が希望する職種の情報提供を円滑に行う。</li> <li>学科—キャリアサポートセンターと積極的に連携、動物病院・企業等の情報の収集、並びに学生への円滑な情報提供あるいは学内就職説明会を実施する。</li> </ul> <p><b>1</b> 高度な獣医療に関わる愛玩動物看護師(国家資格)の育成に相応しい教育設備の充実を図る。そのために、教育・研究機器の新規導入あるいは更新の優先順位を立案・計画する。</p>

<p><b>研究力</b></p>	<p>1) <b>大学の強みや特色を活かした研究力の強化</b></p> <p>地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。</p>	<p>1 研究活動の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・科学研究費助成事業など競争的外部資金への応募を推奨する。</li> <li>・学内・学外との研究ネットワークを広げ、共同研究を推奨する。</li> <li>・学術論文・学会発表を推奨する。</li> <li>・学会・研究会等への参加を推奨する。</li> <li>・学位（博士）取得を推奨する。</li> </ul>
<p><b>学生支援</b></p>	<p>1) <b>学生生活の支援を中心としたサービス向上</b></p> <p>学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。</p>	<p>1 チューター制度を活用、適宜面談を実施することで学生の身体的並びに精神的健康状態を把握するとともに、学生の要望をも把握する。その情報は学科会議等で教員間で共有、対策を検討、実施することで学生サービスの向上を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・健康管理センターを中心とした教職協働による支援体制の強化</li> <li>・学生課とも協働し、奨学金情報を収集、学生に情報提供する。</li> <li>・講義・実習に汎用する学生会館における学生専用の休憩室（飲食可能な）の設置について関係部署と協議、学生サービス並びに利便性を向上を模索する。</li> </ul>
<p><b>募集力(ブランド力)</b></p>	<p>1) <b>ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化</b></p> <p>ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。</p>	<p>1 九州で唯一の私立大学として新たな国家資格の愛玩動物看護師受験資格取得が可能であることを発信する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学ホームページ（学科）を活用、学科の特色を発信する。</li> </ul> <p>2 大学（学科）と動物病院との連携を強化する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・愛玩動物看護師病院実習における病院提携の登録の推進を行い、登録証を発行することで、本学のブランド形成と募集力の一助とする。</li> </ul> <p>3 オープンキャンパスでは、本学科で取得できる3つの資格（愛玩動物看護師、実験動物技術者、学芸員）とそれぞれの職域における活躍を掲示、広報する。</p>
<p><b>グローバル化</b></p>	<p>1) <b>国際競争力を意識したグローバル化の推進</b></p> <p>国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。</p>	<p>1 ラーニングサポートセンター（英語村）において、留学を希望する学生の語学力の向上のためのネイティブ講師によるレッスンの受講を推進する（英語村を積極活用）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2年次の英語科目（選択）では留学を目的としたTOEFL対策を含む学生の英語力の向上を図る授業を推進する。</li> </ul> <p>2 海外留学生を受け入れるための仕組みを模索する。</p> <p>3 学術交流協定校と教員間（全学科を対象とした）の国際交流を図り、共同研究のグローバル化を模索する。</p>
<p><b>地域活性化</b></p>	<p>1) <b>地域活性化の為に拠点創生</b></p> <p>地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。</p>	<p>1 学科教員の地域連携力の資質向上を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域連携プロジェクトの調査・実施を推進する。</li> <li>・市民大学講座などで本学科の教育・研究の成果を発信する。</li> </ul> <p>2 持続可能な目標に位置付けられる活動を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・SDGs 推進に位置付けられる活動を目指す。</li> </ul>

<p>2025年度の総評 (今年度の取組)</p>	<p>教育力(使命・目的等を含む)</p>	<p>1. 3つのポリシーの明確化による教育目標の明確化 学科独自に作成した学修マニュアル(学科基準を含む)、動物飼育マニュアルを用いて、前・後期毎のオリエンテーションならびに講義(動物実習基礎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳなど)において説明した。特に1年生についてはキャリア教育においても学修マニュアルにて説明を重ね、理解を深めた。</p> <p>2. 生物学の基礎学力を向上させるため入学前教育(問題集使用)を実施した。また、入学直後には、生物学の基礎学力を把握するため基礎学力試験を実施した。</p> <p>3. 国語力強化のため、すらら(e-ラーニング)を活用した。80%以上到達学生は21%であり、学習参加への工夫を必要とする。</p> <p>4. 資格試験の合格率の向上を目指した。愛玩動物看護師試験対策では「動物臨床演習」科目(4年生)において、過去問試験実施、解説などの演習を教員(4名)(学科内の3名の専任教員は国家試験作問委員のために国家試験対策授業ができない)がオムニバス形式で実施(通期開講)。また、昨年度から全国模擬試験(3回実施)を導入し、国試対策としている。実験動物技術者認定試験では、「実験動物演習」において、筆記試験並びに実技試験対策を行った。また、実技試験対策としてSA制度(実験動物1級技術者合格の学生2名)を活用した学生指導も行った。</p> <p>5. 1年次に学外インターンシップを実施した。①NP0法人五ヶ瀬川流域ネットワーク:リバーパル五ヶ瀬川におけるイベントのボランティア活動に6回参加。②動物病院での体験学習。ほぼ全員が2日間参加。</p> <p>6. ①愛玩動物看護師国家試験合格率 100%(23/23)(全国新卒88.0%)。合格率100%は全国の大学で、単独1位。②実験動物1級技術者認定試験 1次試験(学科)合格率100%(8/8)、2次試験(実技)合格率100%(9/9)。2級合格者1名(2/2)。実験動物1級技術者認定試験受験可能な特例大学15校の受験者の中で、試験成績上位1~3位に与えられる優秀者表彰をすべて、本学学生が受賞した。③就職率100%(就職希望者:24/24)。</p> <p>7. 高度な獣医療に関わる愛玩動物看護師の育成にふさわしい教育設備の充実(例:超音波診断装置の更新・導入)は果たせなかった。 【評価スコア:5】</p>
	<p>研究力</p>	<p>2025年度科研費で採択1件、継続3件、2026年度科研費への応募3件。投稿論文は国際4報(共著・査読有)掲載、国内2報(共著・査読有)掲載。書籍1件(共著)(1名)。学会報告は国際0報、国内4報。博士論文1名・作成中(専任教員7名/8名博士取得済み)。 【評価スコア:4】</p>
	<p>学生支援</p>	<p>1. ハラスメント教育(学生)の説明の機会を設けた(オリエンテーション、キャリア教育などにおいて)。</p> <p>2. 長期欠席者に対しては、チューター、健康管理センター、必要に応じて保護者と連携して対応した。また、その他関連部署と情報を共有した。休学者2名。退学者2名。</p> <p>3. 一般学生に対しても、チューター面談を積極的に行い、教員間で情報共有した。</p> <p>4. 就職情報については、キャリアサポートセンター、教員間とで情報を共有し、就職活動を協働でおこなった。 【評価スコア:3】</p>
	<p>募集力(ブランド力)</p>	<p>1. 愛玩動物看護師資格が国家資格であること、九州では本学並びに鹿児島大学共同獣医学部畜産学科が受験資格あることを広報した(九州内の私学では唯一)。本資格に「国立大が参入」したことは「国家資格」であるとの情報とともに、愛玩動物看護師の今後の地位や認知度の向上が期待できる広報活動の情報である。</p> <p>2. オープンキャンパスでは、本学科で取得できる3つの資格(愛玩動物看護師受験、実験動物技術者受験、学芸員)を積極的に展示、広報した。大きな特徴としては、1・2年生の全員がオープンキャンパスに参加(分散)、積極的に来学者に学科内容を説明した。</p> <p>3. 来学した中・高生あるいは訪問先の中・高校生に本学科の紹介並びに講義を行った。</p> <p>4. 動物病院との連携:「動物看護総合実習」受入れ承諾施設 本年度追加申請5施設。合計47施設。</p> <p>5. 入学者数は34名(充足率85% 34/40)(昨年度22名、55%)で、学科全学生数は103名(充足率64.4%、103/160)。 【評価スコア:3】</p>
	<p>グローバル化</p>	<p>1. UPLBとの教育交流協定に基づくUPLBへの編入留学制度は一昨年度中止となったが、本年度は学生個人として1名が編入留学した。これまでの留学の実績(本学出身の獣医師は13名)を踏まえて、学生の留学相談を実施した。英語力向上のため、2年次における英語授業(選択)ではTOEFL対策に特化した講義とした。</p> <p>2. 留学・進学希望者の語学力の向上のため、少人数ではあるが、ラーニングサポートセンター(英語村)を積極的に利用した。 【評価スコア:3】</p>
	<p>地域活性化</p>	<p>自治体と連携し災害伝承を活用した防減災プログラムを宮崎市宮崎小学校にて実施した。さらに複数の自治体・団体に対して研究活動成果の講演・研修を実施した。 【評価スコア:4】</p>

2025年度への展望 (来年度の計画案)	教育力(使命・目的等を含む)	来年度、1～7を継続する。 1. 3つのポリシーの明確化による教育目標の明確化 2. 生物学の基礎学力を向上させる(入学前教育)。 3. 国語力教科のための、すららを活用する。 4. 1年次での学外インターンシップを継続・実施する。 5. 資格試験の合格率を向上させる(試験対策演習授業、外部模擬試験の導入。SA制度活用など)。 6. 教育において注意や配慮を要する学生情報の共有化を行う。 7. 大学及び学部FDに積極的に参加、教員の資質向上に努める。
	研究力	科研費その他の外部研究費の獲得、並びに国内外の学術雑誌に論文を投稿する(査読有)。
	学生支援	1. ハラスメント教育(学生)の説明の機会を多く設ける(オリエンテーション、キャリア教育などにおいて)。 2. 学生の授業欠席等の情報に留意し、チューター、健康管理センター、教務課並びに学科教員間での情報を共有する。 3. 就職活動については、キャリアサポートセンターと協働で活動する。
	募集力(ブランド力)	1. 国家資格の愛玩動物看護師資格、実験動物技術者、学芸員の3資格について幅広く、広報活動を実施する。広報活動は、主にオープンキャンパスで行い、実施方法は在学生(主に1・2年生)参加型を継続する。 2. 来学した中・高校生並びに出張先の中・高校生に学科紹介、講義を実施、本学科の魅力を広報する。 3. 高校訪問先としては、農業高校も考慮する。
	グローバル化	1. フィリピン国立大学獣医学部を含む海外大学への個人留学を支援する。特に英語力向上のため、2年次の英語教育(選択)はTOEFL対策を含む英語力向上のための講義とする。 2. ラーニングサポートセンター(英語村)において、大学院進学、留学希望者の語学力の向上のため、受講を奨励する。
	地域活性化	1. 教員の研究成果に基づいた活動を展開する。 2. 継続性を意識した地域連携活動の推進を目指す。 3. 持続的な社会構築を目標とし、それに沿った活動を推進する。

## 九州医療科学大学（生命医科学科）

ビジョン (教育目標)	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	学科別計画・対策
<b>教育力(使命・目的等を含む)</b>	<b>1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</b> 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	1 生命医科学科における3つのポリシーを明確に示し、教育の目標・目的を明確にする。 2 学修者本位の教育課程編成の理念のもと、生命医科学部生命医科学科に掲げる3つのポリシー（DP・CP・AP）を明確に定め、学生へホームページ・ガイダンス・オリエンテーションなど、様々な方法を活用し周知する。 ・学修支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）を積極的に活用する。 ・基礎教養教育における学部横断型カリキュラムの全学協働による展開と受講を促進する。 ・初年次教育につながる入学前教育を実施する。 3 生命医科学科のポリシーに基づく入学選抜を実施するために以下の取り組みを行う。 ・アドミッションポリシーに沿った、入試科目の設定を行う。 ・高等学校の教育課程に応じた出題範囲の設定と見直しを行う。 4 生命医科学科卒業後の将来像を明確に示し、基礎教養教育を実践することで、グローバルな医療専門職としての人材を育成する。 5 学修成果の点検・評価においては、3つのポリシーを踏まえて、点検・評価を行いPDCAサイクルを円滑に確立し、より質の高い学修成果が身につくように教育の改善に取り組む。 6 大学全体のFD活動はもとより、生命医科学科のFDの実践を推奨し、個別の課題を横断的に共有することで、全体の課題解決に取り組む。 また、教育実践の点検評価として、授業アンケートの実施方法並びに内容を検証することで、教育内容・方法及び学習指導等の改善に取り組む。
	<b>2) 学修支援体制の強化</b> 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、適正な学修環境整備に努め、学生などステークホルダーの意見を反映できる体制を確保する。	1 生命医科学科教員を中心とし入学前・進級・国家試験・卒業に至る間の体制を適切に整備し運営する。 ・チューター制度を土台に、学修支援システム（UNIVERSAL PASSPORT）の積極活用により、学生個々の支援体制を強化する。 ・退学防止の観点から、授業の連続欠席者情報を教職員が共有し、早期対応を図ることで、未然に退学を防止する。 ・国家試験合格率アップのための対策を講じる。 2 学生アンケートの実施と内容改善に努め、得られた情報を適切に分析・検討し課題の明確化を行う。 ・授業アンケートの回答促進を行い、毎年度の回答率向上に取り組む。 ・授業アンケートを含めその内容精査に努め、効果的に学生の意見を反映できる体制確保に取り組む。 3 生命医科学科では卒業研究を必須化しており、同時に卒業を見据えてルーブリック評価を用いた国家試験合格相当かの評価を行う。
	<b>3) キャリア支援並びに就職支援の強化</b> 建学の理念に基づき、各学科の特性を活かした体系的な「キャリア支援体制」を構築すると共に、学生個々の具体的な進路や就職先をイメージした「就職支援」体制を構築する。	1 教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備を進めるため、キャリアサポートセンターと協力して以下の事を行う。 ・履歴書の書き方指導 ・面接の受け方の指導 2 次世代の医療人として「キャリアアップ」と「キャリアデザイン」を目指すために、本学オリジナルの「キャリア教育」を構築・展開する。
	<b>4) キャンパス環境の整備</b> 本学の基本計画に沿って、大学の長所を活かしたキャンパス機能強化や学生のニーズを踏まえた教育研究環境の改修・改善を効果的に行うことで、キャンパスの創造的再生に取り組む。	1 学修環境に関するアンケート調査や学生との意見交換の結果を分析・検討し、安全で快適なキャンパス生活実現に向けた、環境整備に取り組む。
<b>研究力</b>	<b>1) 大学の強みや特色を活かした研究力の強化</b> 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	1 学科教員の研究力アップを図る。 ・外部研究費の獲得や国際学術誌への論文投稿などを促進する。 ・学科教員間で研究力アップの仕組みを検討する。 ・研究力アップの仕組みを充実させ、研修等を周知する。 ・学会への参加等、研究活動に必要な機会を保障する。 ・学会発表、論文発表等、研究活動を積極的に推進する。 ・本学出版の査読制ジャーナル（JHWI）のさらなる充実化を目指す。 ・大学の知的財産の充実化を図るために、「ものづくり」を中心とした企業的人材育成と産学官連携事業の強化を推進する。 2 論文発表、学会発表等の研究成果を可視化・公表することで、地域における研究のノード機関としての役割を構築する。
<b>学生支援</b>	<b>1) 学生生活の支援を中心としたサービス向上</b> 学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。	1 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望を把握し、分析・検討することで学生生活に積極的なサポートを行う。 ・健康管理センターを中心とした教職協働による支援体制の強化 ・退学へつながる欠席の多い学生への教員からの連絡 ・学生の健康管理に関して外部機関と連携 ・課外活動支援の充実

<p><b>募集力(ブランド力)</b></p>	<p><b>1) ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化</b></p> <p>ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。</p>	<p>1 アドミッション・ポリシーに沿った入学受入れの実施と検証を行う。(再掲)</p> <p>2 入学定員に沿った適切な学生受入れの維持に取り組む。</p> <p>3 入試データの分析、高校との連携強化に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学後の追跡調査、入学後の学生の学力の伸長などの分析を行う。</li> </ul> <p>4 学生を活用して大学の魅力を発信する。</p> <p>5 地域の学びの拠点として、施設の開放や受け入れなど以下の内容を積極的にこなすとともに広く活動を周知する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地元学生・生徒のための体験行事、課外学習の受け入れを行う。</li> <li>・施設の貸し出し、本学を会場とした公開講座の実施やセミナーなどのイベントを開催する。</li> </ul> <p>6 教員一人ひとりの研究内容、成果についての情報発信を行う。</p> <p>また、高校生の課題研究に積極的にかかわり、高校との連携強化に取り組む。</p> <p>7 SNSを活用した、本学の魅力(学科の特色)や大学・学科の情報発信を行う。</p>
<p><b>グローバル化</b></p>	<p><b>1) 国際競争力を意識したグローバル化の推進</b></p> <p>国際競争力を意識した教育・研究に取り組む、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。</p>	<p>1 学内の国際化推進に努める事で、グローバル化を推進する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学科の学生に対して、ラーニングサポートセンター(英語村)の積極的な利用を促す。</li> </ul>
<p><b>地域活性化</b></p>	<p><b>1) 地域活性化の為に拠点創生</b></p> <p>地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。</p>	<p>1 知の拠点として、産官学の地域連携も含めた地域振興及び人材育成に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自治体、関係機関、団体、学校等との連携を推進する。</li> <li>・県内の大学間連携を推進する。</li> </ul>
<p><b>2025年度の総評(今年度の取組)</b></p>	<p><b>教育力(使命・目的等を含む)</b></p> <p><b>1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</b></p> <p>学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。</p>	<p>本学科の第3期中期目標・中期計画に沿って、検証・確認を行った。評価スコアは、定性的な評価として、5.達成している、4.かなり進んでいる、3.普通、2.やや足りない、1.ほとんど進んでいない、を採用した。</p> <p><b>1 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</b></p> <p>学科内で3つのポリシーの見直しを行い、特にアドミッション・ポリシーについては、学科の理解が得やすい文言に改めた。ポリシーの周知については、シラバス項目内へ反映することで、学修者への理解と浸透を図った。また、学修ポートフォリオとマイステップ機能を最大限活用し、ディプロマ・ポリシー達成率向上のための指導を行った。併せて、昨年度より学修者の「思考力・姿勢・態度・経歴」を可視化する多面的アセスメントとして導入したGPSアカデミックを継続して活用し、第三者の視点での客観的評価を面談等での指導に用いた。学修成果の可視化に関連して、学科のアセスメント・ポリシーを新たに策定し、画一的な評価の実践を図った。また、教育内容と方法の改善及び学修指導改善のための学部FD・SDを実施するとともに、教員間の相互授業参観への取り組みを促した。このことについて、運営状況や利用状況を踏まえて確認・評価した。(評価スコア4)</p> <p><b>2 学修支援体制の強化</b></p> <p>チューター制度を土台に、学修支援システムを積極的に活用したディプロマ・ポリシーの周知と指導を行った。また、毎月の外部模擬試験で各人の学習到達度を測り、成績不審者には1on1の指導による支援を行った。今年度は新たに、全学科生を対象としたオリジナルの学生生活アンケートを実施し、学生生活での問題点や学習支援に必要な項目を洗い出し、教員へ問題点を周知するとともに、各対応について学生へフィードバックした。このことについて、運営状況や利用状況を踏まえて確認・評価した。(評価スコア3)</p> <p><b>3 キャリア支援並びに就職支援の強化</b></p> <p>キャリアサポートセンターとの連携を強化し、就職内定に直結させる支援を行った。学生のキャリアアップを図るとともに、社会人の基礎力を学科オリジナルの「キャリア教育」を通して身に付けさせた。このことについて、運営状況や利用状況を踏まえて確認・評価した。(評価スコア3)</p> <p><b>4 教育環境の整備</b></p> <p>国家資格取得に必要な学習環境を整備した。また、保健センターとの連携を強化するとともに、キャンパス・ハラスメント防止対策に積極的に取り組んだ。このことについて、運営状況や利用状況を踏まえて確認・評価した。(評価スコア3)</p>
<p><b>2025年度の総評(今年度の取組)</b></p>	<p><b>研究力</b></p> <p><b>1) 大学の強みや特色を活かした研究力の強化</b></p> <p>地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。</p>	<p>本学科の第3期中期目標・中期計画に沿って、評価を行った。評価スコアは「5.大変良い、4.良い、3.普通、2.あまり良くない、1.良くない」を用いた。</p> <p><b>1 研究マネジメント体制の強化</b></p> <p>本学では、学科教員が教育や学科運営に多くの時間を割かれている現状があり、研究に十分な時間を確保することが難しいという課題がある。研究力の向上には、まず教員一人ひとりが研究に対する意識を高め、積極的に行動できる環境づくりが重要であると考えた。そのため、研究環境の整備および改善に向け、以下の観点から実施状況を検証した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>新規研究テーマの開拓</b>: 研究者個々の関心や専門性を踏まえ、新しい研究テーマの掘り起こしを進めている。(評価スコア: 2)</li> <li>・<b>教員間の協働体制の促進</b>: 研究グループの組織化、作業分担、研究カンファレンスの開催など、教員同士の協働による研究推進を図る。(評価スコア: 3)</li> <li>・<b>外部研究費獲得および学術成果の発信</b>: 外部資金の申請、学術誌への論文投稿など、積極的な研究活動を推進する。(評価スコア: 4)</li> <li>・<b>研修・学会参加の機会保障</b>: 研究活動に関する情報共有を行い、研修や学会参加の機会確保に努める。(評価スコア: 4)</li> <li>・<b>本学発行の査読制ジャーナル(JHWI)への投稿促進</b>: 学内ジャーナルの質的向上につながるよう、積極的な投稿を呼びかける。(評価スコア: 4)</li> <li>・<b>知的財産の拡充と産学官連携の強化</b>: 地域産業と連携し、「ものづくり」に関する研究を担う人材の育成を進め、大学としての知的財産の充実に図る。(評価スコア: 2)</li> </ul> <p><b>2 地域中核的研究拠点としての強み・特色を活かした研究推進</b></p> <p>本学が地域の研究ノード機関としての役割を果たすためには、研究成果を迅速に可視化・公表していくことが重要である。そこで、以下の観点から取り組み状況を検証した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>教員間協働による研究計画・成果発表の推進</b>: 教員同士が協力し、研究計画の検討、実施、成果の整理・発表に取り組む。(評価スコア: 3)</li> <li>・<b>地域教育機関との連携</b>: 地域の学校の大学訪問への対応、模擬講義の実施、研究活動への協力など、地域と大学のつながりを意識した取り組みを進める。(評価スコア: 4)</li> <li>・<b>地域との関わりを意識した研究テーマ設定</b>: 地域社会の課題やニーズを踏まえ、地域への還元を視野に入れた研究テーマの検討を行う。(評価スコア: 3)</li> </ul>

<p>2025年度の総評 (今年度の取組)</p>	<p>学生支援</p> <p>1) 学生生活の支援を中心としたサービス向上</p> <p>学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。</p>	<p>2025年度は以下の6点に絞り充実した支援を行った。本年度は評価スコアの低かった6.について重点的に実施する。</p> <p>尚、評価スコアは以下の通り5段階評価とした。 「5.大変良い、4.良い、3.普通、2.あまり良くない、1.良くない」</p> <p>1 体調不良や精神的不安定な学生には保健室や診療所の受診を積極的に勧める。 体調不良な学生については、保健室や医療施設への受診をすすめた。後期になり、インフルエンザ感染者や新型コロナ感染者等体調不良者が数名いたため早期に受診するよう勧めた。また精神的不安定な学生が見られ自宅で休養し学業は次年度に行う事とした。(評価スコア：4)</p> <p>2 新入生がなるべく早く学校に馴染むことができるように入学生、2年生そして教員とレクリエーションを実施する。 このことについては例年、1グループに1年生3～4名と2年生3～4名+教員のグループ単位として大学北側の延岡市植物園にピクニックに行き、交流を図った。(評価スコア：2)</p> <p>3 休暇時の勉強スペースについては、5月の連休や年末年始の期間中に学校で勉強できるよう、1号棟を開放した。 5月の連休の使用は、あまり多くないようであったが、年末年始時期は国家試験を前にした4年生を中心に多くの利用があった。(評価スコア：5)</p> <p>4 欠席の多い学生へ電話やメールで連絡し学校に来るように促す。 欠席の多い学生については2年次学生に電話やメールで連絡を行ったが、連絡が取れない状況であった。確実に連絡が取れる方法が必要と思われる(評価スコア：2)</p> <p>5 臨地実習に関わるワクチン接種を早めに行うよう推進する。 2年次に連載の時点から何度も伝え続けワクチン接種については全員完了した。しかしワクチンへの低反応者も少なからず存在するが、本年度は実習先に全員受け入れを認められた。(評価スコア：5)</p> <p>6 授業についていくことが困難な学生についてはクラスメートから離れる事が無い様、積極的に声かけを行う。 授業についていけない学生は、本年度は数名おり、可能な限り声かけを推進した。その結果、①根本的に勉強が苦であり、本学入学も自己の選択ではなく保護者に言われたため。②生命医科学科では血液や組織を扱うため恐怖心がある。③臨床検査技師の勉強は楽しいけど頭に入っていない、などの意見があった。昨年のように朝起床するのがつらくて学校に登校できないという例はなかったようだった。いずれもクラスにそれなりの友人がおり、孤立しているという事は無いようであった。(評価スコア：4)</p> <p>以上の事より本年度の達成度としては70%程度と思われる。</p>
<p>2025年度の総評 (今年度の取組)</p>	<p>募集力(ブランド力)</p> <p>1) ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化</p> <p>ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。</p>	<p>総評：今年度の入学予定者数は学科定員を大幅に割っており、募集力(ブランド力)が十分に強化できたとは言えない。</p> <p>1 大学の魅力発信(進捗度：40%)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ネットワーク・サービスの活用 <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学公式HPやチラシの配布等、入試広報に加え、学科独自の情報を発信すべく2024年度にX(旧Twitter)及びYoutubeアカウントを作成したが、担当する教員が限られており、更新頻度が停滞した。</li> <li>・動画(リール)投稿を主な目的とし、Instagramアカウントを作成した。臨床検査技師や細胞検査士の業務、学内の実習施設、教員・院生が大学を選んだ理由、主な就職先、延岡市の観光情報などを発信しているが、こちらも運営に係る教員が限られている。</li> </ul> </li> <li>●県内イベントへの参加 <ul style="list-style-type: none"> <li>・延岡市並びに宮崎県内での知名度をあげるべく、学科としてイベントに参加した。</li> <li>・ものづくりフェスタ；工業系の企業や団体が中心として開催される展示会であるが、テクノフェアと比較すると、高校生の参加者数は少なかった。</li> <li>・Out of Kidzania in のべおか 2026；本学科は3ブースを出展し、小学生を中心に臨床検査・細胞診断・科学捜査研究所の仕事体験を行った。子どもの興味・関心を引き出すことに成功したと思われる。</li> </ul> </li> <li>●発信すべき強み(ブランド) <ul style="list-style-type: none"> <li>・臨床検査技師を養成する機関は九州圏内のどの県にも存在する為、本学及び本学科の強み(ブランド)は九州唯一の細胞検査士養成課程を有することであるが、十分に発信できたかは疑問である。</li> <li>・また、学科に併設するがん細胞研究所も有効に活用し、研究活動を活性化させ、積極的に発信すべきと思われる。</li> <li>・今年度はCREST及びAIP加速課題により助成を受けた「三次元画像認識AIを用いた細胞診断支援装置の開発」と題し「日本語で細胞診断」日本産科学会、日本産科学会において成果を発表した。</li> </ul> </li> </ul> <p>2 地域の学びの拠点としての施設開放(進捗度：60%)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●出張授業、大学訪問 <ul style="list-style-type: none"> <li>・入試広報及び庶務課を通じて出張講義や大学訪問では臨床検査技師及び細胞検査士の紹介に加え、地元の中高生が基礎科学的な授業・実習も体験する機会となったと思われる。</li> </ul> </li> <li>●オープンキャンパス <ul style="list-style-type: none"> <li>・年度内に4回のオープンキャンパスに参加し、参加者に臨床検査技師・細胞検査士の紹介、大学設備の紹介ができた。</li> <li>・中高生以外の小さなお子様をお連れのご家族も顕微鏡等の展示物に興味を示していた点を考慮すると、参加対象とする年齢層の拡大も有効であると思われる。</li> <li>・参加後のアンケート回答率が高くなく、また内容も簡素である為、回答方法や質問内容については入試広報と協議する必要があると思われる。</li> </ul> </li> </ul> <p>3 教員の研究内容に関する情報発信(進捗度：30%)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●情報発信方法 <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学HPやネットワーク・サービスで情報を発信した。</li> <li>・但し、論文発表や学会発表を含む研究活動を行う教員が多いとは言えず、発信すべき内容が充分であったとは言えない。</li> <li>・研究活動の充実度は次年度以降の課題である。</li> </ul> </li> </ul> <p>4 学科教員の広報活動への参加(進捗度：50%)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●参加状況 <ul style="list-style-type: none"> <li>・入試広報及び庶務課を通じて開催されたイベント(出張授業や大学訪問)は多くの教員が積極的に参加した。</li> <li>・一方、SNSへの投稿作業に係る教員が限られており、次年度以降は業務の平等化も課題であると思われる。</li> <li>・大分、沖縄県内の高校へ学部長が巡回し、大学及び学科の紹介を行った。次年度は展開する教員数を増やして、より広いエリアをカバーする必要がある。</li> </ul> </li> </ul> <p>5 入試データの分析と次年度対応(進捗度：10%)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●追跡調査・アンケートの実施状況 <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料請求、出願、合格、入学など基本データがあると思われるが関係部署と学科での連携が充分とは言えず、学科としての解析・対応がほぼできなかった。</li> <li>・年度当初で学科代表者と入試広報合同で協議を行ったが、一度の協議で解決可能な内容ではない為、引き続きの開催が求められる。</li> </ul> </li> </ul>

<p>2025年度の総評 (今年度の取組)</p>	<p>グローバル化 1) 国際競争力を意識したグローバル化の推進 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。</p>	<p>以下の点において学生及び教員のグローバル化への意識拡大を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. タイの生徒や学生との実習において、当学科臨床工学コース学生に補助をもらい、国際言語としての英語の重要性を感じさせた。一朝一夕に話せるようにはならなくとも、きっかけはつかめたのではないかと考えられる。(評価スコア4)</li> <li>2. King Mongkut's University of Technologyの招待により、臨床工学コース3名の学生をタイに派遣した。これからの彼らの人生にいい影響を与えるものと期待している。(評価スコア5)</li> <li>3. 英語村の活用を推進を行った。あるゼミでは英語村のイベントに学生を参加させ、3人のネイティブスピーカーと片言ながら会話をを行った。言っていることが通じたので自信になったのではないかと考える。(評価スコア4)</li> <li>4. 選択科目である医療英語、英語コミュニケーションの履修の推進を行った。医療英語は臨床工学コースの2年生が全員選択したが、英語コミュニケーションに関しては1年生の履修はなかった。(評価スコア3)</li> <li>5. 専門科目での医療系の英語(機械や検査の英語表現など)の紹介を行った。(評価スコア3)</li> <li>6. 研究成果の英文雑誌への投稿の推進においては、当学科から数報の国際雑誌への採択があった。(評価スコア4)</li> </ol>
<p>2025年度の総評 (今年度の取組)</p>	<p>地域活性化 1) 地域活性化の為に拠点創生 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。</p>	<p>前年度に引き続き以下の項目を継続して実施することを掲げて地域活性化を図った。</p> <p><b>1 知の拠点として、産官学の地域連携も含めた地域振興及び人材育成に取り組む。</b> (自治体、関係機関、団体、学校等との連携を推進する。)</p> <p><b>2 県内の大学間連携を推進する。</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 地域振興・人材育成についての実施は以下のとおり。 A: 旭化成の創業者を顕彰する野口遵顕彰会が中学生の科学への興味を育てるために主催している「ジュニア科学スクール」を中学校2校(南中学校、西階中学校)の生徒に対して実施。 B: 宮崎県臨床細胞学会ならびに宮崎県健康づくり協会が関連するイベント等に運営・スタッフとして参加し人脈を広げることで、本学の知名度を向上させるとともに、県内の病理医・細胞検査士を細胞検査士養成課程へ招聘する為の体制を確立。 C: 宮崎大学と東九州メディカルバレー構想(宮崎県 企業振興課 先端技術産業推進室)主催の医農工連携プロジェクト「第3回ものづくりフェスタ2025」(10/18)に参加。 D: 延岡高校SSH(スーパーサイエンスハイスクール)事業の一環として、延岡高校の1年生を対象としたフィールドワークを実施。 E: 延岡高校「さくらサイエンスプログラム」に協力し、延岡高校・タイ国の学生に培養細胞を用いた研究指導を実施。 F: 延岡高校、日向学院高校、富島高校、日向高校、延岡星雲高校、聖心ウルスラ学園高校、延岡商業高校、北方学園中学、東海中学、等延岡市の地元にある学校や宮崎市内の住吉中学を対象として講義や体験学習を実施。 G: 臨地実習病院への訪問(交流)を通して、県内の実習先の関係者の方々とともにこれから求められる人材育成(臨床検査技師育成・養成)などについて意見交換を実施。 H: 延岡市工業振興ビジョン原案策定ワーキンググループへ委員として参加し産官学連携に関する検討を行った。 I: 地域活性化のため延岡市の「市民活動コーディネーター」の採用面接官を担当した。 J: Out of Kidzania in のべおか 2026に参加し、地域の次世代を担う人材を育成。 K: 延岡市地方創生有識者会議に参加。 L: 毎年本学で開催される日本社会医療学会に教員・学生の有志が参加し、全国に向けて県北地域からの学術研究の発信を行った。</li> <li>2. 県内の大学間連携の大学間連携では、タイからの研修生受け入れに関して宮崎大学医学部附属病院と全面的な協力体制を構築。</li> </ol> <p>以上の事から2025年度の評価は極めて高く、ほぼ100%の実施であると考えられる。</p>
<p>2026年度への展望 (来年度の計画案)</p>	<p>教育力(使命・目的等を含む) 1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。</p>	<p>2026年度の計画は、今年度の状況・評価を踏まえ、さらなる教育力の向上を目指す。</p> <p><b>1. 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を評価・検討・改善するために、以下の項目を引き続き推進する。</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3つのポリシーを明確化するとともに、さらに強力度に浸透させる。</li> <li>・学修ポートフォリオとマイステップ機能を最大限活用する。</li> <li>・ディプロマ・ポリシー達成率向上のための、学生一人ひとりに見合った指導を行う。</li> <li>・コンソーシアム宮崎への参画、県内の高等教育機関との連携事業を強力に推進する。</li> <li>・GPSアカデミックを最大限活用し、学生の成長を強力に促す。</li> <li>・教育内容と方法および学習指導改善のための学部FD・SDを積極的に実施する。</li> </ul> <p><b>2. 学修支援体制を評価・検討・改善するために、以下の項目を引き続き推進する。</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ディプロマ・ポリシーの周知徹底と達成率向上の1on1の指導を行う。</li> <li>・退学防止に努める。</li> <li>・ルーブリックの定量的評価を吟味するとともに、評価内容をアップデートする。</li> <li>・学科オリジナルの国家試験対策講座の改善を積極的に行う。</li> <li>・授業アンケートによる学生の意見を把握し、建設的なフィードバックを行う。</li> <li>・学生生活アンケートを実施し、問題点の早期把握と対応・改善を推進する。</li> </ul> <p><b>3. キャリア支援と就職支援を評価・検討・改善するために、以下の項目を引き続き推進する。</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアサポートセンターとの連携を強化し、就職内定の支援を積極的に行う。</li> <li>・学生のキャリアアップとキャリアデザインを図る。</li> <li>・社会人の基礎力である「考える力」と「チーム志向能力」を身に付けさせる。</li> </ul> <p><b>4. キャンパス環境の整備を評価・検討・改善するために、以下の項目を引き続き推進する。</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国家資格取得に必要な学習環境を整備する。</li> <li>・保健センターと連携し、学生の体調管理を把握するとともに、改善指導を行う。</li> <li>・キャンパス・ハラスメント防止対策を徹底する。</li> </ul>

<p><b>2026年度への展望 (来年度の計画案)</b></p>	<p><b>研究力</b>  <b>1) 大学の強みや特色を活かした研究力の強化</b>    地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。</p>	<p>今年度の状況を踏まえ、以下のような点を進展させたい。</p> <p><b>1 研究マネジメント体制の強化</b>  今後は、学科教員が「生命医科学」に含まれる幅広い研究領域（基礎から臨床まで）において、それぞれの強みや特色を生かした研究をさらに推進するとともに、研究環境の整備・改善に対する意識を一層高め、主体的に取り組める体制を構築していく。その方策として、次のような行動を継続して実践する。  ・新規研究テーマの開拓と教員間の協力体制の強化のため、研究作業の分担や研究カンファレンスの開催等により、組織的な研究推進を図る。  ・外部研究費の獲得および学術成果の積極的発信のため、外部資金申請の促進や学術誌への論文投稿を継続し、研究活動の活性化につなげる。  ・研修・学会等への参加支援のため、研究活動に関する情報共有を進めるとともに、教員が研修や学会に参加しやすい環境を整える。  ・本学査読制ジャーナル（JHWI）への投稿促進のため、学内ジャーナルの質向上の一助として、教員による積極的な投稿を奨励する。  ・産学官連携の強化のため、地域の「ものづくり」に関連する研修や集会への参加を通じて、連携を深め、新たな研究機会の創出につなげる。</p> <p><b>2 地域中核的研究拠点としての強み・特色を活かした研究推進</b>  地域社会に根ざした研究拠点としての機能をより強固なものとするため、研究成果を迅速に可視化し、論文や学会等で積極的に発信していく。あわせて、地域と密接に連携した研究活動を充実させるため、以下の取り組みを継続する。  ・教員間協働による研究計画の検討・実施および成果発表のため、教員同士が連携して研究を進め、成果を地域に発信する機会の拡充を図る。  ・地域教育機関との交流強化のため、地域の学校の大学訪問への対応や模擬講義の実施、研究活動支援など、地域に開かれた大学としての役割を継続する。  ・地域に根ざした研究テーマの検討のため、地域との関連性や、成果の地域還元を重視した研究テーマの設定を進める。</p>
<p><b>2026年度への展望 (来年度の計画案)</b></p>	<p><b>学生支援</b>  学生を中心とした視点の下、学生が安定した学生生活を送れるように、健康管理や危機管理、経済的支援や課外活動支援など各種の学生サービス向上に取り組む。</p>	<p>2026年度は2025年度に引き続き検討改善するため以下の6項目について実施する。特に評価の低かった4.について重点的に声掛けを行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 体調不良や精神的な不安定な学生には保健室や診療所の受診を積極的に勧め検討・改善する。</li> <li>2. 新入生がなるべく早く学校に馴染むことができるよう新入生、2年生そして教員とレクリエーションを実施する。</li> <li>3. 休暇時の勉強スペースを学校内で確保する。</li> <li>4. 欠席の多い学生へ電話やメールで連絡し学校に来るように促しその効果を検討する。</li> <li>5. 臨地実習に関わるワクチン接種を早めに行うよう推進する。</li> <li>6. 授業についていくことが困難な学生についてはクラスメートから離れる事が無い様、積極的に声掛けを行う。</li> </ol>
<p><b>2026年度への展望 (来年度の計画案)</b></p>	<p><b>募集力(ブランド力)</b>  <b>1) ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化</b>  ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。</p>	<p>総論；広報活動への各教員の参加に加え、関係部署との協働が不可欠であり、定期的な会議や情報交換を活発化させる。</p> <p><b>1 大学の魅力発信</b>  ●募集力(ブランド力)の強化  ・資格試験合格率向上、研究活動の活発化を目指し、発信する情報を増やす。  ・みやざきテクノフェアなどのイベントに学科として積極的に参加する。</p> <p>●ネットワーク・サービスの活用  ・これらのサービスにおいて閲覧数等を増加させるには高い頻度で興味を引く投稿が不可欠であるが、現状では担当する教員数が少なく、継続した投稿が困難である為、関わる教員の人数を増やす。  ・閲覧数等の統計的データを解析し、投稿内容・方法等を継続的に改善する。</p> <p>●デジタルサイネージの活用  ・デジタルサイネージを活用し学科及び教員の研究内容等を近隣高校等へ紹介する取り組みが開始される為、紹介内容を充実させる。</p> <p><b>2 地域の学びの拠点としての施設開放</b>  ●出張授業、大学訪問  ・引き続き、入試広報及び庶務課と協働し地元中高生へ臨床検査技師・細胞検査士をアピールする。</p> <p>●オープンキャンパス  ・見学者の興味を引く展示・体験コーナーを引き続き展開する。  ・参加申し込み方法やアンケート回収方法を入試広報と協議し、より扱いやすい方法・内容を模索する。  ・回収したアンケートは結果を共有するのみでなく、解析結果も関係部署と共有する。</p> <p><b>3 教員の研究内容に関する情報発信</b>  ●研究活動の活発化  ・ネットワーク・サービスやデジタルサイネージを用いて発信する情報を増やすべく、各教員が研究活動を活発化させる。  ・教員自身の研究でなくとも、卒業研究の内容等を有効に利用し発信する。</p> <p><b>4 学科教員の広報活動への参加</b>  ●教員の参加推進  ・広報活動へ教員が積極的に参加するべく、学科会議等で協議する。  ・近隣の高校訪問・予備校訪問を計画し、学科教員が積極的に大学及び学科をアピールする。</p> <p><b>5 入試データの分析と次年度対応</b>  ●追跡調査・アンケート  ・入試広報が有する入試に関するデータを共有し、学科と関係部署で解析・共有する。  ・解析した内容を基に次年度以降の広報計画を立案すべきであり、関係部署との協働は必須である。</p>

<p><b>2026年度への展望 (来年度の計画案)</b></p>	<p><b>グローバル化</b> 国際競争力を意識した教育・研究に取り組み、積極的な情報発信を行うことで、学生の交流に留まらない教育・研究のグローバル化を推進する。</p>	<p>引き続き、学生および教員のグローバル化への意識向上を図る。</p> <p>1. 教育面 本学は医療の国際化を担う大学として、キャンパスのグローバル化を推進するとともに、海外の提携教育機関（タイ等）との連携教育・研究を通じて、医療・生命科学分野の課題に取り組む人材を育成する。世界の多様な地域の人々と協働できる英語運用能力を備えたグローバル人材の育成を目指し、以下の取り組みを継続して推進する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学生による外国人対応能力の強化</li> <li>○ 英語村の積極的な活用</li> <li>○ 選択科目「医療英語」「英語コミュニケーション」の履修促進</li> <li>○ 基礎科目・専門科目における医療関連英語（機器・検査に関する英語表現等）の導入</li> </ul> <p>2. 研究面 生命科学および検査・治療に関する研究について、国際的視点に基づく研究活動を推進する。また、学内設備の共同利用・共同研究を通じて他分野との連携を強化し、研究成果を情報資源として蓄積しながら、国内外の研究機関・研究者との協働を進める。そのため、以下の取り組みを継続して推進する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 研究成果の国際誌への投稿促進</li> <li>○ 国内外での国際学会における発表の推進</li> </ul>
<p><b>2026年度への展望 (来年度の計画案)</b></p>	<p><b>地域活性化</b> 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。</p>	<p>2025年度の実績を踏まえ、引き続き以下の項目を継続・発展させる形で実施する。</p> <p>1. <b>知の拠点として、産官学の地域連携も含めた地域振興及び人材育成に取り組む。</b> ・自治体、関係機関、団体、学校(海外:タイ国キンモンコート大を含む)等との連携を推進する。</p> <p>2. <b>県内の大学間連携を推進する。</b></p>

九州医療科学大学 中期目標・中期計画 【第3期】

九州医療科学大学（大学院：社会福祉学研究所・保健医療学研究所・医療薬学研究所）

<p><b>ビジョン (教育目標)</b></p>	<p>医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。</p>	
<p><b>区分</b></p>	<p><b>全学共通目標</b></p>	<p><b>各研究科別計画・対策</b></p>
<p><b>教育力(使命・目的等を含む)</b></p>	<p>1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化</p> <p>学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。</p>	<p>◆3つのポリシーを明確に示し、それらを踏まえた学修成果の可視化を図り、大学院生が自らの学びを振り返り展望することができる体制を構築する。</p> <p>◆時代のニーズに対応したカリキュラムおよび指導体制の検討・検証を引き続き行う。</p>
<p><b>研究力</b></p>	<p>1) 大学の強みや特色を活かした研究力の強化</p> <p>地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。</p>	<p>◆各研究室や教員個々の研究力向上を図り、国内外の学術論文発表数を増やす対策を講じる。</p>
<p><b>募集力(ブランド力)</b></p>	<p>1) ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化</p> <p>ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。</p>	<p>◆定員充足を目指し、とくに社会人を対象にした広報活動に取り組む。</p> <p>◆各研究室や教員個々の研究・指導内容に関する情報発信を行う。</p>
<p><b>地域活性化</b></p>	<p>1) 地域活性化の為の拠点創生</p> <p>地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。</p>	<p>◆大学院と医療・福祉現場との連携強化を図っていく。</p>
<p><b>2025年度の総評 (今年度の取組)</b></p> <p>【定性評価スコア】 5. 達成している 4. かなり進んでいる 3. 普通 2. やや足りない 1. ほとんど進んでいない</p>	<p><b>教育力(使命・目的等を含む)</b></p> <p><b>研究力</b></p>	<p>・社会福祉学研究所では、学習のしおりに教育方針として明示した3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を図る機会として、夏・冬期スクーリング時に大学院生および研究科教員全員参加による研究テーマ・計画・中間・成果発表会を継続して実施した。また、指導体制の充実を図る取り組みでは、新たな指導教員は加わらなかったが、先に加えた教員を希望する受験生が継続して出ている。本年度は1名が博士の学位を取得した。【定性評価スコア4】</p> <p>・保健医療学研究所では、多様な専門性を有する学生の研究指導として、新たにピアサポートとピアレビューの仕組みを構築した。また、カリキュラム（博士前期課程）分野名の改定を行った。さらに、3つのポリシーを基盤にアセスメント・ポリシーを制定し、研究科レベル、専攻レベル、科目レベルにおける学修評価システムを構築した。その結果、大学院生の研究内容の質が大きく向上した。【定性評価スコア5】</p> <p>・医療薬学研究所では、大学院生の指導体制の確認を教授会や研究進捗報告会で従前通り実施した。講義は、前年度と同様のカリキュラムで従前通り実施した。3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を図る目的で、大学院生が自らの学びをユニバ上で記録して自ら振り返って展望できる体制を維持した。また大学院生がこのような学びを自ら展開しやすいよう、大学院生のスケジュールに即した指導体制を維持した。【定性評価スコア5】</p> <p>・社会福祉学研究所では、査読付き国内5報（前年5）、紀要等2報（前年1）、報告書7報（前年3）であった。【定性評価スコア3】</p> <p>・保健医療学研究所では、査読付き採択論文数は国内は1報、国際は10報であった。また、紀要等は1報、著書等は2報であった。前年度と比較して研究力の向上が認められた。【定性評価スコア3】</p> <p>・医療薬学研究所では、各大学院教員の研究の進展度を、薬学科と連携して引き続きリトリートにおいて可視化した。リトリート等を通じ、研究にもしっかりと取り組んでいくマインドが徐々に醸成されつつあるように見受けられた。また薬学科と連携して各講座の研究力向上を図る目的で、前年度と同様に講座費が措置された。今年度、国内の査読付き学術論文発表数が増加に転じた。前年度に発表がなかった講座からの発表があったことや本学の査読付きジャーナルが投稿先として活用された事例があったことも、今年度も望ましいことであった。研究が進んだ好ましい事例としては、今年度、優れた業績により3年で学位取得に至った大学院生（指導教員：徳永教授）が誕生するという初の快挙があった。また今年度は、優れた技術を開発した宮崎県内の団体や個人を表彰する「第25回野口賞 奨励賞」を本大学院の甲斐教授が受賞した。これらの出来事は、本大学院の研究ムードを高めるニュースとなった。査読付き採択論文数（2025年度中に集計された2024年度分）は、国際13報、国内10報、紀要等1報、総説・著書等14報（前年度は国際11報、国内2報、紀要等4報、総説・著書等14報）であった。【定性評価スコア3】</p>

	<p><b>募集力(ブランド力)</b></p>	<p>・社会福祉学研究科では、通信教育部のスクーリングを活用した広報活動を継続して実施した。通信教育部から博士（前期）課程への進学も促し、次年度入学の入試において、前年度の卒業生1名の受験があった。博士（前期）課程から博士（後期）課程への進学も促し、前年度の修了生1名の受験があった。博士（前期）課程では2名、博士（後期）課程では3名の受験があった。【定性評価スコア3】</p> <p>・保健医療学研究科では、博士課程前期の入学者数（生命医科学部からの進学を含む）が増加し、入学定員数を満たした。また、博士後期課程1名、博士前期課程2名が本年度学位を取得した。本年度は博士後期課程2名の受験があった。【定性評価スコア4】</p> <p>・医療薬学研究科では、社会人を対象とした広報活動を地域の薬剤師会や学会を通じて実施した。今年度の入学者は1名であった。また今年度入試では2名の学部学生による大学院受験があった。注目を集める大学院教員の講座での本格的な研究に参画した経験が進学意欲を湧かせたようであり、前年に続いて望ましいことであった。【定性評価スコア3】</p>
	<p><b>地域活性化</b></p>	<p>・社会福祉学研究科では、QOL研究機構社会福祉学研究所を活用した取り組みを継続して行い、社会福祉学部と連携して実施したイベント3件を活動報告書としてまとめ、公表した。【定性評価スコア4】</p> <p>・保健医療学研究科では、在籍する大学院生は勤務先で責任ある職位に就いており、本研究科と勤務先との連携体制が整っている。また、博士前期課程の2名（TA）は、地域活性化の一環として、検診と健康教育の啓発活動を積極的に行っている。宮崎大学医学部附属病院との共同研究は現在も進行中である。【定性評価スコア3】</p> <p>・医療薬学研究科では、現時点で在籍する大学院生は勤務先の医療現場において責任ある地位に就いており、大学院生を通じて大学院と医療現場は連携できる体制となっている。地域の活性化に資するアウトリーチとして、薬学科と連携して開催された「宮崎県北サイエンスフォーラム」において、5名の大学院教員が研究内容をPRした。地域の薬剤師も参加しやすいよう開催時期を3月から12月に変更したが、今年度は学外参加者は集まらなかった。研究に興味を持った本学学生の参加は十数名程度であった。学外からも参加してもらえるよう、今後も開催日程や方式を検討する。その他には「第25回野口賞 奨励賞」を受賞した甲斐教授の受賞記念と研究成果のアウトリーチを目的としてQOL研究機構主催の特別講演会を3月に開催した。地域連携に関する顕著な取り組みとしては、今年度、生薬学、薬用植物学、漢方医療学を専門として主に薬用作物の栽培について研究する本大学院の渥美准教授が栽培講師となり、延岡市と本学が共に進める延岡ひなたサブランの高品質化、産地化に関する連携事業での指導的立場での尽力があった。【定性評価スコア3】</p>
<p><b>2026年度への展望 (来年度の計画案)</b></p>	<p><b>教育力(使命・目的等を含む)</b></p>	<p>・社会福祉学研究科では、3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を図る取り組みを継続して実施する。また、指導体制の充実を図る取り組みについても継続する。</p> <p>・保健医療学研究科では、ピアサポートとピアレビューの体制を継続し、アセスメント・ポリシーを基盤に、大学院生の研究内容の質の向上に務める。また、修了時アンケート調査を行うとともに、その結果を分析し、教育の質を高めていく。さらに、レポート課題においては生成AIの活用を積極的に導入する。</p> <p>・医療薬学研究科では、次年度も指導体制を点検する。大学院生の満足度が高い教育力を維持していく。</p>
	<p><b>研究力</b></p>	<p>・社会福祉学研究科では、地域における中核的な研究拠点として、本学の研究経費助成・地域創生事業経費助成やQOL研究機構社会福祉学研究所の研究助成等も活用して、積極的な研究活動を促す。また、大学院生との共同研究も積極的に進めていく。</p> <p>・保健医療学研究科では、大学院担当教員の研究環境を整備する。また、博士後期課程の研究内容は、本学の査読付きジャーナル（JHWI）などに英文で投稿できるよう、研究コミュニティの形成と共同研究を積極的に推進し、国際的研究力を向上させる。</p> <p>・医療薬学研究科では、各大学院教員が研究論文発表数を増やせるよう、今年度の支援体制を継続する。研究分野により1報の論文完成までの平均的な所用期間は異なるものの、各大学院教員が年1報程度は論文発表できることを目指す。最近数年間論文発表ができていない大学院教員には、引き続き、投稿先の選択肢として本学の査読付きジャーナルも奨める。</p>
	<p><b>募集力(ブランド力)</b></p>	<p>・社会福祉学研究科では、通信教育部のスクーリングを活用した広報活動を継続する。また、博士（前期）課程から博士（後期）課程への進学も促す。</p> <p>・保健医療学研究科では、修了生が集う場（研究コミュニティ）を設け、研究意欲のある人材を確保すべく人材ネットワークの有効活用を積極的に試みる。3つのポリシー、特に、アドミッション・ポリシー（AP）の改善とアップデートを行い、募集力の向上を目指す。デジタルサイネージ（DS）を利用した各教員の研究成果を学内外にアピールするとともに、インサイドアウト法によるブランディングを推進する。</p> <p>・医療薬学研究科では、定員充足に向けて特に社会人が大学院に求めるニーズに応じていく必要がある。地域の病院/薬局に在籍の本学卒業生などを中心に学位取得のメリットをPRすることを継続するとともに、地域薬剤師等の医療人が集まる学術集会等の機会を活用してPRしていく。</p>

	<p><b>地域活性化</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会福祉学研究科では、社会福祉学部と連携して、QOL研究機構社会福祉学研究所を活用した地域活性化の取り組みを継続する。</li> <li>・保健医療学研究科では、地元の医療施設との共同研究により、さらなる地域の医療技術向上を図る。みやざきテクノフェア、ものづくり交流展などのイベントに参加し、本研究科の研究成果や知的財産を地域に還元する。さらに、産学連携の一環として、新たな製品や商品の開発を行い、地域の活性化に繋げていく。</li> <li>・医療薬学研究科では、今年度の活動を継続するとともに、地域における存在感を高められるよう、HP、宮崎県北サイエンスフォーラム、各種学術集会等での発信を続けていく。また、延岡市、宮崎大学、地域薬剤師会等との交流を通じて地域の医療・福祉現場のニーズをとらえ、地域貢献できるように努めていく。</li> </ul>
--	---------------------	--

# 令和6年(2024年)度 授業アンケート報告

自己点検・自己評価委員会  
教育開発副部門長 三宮 基裕

1

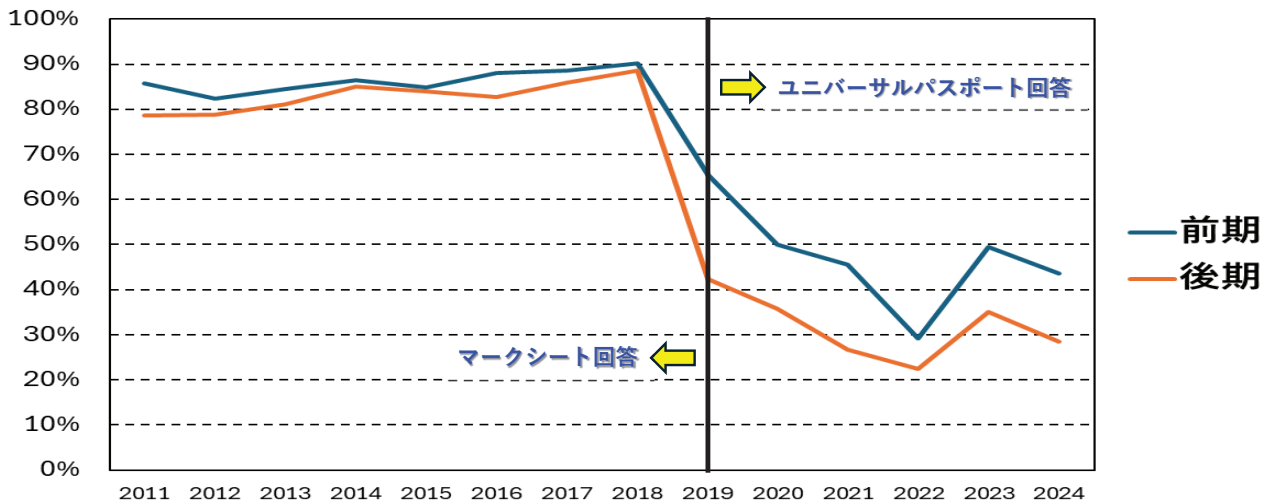
## 【質問項目】

【学生の授業に対する取組について】	【教員の授業に対する取組について】
Q1. この授業を何回欠席しましたか。	Q6. シラバスにそって授業を行いましたか。
Q2. 1回の授業に対して平均どのくらい予習を行いましたか。	Q7. 授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。
Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。	Q8. 授業の開始時刻をきちんと守っていましたか。
Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。	Q9. 学生の私語などに注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。
Q5. 居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。	Q10. 学生の授業への参加を促しましたか。
【授業に対するあなたの理解・達成度】	Q11. わかりやすい説明や指導をしていましたか。
Q13. 授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。	Q12. 講義資料は適切でしたか。
Q14. この授業で学習意欲が高まりましたか。	【総合評価】
	Q15. この授業は意義あるものでしたか。

2

# 【アンケートの回収状況】

回答率の推移（2011年度～2024年度）

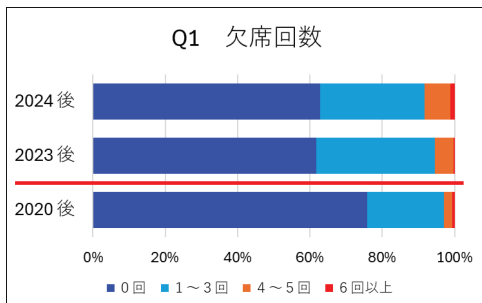
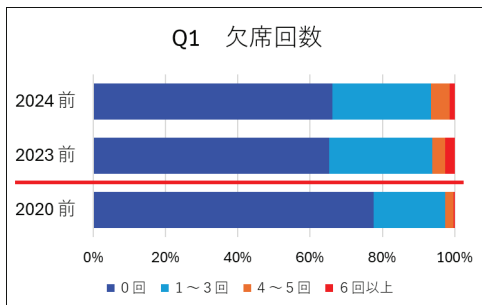


実施時期		科目数	教員数		教員数	回答数 (A)	受講生数 (B)	回答率A/B	
			専任	非常勤				R6(2024)	R5(2023)
前期	6月～9月	513	85	41	126	3,960	9,067	43.7	49.5
後期	12月～2月	524	86	42	128	2,512	8,793	28.6	35.0 <b>3</b>

## 【学生の授業に対する取り組み姿勢】

### Q1. あなたは、この授業を何回欠席しましたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① 0回	② 1回 ～3回	③ 4回 ～5回	④ 6回 以上	総計	Mann-Whitney U test,
前期	2020	79.9%	16.9%	1.7%	1.5%	100.0%	$P < .001$
	2024	70.6%	25.2%	3.2%	0.9%	100.0%	
後期	2020	76.3%	21.2%	1.7%	0.8%	100.0%	$P < .001$
	2024	66.8%	27.2%	4.8%	1.2%	100.0%	
総計		75.2%	21.3%	2.4%	1.1%	100.0%	

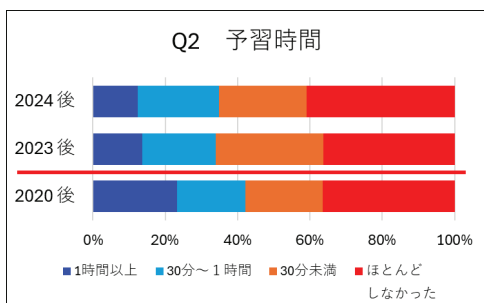
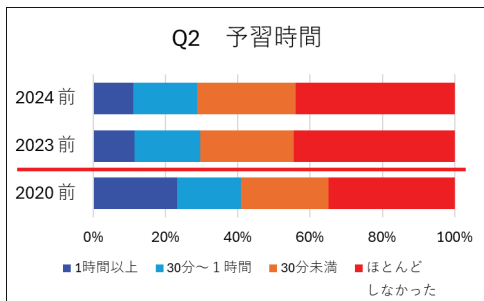
- 前後期とも2020年度との有意差あり
- 両年とも「欠席0回」「1～3回」が大多数を占める
- 2020年度に比べて「0回」の比率が低く、1回以上の比率が高い

➡ 出席状況は依然良好だが、2024年の方が欠席はわずかに増加している傾向がある

## 【学生の授業に対する取り組み姿勢】

### Q2. 1回の授業に対して平均どのくらい予習を行いましたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① 1時間以上	② 30分～1時間	③ 30分未満	④ ほとんどしなかった	総計	Mann-Whitney U test,
前期	2020	17.7%	21.7%	24.1%	36.5%	100.0%	P<.001
	2024	11.9%	18.4%	25.5%	44.2%	100.0%	
後期	2020	19.5%	22.6%	23.3%	34.7%	100.0%	P<.001
	2024	13.1%	23.7%	24.2%	38.9%	100.0%	
総計		16.4%	21.5%	24.2%	37.9%	100.0%	

- 前後期とも2020年度との有意差あり
- 両年とも「30分未満」「ほとんどしなかった」が中心
- 2020年度に比べて「1時間以上」の比率が低く、「ほとんどしなかった」の比率が高い

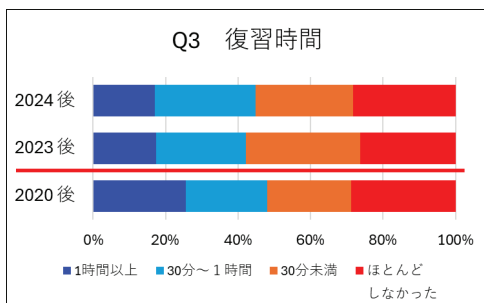
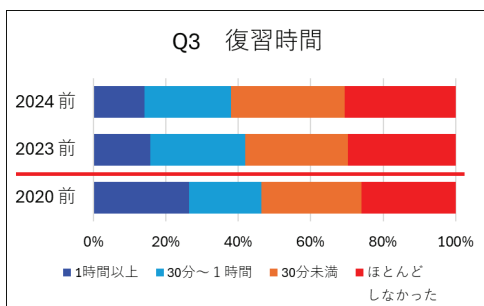
➡ 2024年の方が予習量は全体的に減少している

5

## 【学生の授業に対する取り組み姿勢】

### Q3. 1回の授業に対して平均どのくらい復習を行いましたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① 1時間以上	② 30分～1時間	③ 30分未満	④ ほとんどしなかった	総計	Mann-Whitney U test,
前期	2020	23.4%	25.3%	25.3%	25.9%	100.0%	P<.001
	2024	15.7%	25.2%	29.9%	29.2%	100.0%	
後期	2020	25.9%	26.2%	22.8%	25.1%	100.0%	P<.001
	2024	18.9%	28.3%	26.1%	26.7%	100.0%	
総計		21.9%	26.0%	25.7%	26.5%	100.0%	

- 前後期とも2020年度との有意差あり
- 両年とも、復習時間は短めで大きな差はない
- 2020年度に比べて「1時間以上」の比率が低く、とくに前期は「30分未満」「ほとんどしなかった」の比率が高い

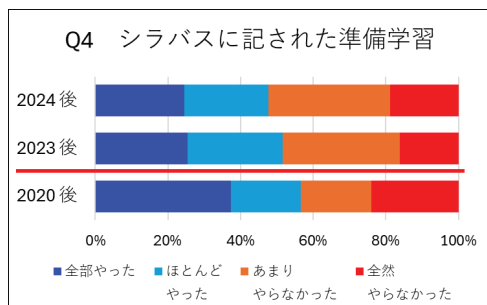
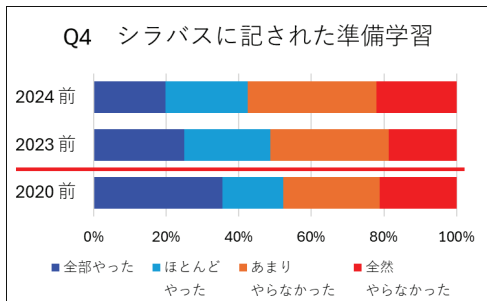
➡ 復習も2024年の方がやや消極的な傾向

6

## 【学生の授業に対する取り組み姿勢】

### Q4. シラバスに記載されている準備学習をどの程度行いましたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① 全部 やった	② ほと んどやっ た	③ あま りやらな かった	④ 全然 やらな かった	総計	Mann- Whitney U test,
前期	2020	28.1%	23.3%	26.6%	22.0%	100.0%	P<.001
	2024	21.2%	22.6%	35.5%	20.7%	100.0%	
後期	2020	34.1%	23.1%	24.5%	18.3%	100.0%	P<.001
	2024	24.6%	25.5%	32.9%	17.0%	100.0%	
総計		27.8%	23.4%	28.7%	20.0%	100.0%	

- 前後期とも2020年度との有意差あり
- 肯定・否定が比較的分散
- 2020年度に比べて「全部やった」の比率が低く、「あまりやらなかった」の比率が高い

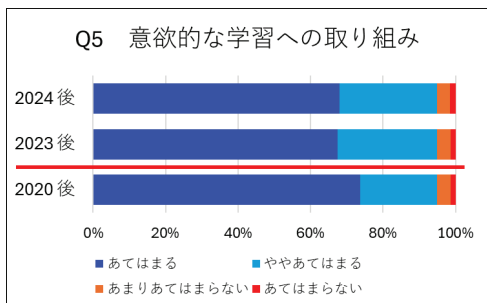
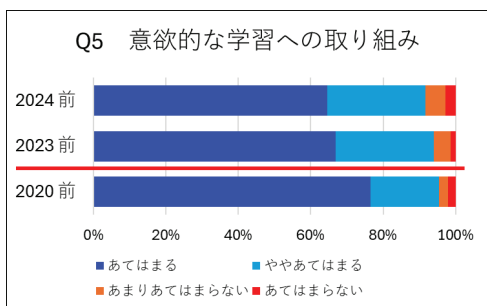
➡ シラバス活用度は2024年で低下

7

## 【学生の授業に対する取り組み姿勢】

### Q5. この授業で、居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① あて はまる	② やや あてはま る	③ あま りあては まらない	④ あて はまらな い	総計	Mann- Whitney U test,
前期	2020	69.6%	24.4%	4.2%	1.8%	100.0%	P=.002
	2024	66.9%	25.9%	5.3%	1.9%	100.0%	
後期	2020	73.8%	22.4%	2.6%	1.2%	100.0%	P<.001
	2024	69.5%	26.2%	3.1%	1.1%	100.0%	
総計		70.2%	24.4%	3.8%	1.6%	100.0%	

- 前後期とも2020年度との有意差あり
- 両年とも非常に高い肯定評価
- 2020年度に比べて「あてはまる」の比率が低く、「ややあてはまるが微増」し、とくに前期は「あまりあてはまらない」の比率がやや高い

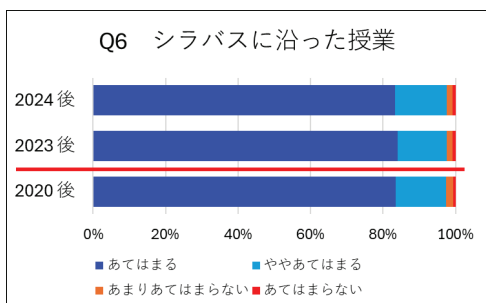
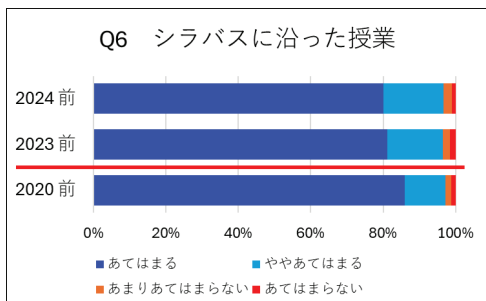
➡ 態度は良好だが、自己評価は2024年の方がやや控えめ

8

## 【教員の授業に対する取組について】

### Q6.担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① あてはまる	② ややあてはまる	③ あまりあてはまらない	④ あてはまらない	総計	Mann-Whitney U test,
前期	2020	82.0%	15.4%	1.8%	0.8%	100.0%	P=.098
	2024	80.7%	16.1%	2.3%	0.9%	100.0%	
後期	2020	82.9%	14.6%	1.8%	0.7%	100.0%	P=.955
	2024	82.8%	14.8%	1.8%	0.6%	100.0%	
総計		82.1%	15.2%	1.9%	0.8%	100.0%	

- 前後期とも有意差は認められない
- 2020・2024年ともに極めて高評価

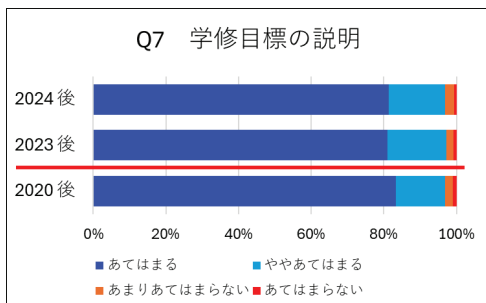
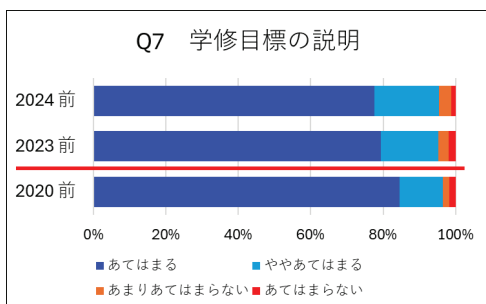
➡ 安定して高い評価

9

## 【教員の授業に対する取組について】

### Q7. 担当教員は、授業の目標や修得すべき事項を、毎回説明していましたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① あてはまる	② ややあてはまる	③ あまりあてはまらない	④ あてはまらない	総計	Mann-Whitney U test,
前期	2020	80.8%	15.4%	2.8%	1.0%	100.0%	P<.001
	2024	76.5%	18.5%	3.7%	1.3%	100.0%	
後期	2020	82.3%	14.6%	2.3%	0.8%	100.0%	P=.006
	2024	79.6%	17.2%	2.5%	0.7%	100.0%	
総計		80.2%	16.1%	2.8%	1.0%	100.0%	

- 前後期とも2020年度との有意差あり
- 2020年度に比べて「あてはまる」の比率が低く、「ややあてはまる」の比率が高い

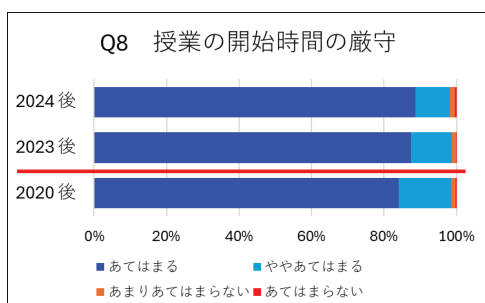
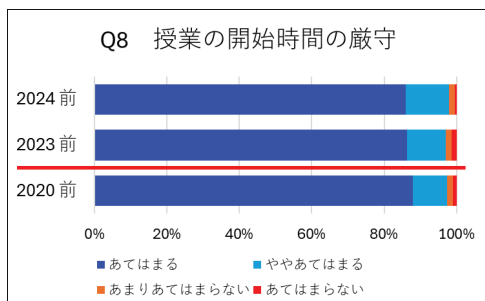
➡ 説明はされているが、印象の明確さは2020年の方が強い

10

## 【教員の授業に対する取組について】

### Q8. 担当教員は、授業の開始時刻をきちんと守っていましたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① あてはまる	② ややあてはまる	③ あまりあてはまらない	④ あてはまらない	総計	Mann-Whitney U test,
前期	2020	87.5%	10.4%	1.4%	0.6%	100.0%	P=.613
	2024	87.2%	10.7%	1.7%	0.4%	100.0%	
後期	2020	87.9%	10.9%	0.8%	0.3%	100.0%	P=.701
	2024	88.3%	9.9%	1.3%	0.5%	100.0%	
総計		87.7%	10.6%	1.3%	0.5%	100.0%	

- 前後期とも有意差は認められない
- 両年とも最も高評価

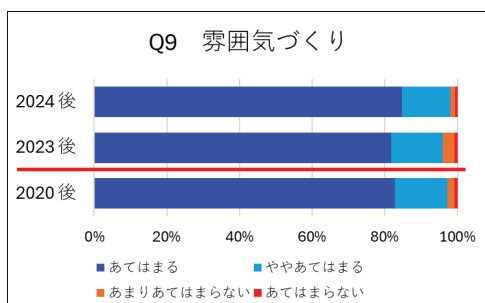
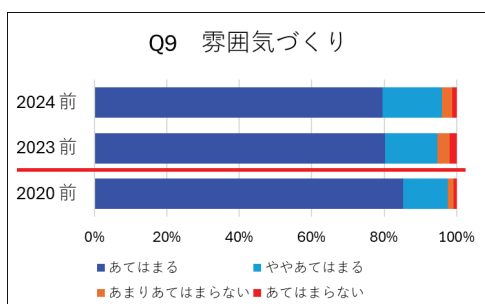
➡ 評価は不変で非常に高い

11

## 【教員の授業に対する取組について】

### Q9. 担当教員は、学生の私語などに注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① あてはまる	② ややあてはまる	③ あまりあてはまらない	④ あてはまらない	総計	Mann-Whitney U test,
前期	2020	79.9%	16.0%	3.2%	0.9%	100.0%	P=.004
	2024	77.6%	17.4%	3.4%	1.5%	100.0%	
後期	2020	82.2%	14.7%	2.6%	0.6%	100.0%	P=.923
	2024	82.2%	15.4%	1.8%	0.7%	100.0%	
総計		80.4%	15.9%	2.9%	0.9%	100.0%	

- 前期は2020年度との有意差あり
- 2020年度に比べて「あてはまる」の比率が低く、「あてはまらない」の比率が高い

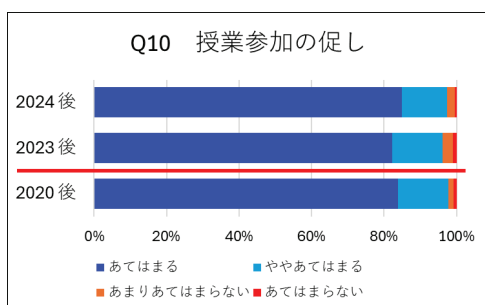
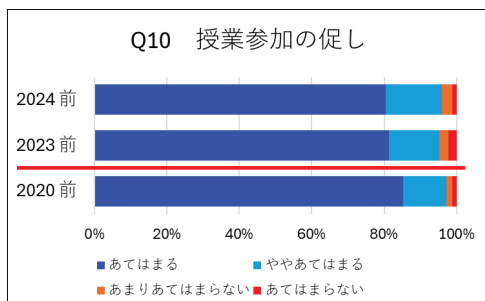
➡ 教員の統制力に対する評価がわずかに低下

12

## 【教員の授業に対する取組について】

### Q10. 担当教員は、学生の授業への参加を促しましたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① あてはまる	② ややあてはまる	③ あまりあてはまらない	④ あてはまらない	総計	Mann-Whitney U test,
前期	2020	81.0%	14.6%	3.2%	1.1%	100.0%	P=.032
	2024	79.2%	16.4%	3.2%	1.2%	100.0%	
後期	2020	83.1%	14.2%	2.2%	0.6%	100.0%	P=.403
	2024	82.3%	14.8%	2.2%	0.7%	100.0%	
総計		81.4%	14.9%	2.8%	0.9%	100.0%	

- 前期は2020年度との有意差あり
- 兩年とも「あてはまる」が中心
- 2020年度に比べて「あてはまる」の比率が低く、「ややあてはまる」の比率が高い

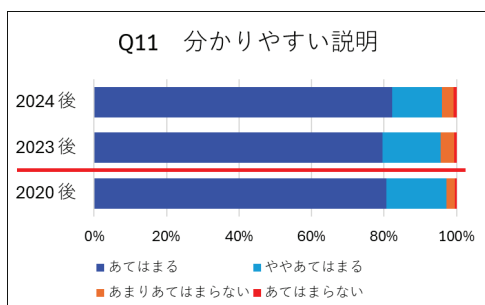
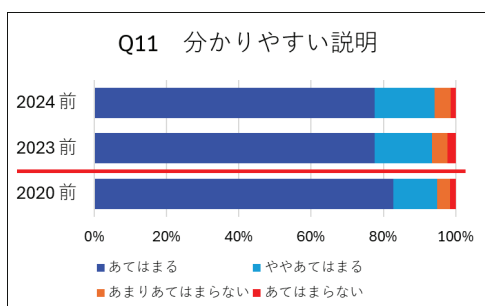
➡ 学生参加の実感は2024年でわずかに低下

13

## 【教員の授業に対する取組について】

### Q11. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① あてはまる	② ややあてはまる	③ あまりあてはまらない	④ あてはまらない	総計	Mann-Whitney U test,
前期	2020	77.0%	17.2%	4.7%	1.1%	100.0%	P=.057
	2024	75.6%	17.1%	5.4%	1.9%	100.0%	
後期	2020	77.7%	18.2%	3.4%	0.7%	100.0%	P=.357
	2024	78.9%	15.9%	4.5%	0.7%	100.0%	
総計		77.2%	17.3%	4.5%	1.1%	100.0%	

- 前後期とも有意差は認められない
- 2020・2024年ともに極めて高評価
- 有意差はないが「あてはまる」がやや低下

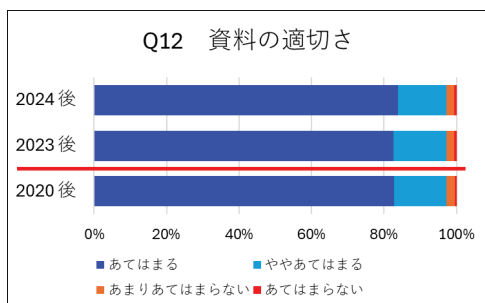
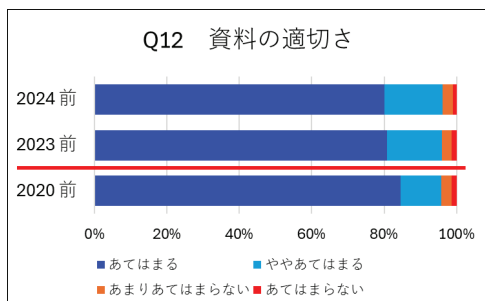
➡ 理解度は保たれているが、満足度はやや低下

14

## 【教員の授業に対する取組について】

### Q12. 担当教員の講義資料（教科書を含む）は適切でしたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① あてはまる	② ややあてはまる	③ あまりあてはまらない	④ あてはまらない	総計	Mann-Whitney U test,
前期	2020	81.4%	14.9%	3.1%	0.6%	100.0%	P<.001
	2024	78.6%	16.8%	3.6%	1.0%	100.0%	
後期	2020	82.1%	14.9%	2.5%	0.4%	100.0%	P=.060
	2024	80.5%	15.4%	3.4%	0.6%	100.0%	
総計		80.9%	15.4%	3.1%	0.6%	100.0%	

- 前期は2020年度との有意差あり
- 2020年度に比べて「あてはまる」の比率が低く、「ややあてはまる」の比率が高いが、「あてはまらない」の比率も高い

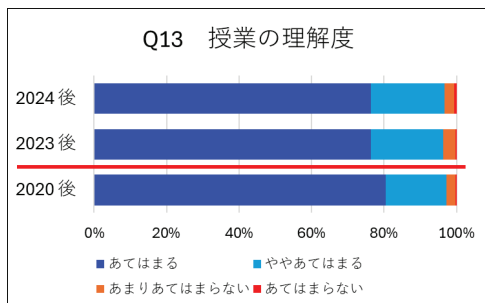
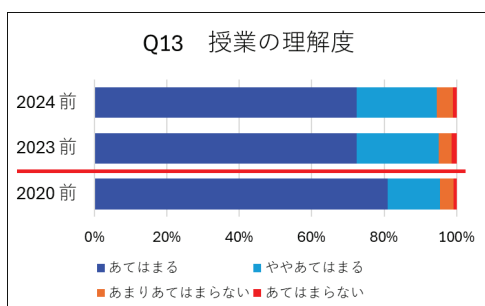
➡ 資料評価は高水準を維持しつつ、相対的満足度は微減

15

## 【授業に対するあなたの理解・達成度】

### Q13. この授業の目標や修得すべき事項を理解できましたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① あてはまる	② ややあてはまる	③ あまりあてはまらない	④ あてはまらない	総計	Mann-Whitney U test,
前期	2020	74.8%	19.9%	4.8%	0.5%	100.0%	P<.001
	2024	70.4%	23.9%	4.9%	0.8%	100.0%	
後期	2020	76.3%	20.3%	3.2%	0.3%	100.0%	P=.129
	2024	74.6%	22.1%	2.8%	0.6%	100.0%	
総計		74.3%	21.1%	4.1%	0.5%	100.0%	

- 前期は2020年度との有意差あり
- 2020年度に比べて「あてはまる」の比率が低く、「ややあてはまる」の比率が高い

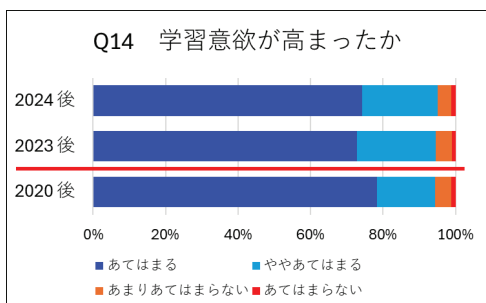
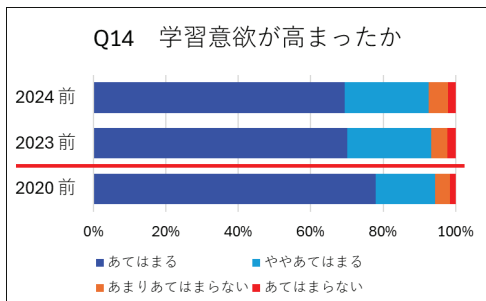
➡ 2024年は「ややあてはまる」が増え、確信度が低下

16

## 【授業に対するあなたの理解・達成度】

### Q14. この授業で学習意欲が高まりましたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① あてはまる	② ややあてはまる	③ あまりあてはまらない	④ あてはまらない	総計	Mann-Whitney U test,
前期	2020	72.2%	21.0%	5.6%	1.2%	100.0%	P<.001
	2024	67.5%	24.3%	6.3%	1.9%	100.0%	
後期	2020	75.1%	20.3%	3.8%	0.8%	100.0%	P<.001
	2024	71.6%	22.8%	4.3%	1.3%	100.0%	
総計		72.0%	21.7%	5.1%	1.3%	100.0%	

- 前後期とも2020年度との有意差あり
- 2020年度に比べて「あてはまる」の比率が低く、「ややあてはまる」の比率が高いが、「あてはまらない」の比率も高い

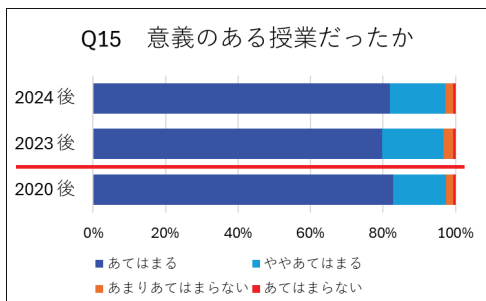
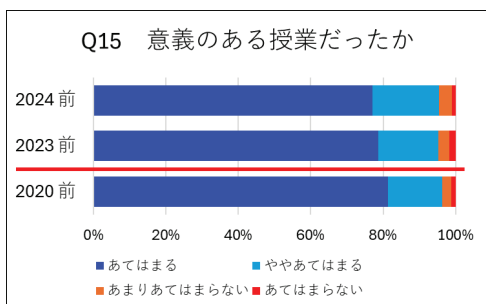
➡ 意欲向上効果は2020年の方が高かった

17

## 【総合評価】

### Q15. この授業は意義あるものでしたか。

■は、z検定で5%未満の水準で有意差あり



調査期	調査年	① あてはまる	② ややあてはまる	③ あまりあてはまらない	④ あてはまらない	総計	Mann-Whitney U test,
前期	2020	78.1%	17.2%	4.1%	0.6%	100.0%	P<.001
	2024	75.2%	19.8%	3.9%	1.1%	100.0%	
後期	2020	80.8%	15.8%	2.8%	0.5%	100.0%	P=.032
	2024	78.7%	17.6%	2.9%	0.7%	100.0%	
総計		78.4%	17.4%	3.5%	0.7%	100.0%	

- 前後期とも2020年度との有意差あり
- 両年とも高評価
- 2020年度に比べて「あてはまる」の比率が低く、前期は「ややあてはまる」の比率が高いが、「あてはまらない」の比率も高い

➡ 評価は維持されているが、熱量はやや低下

18

## 【まとめ】

### 維持・安定している点

- 出席状況（Q1）
- 教員の基本的授業運営（シラバス遵守・時間厳守）（Q6、Q8）
- 授業全体の意義評価（Q15）

### 2024年で低下傾向にある点

- 予習・復習など授業外学習（Q2、Q3、Q4）
- 学生参加・双方向性の実感（Q9、Q10）
- 学習意欲の高まり（Q14）

2024年は2020年と比較して、授業の質そのものは維持されているものの、学生の主体性・積極性・学習への没入感が弱まっている傾向が読み取れる。

今後は、授業外学習の促進や双方向的活動の強化により、学習意欲と納得感を取り戻すことを期待したい。

所 属	部 署	役 職	氏 名
九州医療科学大学	事務局	事務局長	的場 嘉男

## 【前年度結果報告】

1. 日本高等評価機構受審に関する業務を遺漏なく遂行する。  
第4期評価システムの内容を意識し業務を行い、大学全体で業務に取り組む。  
○大学全体で取り組んだ結果『適合』となった。
2. 入学者定員100%確保 応援学費等の本学の魅力をPRし定員確保に努める。  
○学部入学制205名 入学定員率68%
3. 私立大学等改革総合支援事業（タイプ1『特色ある教育の展開』とタイプ3『地域社会の発展への貢献』）での補助金獲得  
○タイプ1選定（3年連続） タイプ3不選定 選定点42（本学29点）

## 【今年度数値目標・決意表明】

1. 日本高等教育評価機構による認証評価の結果を踏まえ、指摘事項に対する確実な改善措置を講じるとともに、その他の評価項目についてもPDCAサイクルに基づく不断の見直しを行い、大学運営の質向上を図る。
2. 入学者定員100%確保。
3. 私立大学等改革総合支援事業（タイプ1『特色ある教育の展開』）の継続選定と（タイプ3『地域社会の発展への貢献』）の新規選定に向けた学内体制の整備。

所 属	部 署	役 職	氏 名
九州医療科学大学	庶務部 庶務課	課長	大石 正憲

## 【前年度結果報告】

1. 働き方や職場環境の改善に進める
  - ・ハラスメント研修を実施することができた。アンケートについては現在実施中であり、アンケートが回収でき次第速やかに集計・分析を行う予定となっている。
2. 外部環境の変化に伴う新たな委員会の設置とスムーズな運営
  - ・研究インテグリティの確保に関する規程、安全保障輸出管理規程を制定するとともに、研究インテグリティ・マネジメント委員会並びに輸出管理委員会を発足させ、海外出張・研修審査会とも連動して大学の社会的責任の履行を果たすよう努めた。
3. 日本高等教育評価機構の外部評価（自己点検報告書の作成、実施調査等）を滞りなく完了する。
  - ・日本高等教育評価機構の外部評価については、日本高等教育評価機構が定める大学評価基準に適合していると認定された。

## 【今年度数値目標・決意表明】

1. 働き方や職場環境の改善に進める。
  - ・ハラスメントを受けたときに相談しやすい環境（職場環境・学生の学修環境）を醸成すべく研修等を通じてハラスメントに対する理解を深めるとともに、研修時にグループワーク等の活動も企画する。
  - ・AI等の導入による事務職員の業務効率化に向けた検討を開始する。
2. 各種規程の整備・改定並びに各種委員会・部会の組織改編
  - ・法令等の変更に伴って、規程の見直し及び改定が必要となる場合は速やかに規程等を整備する。
  - また、教育開発・研究推進中核センターにおいて現在検討されている各種委員会の関係性、各種委員会と部会の関係性の明確化など組織改編を速やかに実施し、教職員が共に効率的に業務遂行できるよう努める。

所 属	部 署	役 職	氏 名
九州医療科学大学	附属図書館	課長	大石 正憲

## 【前年度結果報告】

1. 学習支援及び教育活動への直接の関与  
図書館のラーニングコモンズを利用して教員と連携し、新入生やゼミ生に対してオリエンテーションを実施したが利用者数の増加には繋がらなかった。入館者数 R6:22, 328→R7:20, 121
2. 研究活動に即した支援と知の産生への貢献  
研究紀要第 27 号を発行し、リポジトリに公開した。  
文献及び書籍の取り寄せ件数 371 件（例年より増加）に対応することで研究活動の支援を行った。
3. 他機関・地域との連携  
延岡市立図書館と連携して「認知症が登場する小説」をテーマに企画展示を実施した。
4. オープンアクセス加速化事業で導入した機関リポジトリ機能を利用して、リポジトリの更なる充実を図る。  
本件については未達である。

## 【今年度数値目標・決意表明】

1. 学習支援及び教育活動への直接の関与  
ラーニングコモンズの活用がスムーズに進むように支援し、教員と連携することで利用者数の増加に繋げる。
2. 研究活動に即した支援と知の産生への貢献  
研究紀要第 28 号の発行と、リポジトリへの公開を推進する。
3. 他機関・地域との連携  
延岡市立図書館との連携展示を継続する。

所 属	部 署	役 職	氏 名
九州医療科学大学	庶務部 会計課	参事	牧野 喜代子

## 【前年度結果報告】

1. 省エネルギー活動の推進  
電気使用量 4%増、ガスは 10%増、水道は現状維持を目標とした。結果、一昨年度に比べ電気は 1.05%減、ガスは 21.9%減、水道は 1.25%減となり、いずれも目標に達した。ガス使用量が突出して減少しているのは、厚生棟の空調設備をガス式から電気式に変更したことが要因と考えられる。なお金額にすると電気代 262 万円減、ガス代は 280 万円減、水道代は 1.7 万円減であった。
2. 優先順位をつけた予算執行  
修繕経費 1200 万円の目標に対し実績は 1642 万円であった。1 案件で最大金額のものは 4 号棟給水ポンプ修繕で 330 万円、種類別で総額が大きかったものはエアコン・換気扇といった空調設備の修繕で 30 件・450 万円であった。いずれも衛生環境に直結するものであり、修繕見送りは困難であった。

## 【今年度数値目標・決意表明】

1. 省エネルギー活動の推進  
電気・ガス・水道使用量の現状維持を目標とする。3 号棟利用頻度の上昇や教職員の異動に伴う空調稼働箇所が増加が見込まれるため、空調温度の管理や休業期間中の使用建物集約によりエネルギー消費の節約に努める。しかしながら 10 年前と比較し電気使用量は 30%、ガス使用量は 45%削減されており、運用努力による省エネの余地が無くなりつつあるため、旧式の空調機器の更新を検討する。
2. 優先順位をつけた予算の執行  
建物設備の老朽化が進んでいることから、設備の更新では省エネルギーに繋がるものを優先的に実施する。建物等の修繕では今後の維持に資する箇所と施工を優先し、修繕経費 1000 万円を超えないことを目標とする。

所 属	部 署	役 職	氏 名
九州医療科学大学	教務部 教務課	課長	齋藤 千亜里

## 【前年度結果報告】

## 1. 退学者減少に向けた取り組み（継続）

結果：学部退学者19名、退学率は19名/903名 2.1%（昨年2.0%）

退学者は昨年度同様となったが、退学率としては2.1%と0.1%の増となった。除籍者は増加（1名→5名）している。転学科5名・通信転学科2名・ハイブリッド2名となった。

学生の連続欠席の情報をチューター教員へ配信し、学生動向を早期対応につなげた。

## 2. 学生満足度向上に向けた取り組み（継続）

教務課員（実習センター）全員で各種情報を共有し、丁寧な学生対応（窓口等）を行うことができた。

フローチャート作成は取り組むことができたが、完成に至らなかった。研修会への参加は課員全員が積極的に学内・学外の研修会へ参加し、学生サービスにつなげた。

## 【今年度数値目標・決意表明】

## 1. 退学者減少に向けた取り組み（継続）

教学マネジメント委員会やアカデミック・アドバイジング推進機構（AAP）の設置に伴い、教務課・教育イノベーション課・学生課・キャリアサポートセンター・ラーニングサポートセンターの各部署の連携を図り、情報共有を強化することで、総合的な学生サポートを行い、退学者0を目指す。

## 2. 学生満足度向上に向けた取込（継続）

前年同様、課員の情報共有、丁寧な窓口対応を行い学生満足度向上に努める。また、「授業に関する契約書」であるシラバスに示された「評価方法」「教科書（準備物など）」などが現状と相違が生じないよう重要性を周知し、学生の信頼につなげる。

所 属	部 署	役 職	氏 名
九州医療科学大学	教務部教育イノベーション課	課長	井上 真紀子

## 【前年度結果報告】

## 教育イノベーション課

1. 学修成果の可視化を推進するとともに、教育成果の把握・可視化を目指す。

結果：学修ポートフォリオおよびマイステップの利用促進を図るため、学生・教員への案内に加え、ラウンジエリアに掲示するなど利用促進を試みた。入力の確認がシステム上、簡単に確認することが厳しい状況であるのが課題である。過去2年分の成績分布表を作成し、学科へ情報提供した。

2. アセスメント運用計画（案）を再検討し、教学マネジメントの推進のために必要とされる学内情報を収集し紐づけ分析を試みる。

結果：アセスメント運用計画については、教育イノベーション委員会で検討を行った。APの評価指標の試案を作成し、今後内容を検討していく予定である。

## 【今年度数値目標・決意表明】

1. 学修成果の可視化を推進し、教育成果の把握・可視化を目指すため、現在の取り組み（学修ポートフォリオ、マイステップ）について、利用促進及び定着を図る。引き続き、成績分布表を作成し、平準化の検討を行う。

2. アセスメント運用計画（案）に基づき現在継続中の分析を行い、CPについても検証を行う。各学科および各部署とコミュニケーションを図り、必要なデータを適切なタイミングで提供できるよう連携を強化する。

3. データを有効活用するため、各種アンケートの回答率向上を図る。

・授業アンケート：今年度目標 50%（昨年度：前期 42.4%、後期：25.1%）

・学修行動・学生生活に関するアンケート：今年度目標 60%（昨年度 51.6%）

所 属	部 署	役 職	氏 名
九州医療科学大学	教務部 通信教育事務課	次長	矢野 朋光

## 【前年度結果報告】

## ① 資料請求から入学につながる広報活動の実施

- ・出願書類等の作成時期を早めるとともに出願時期に期日が迫っている広告を展開していく。

**結果：**資料請求は2024年度2919件に対し2025年は1567件で減少したが本学HPからの資料請求が8%増加であり、本学に興味をもった層からの資料請求が増加したと考えられる。

## ② 学生サポート体制の充実

- ・バーチャルキャンパスの利用を推進し、引き続き学習相談、入学相談を実施していく。

**結果：**学習相談、入学相談は積極的に実施した。バーチャルキャンパスについては利用促進ができなかった。

## ③ 通信教育のオンライン化の充実

- ・現在、スクーリング、科目単位認定試験のみであるが添削課題をオンライン化するとともにオンデマンド授業の導入を検討していく。

**結果：**添削課題は今年度よりオンライン化したがオンデマンド授業については今後の検討課題となった。

## 【今年度数値目標・決意表明】

## ① 資料請求から入学につながる広報活動の実施

- ・入学者確保のための広報活動を充実させ入学者150名を目指す。
- ・出願時期の周知徹底とSNS広告を引き続き実施していく。
- ・リターゲティング広告の実施

## ② 学生サポート体制の充実

- ・学習相談、入学相談の積極的な実施。
- ・スクーリングも今年度からTeamsを利用するので円滑におこなえるようにマニュアル作成等学生サポート体制を充実させる。
- ・ハイブリッド生のサポートを継続的に行う。

所 属	部 署	役 職	氏 名
九州医療科学大学	学生部 学生課	課長	松本 祐子

## 【前年度結果報告】

○**学生満足度の向上：**パニック発作や不安を感じた際に安心して落ち着ける空間として、カームダウンルームを設置。留学生支援として、英語村との連携によるイベントを開催。また、教育後援会留学生支援経費を活用して、日本人学生との交流会を実施した。

○**事件・事故の防止：**当課に届出のあった学生の交通事故については、第1当事者(加害者)となる事案が23件で昨年度より11件増加した。なお、そのうち1件は酒気帯びによる接触事故で、賞罰委員会に諮る事案が発生した。

○**防災に対する意識向上：**備蓄品整備3か年計画の2年目として、災害食270人分、簡易トイレ5,500個を整備した。また、教育後援会からの特別援助金を利用してソーラーパネル付蓄電池3台を整備した。

○**相談しやすい環境づくりと相談スキルの向上：**私大協や九州地区大学が主催する学生支援に関する研修会に積極的に参加し、情報共有を図った。

## 【今年度数値目標・決意表明】

## (1) 【3つの力】で学生満足度の向上をめざす(すべては窓口対応から始まる)

- ①安定した傾聴力 ②課題の発見力 ③的確な判断・情報発信力

## (2) 事件・事故・防災(災害)に対する「備え」と「危機管理」の意識向上

- ①事件、事故を発生させない(注意喚起の徹底)(飲酒事故防止の徹底)(交通事故ゼロを目指す)
- ②事件については関係部署・機関と連携して早期解決をめざす(抱え込まない)
- ③備蓄品整備計画(3年目)の遂行

## (3) 学生生活に関する学生の意見・要望の把握

- ①相談しやすい窓口対応と環境の整備
- ②学生支援にかかわる研修会への参加(情報収集と情報共有)→学生支援の質の向上に努める

所 属	部 署	役 職	氏 名
九州医療科学大学	キャリアサポートセンター	課長	猪股 健久

## 【前年度結果報告】

1. 就職目標 100%  
【結果】 94.4% [99.0%] ※ [ ] は 2025 年度最終
2. 修学支援新制度での要件を満たす「就職・進学率」90%以上  
【結果】 93.0%
3. キャリア支援の強化  
質の高いキャリアサポートを目指し、教職員や外部機関と連携し学生の個々のキャリア適性や志向性を把握し適切なキャリア選択を支援した。また、学科のニーズにあった就職説明会や業界研究会、マナー講習などを実施した。公務員合格者は10名、宮崎県内就職者数は56名であった。

## 【今年度数値目標・決意表明】

1. 就職目標 100%
2. 修学支援新制度での要件を満たす「就職・進学率」90%以上
3. キャリア支援の強化
  - ①アカデミックアドバイジング推進機構としての連携を強化し質の高いキャリア支援を展開する
  - ②学科のニーズに合うイベントを開催し就職試験への実践的な対応力を養成する
  - ③公務員を含む地元就職者を増やす

## 令和8年度 部門目標（事務部門）

所 属	部 署	役 職	氏 名
法人本部	入試広報室	室長	猪木原 恵

## 【前年度結果報告】

2026年度入試 順正学園の大学・専門学校の総志願者数は、1,147名（前年度1,265名）で前年対比90.6%、入学者総数は、576名（前年度598名）で前年対比96.3%であった。学園全体の充足率は全体定員870名中入学者数576名で66.2%と前年度の目標であった全学科定員確保は未達となった。また留学生200名入学の目標については、秋・春入学者数196名（昨年164名）となり目標は未達となった。

	志願者数			入学者数			入学定員 充足率
	2026年度	2025年度	対前年比	2026年度	2025年度	対前年比	
吉備国際大学	658	727	90.5%	350	364	96.1%	66.0%
九州医療科学大学	455	494	92.1%	205	211	97.1%	68.3%
九州医療科学大学専門学校	34	44	77.2%	21	23	91.3%	52.5%
総 数	1,147	1,265	90.6%	576	598	96.3%	66.2%

## 【今年度数値目標・決意表明】

## ◎入試

入学者選抜において、受付・入試実施・発表・入学手続までの入試業務をミスのないよう行う。

## ◎広報

各設置校のブランドビジョンを柱に学部・学科の情報発信を行い、入学定員充足率100%を目指す。留学生募集については、秋、春、留学生別科を含めて200名の入学を目指す。

## 令和8年度 部門目標（事務部門）

所 属	部 署	役 職	氏 名
法人本部	入試広報室	参事	高木真理子

## 【前年度結果報告】

2026年度九州医療科学大学の学部志願者数は、455名（‘25：494名、‘24：429名、’23：775名、’22：928名）で前年対比92%、入学者数は、205名（’25：211名、’24：166名、’23：184名、’22：210名）で定員充足率68.3%であった。

全国の受験者が年内入試にシフトしており、本学の年内入試志願者は150名（入学者128名）と入学者の62%（’25志願者152名（入学者127名）、’24志願者100名（入学者98名）、’23志願者118名（入学者93名）、’22志願者136名（入学者111名）となった。昨年度掲げた目標の年内入試志願者200名以上、一般入試500名以上には及ばず、一般入試の歩留まり30%以上についても達成できなかった。

（歩留まり27%）※入学者数／合格者数

※一般入試受験者数298名（入学者数71名（24%）’25：331名（入学者数81名（26%））’24：324名（入学者64名（20%））’23：652名（入学者87名（13%））、’22：778名（入学者88名（11%））※2020年度586名：入学151名（25%）

## 【今年度数値目標・決意表明】

◎入試：受験生の多様なニーズに対応するため、入試制度の見直しを行い、学科のポリシーに沿った入学者選抜の実施、受験生に対して丁寧な対応やミスのない実施に努める。

## ◎広報

- ・生命医科学科の新コースにスポットを充てた広報による大学全体の知名度アップをはかる。
- ・県内、隣接県、離島を中心とした募集活動を学科教員と協力して実施し、入学者数250名を目指す（昨年比120%、定員充足83%）。

数値目標：県内からの入学者150名以上（昨年度106名）、年内入試入学者160名以上（昨年度128名）、一般入試入学者90名以上（昨年度71名）

6～8月オープンキャンパス参加者数昨年対比110%（高校生550名以上）をめざす。

2026 自己点検自己評価総会（事務部門）参考資料

学科	志願者数				入学者数								充足率	
	2026	2025	2024	2020	2026	歩留	2025	歩留	2024	歩留	2020	歩留	2026	2025
スポーツ	97	112	92	60	66	68%	68	60%	62	67%	37	62%	83%	85%
臨床福祉				26							11	42%		
薬	156	162	140	253	48	31%	50	31%	38	27%	66	26%	48%	50%
動物	58	73	66	78	29	50%	34	47%	22	33%	28	36%	72.5%	85%
生命医科	96	84	84	193	36	38%	23	31%	26	31%	66	34%	90%	57.5%
臨床心理	48	63	46	108	26	54%	36	57%	18	39%	48	44%	65%	90%
合計	455	494	429	718	205	45%	211	43%	166	39%	256	36%	68.3%	70.3%

入学者

★スポーツ健康福祉学科

年度	宮崎県内		県外		留学生	高卒認定 ・その他	計	定員	充足率
2026	33	50%	31	47%	1	1	66	80	82.5%
2025	39	57%	29	43%			68	80	85%
2024	33	53%	28	45%	1		62	80	78%

★臨床心理学科

年度	宮崎県内		県外		留学生	高卒認定	計	定員	充足率
2026	16	62%	10	38%			26	40	65%
2025	28	78%	8	22%			36	40	90%
2024	13	72%	5	28%			18	40	45%

★薬学科

年度	宮崎県内		県外		留学生	高卒認定 ・その他	計	定員	充足率
2026	30	63%	15	31%	2	1	48	100	48%
2025	31	62%	18	36%		1	50	100	50%
2024	17	45%	20	53%	1		38	100	38%

★動物生命薬科学科

年度	宮崎県内		県外		留学生	高卒認定	計	定員	充足率
2026	6	21%	23	79%			29	40	72.5%
2025	10	29%	23	68%	1		34	40	85%
2024	7	32%	15	68%			22	40	55%

★生命医科学科

年度	宮崎県内		県外		留学生	高卒認定	計	定員	充足率
2026	21	58%	15	42%			36	40	90%
2025	12	52%	11	48%			23	40	58%
2024	12	46%	14	54%			26	80	33%

志願者・入学者

★スポーツ健康福祉学科

年度	宮崎県内			県外			その他	入学者数	志願者数	歩留まり率
	入学者	志願者	歩留	入学者	志願者	歩留				
2026	33	50	66%	31	47	66%	2	66	97	68%
2025	39	67	58%	29	45	66%		68	112	61%
2024	33	45	73%	27	46	60%	1	61	92	66%

★臨床心理学科

年度	宮崎県内			県外			その他	入学者数	志願者数	歩留まり率
	入学者	志願者	歩留	入学者	志願者	歩留				
2026	16	32	50%	10	16	63%		26	48	54.1%
2025	28	43	65%	8	20	40%		36	63	57%
2024	13	32	41%	5	14	36%		18	46	39%

★薬学科

年度	宮崎県内			県外			その他	入学者数	志願者数	歩留まり率
	入学者	志願者	歩留	入学者	志願者	歩留				
2026	30	66	45%	15	86	17%	4	48	152	31.5%
2025	31	84	37%	19	83	23%		50	167	30%
2024	17	62	27%	18	75	24%	4	38	141	27%

★動物生命薬科学科

年度	宮崎県内			県外			その他	入学者数	志願者数	歩留まり率
	入学者	志願者	歩留	入学者	志願者	歩留				
2026	6	11	55%	23	47	49%		29	58	50%
2025	10	18	56%	23	52	44%	1	34	70	49%
2024	7	15	47%	15	51	30%		22	66	33%

★生命医科学科

年度	宮崎県内			県外			その他	入学者数	志願者数	歩留まり率
	入学者	志願者	歩留	入学者	志願者	歩留				
2026	21	54	39%	15	42	36%		36	96	37.5%
2025	12	38	32%	11	44	25%		23	82	28%
2024	12	34	35%	14	50	28%		26	84	31%